



小兒療治調法記

ヤ 9
1141





91-1980

小兒療治調法記叙

一日書林川勝氏ある者二帖の書を  
 携へ來り。少くも那須玄竹先生乃編  
 集醫方聚要の中小兒門也稱ぶる  
 和字と爲て世に便わらるる人  
 といふ。予辭せざるに忍びて譯して和語  
 とし名りて小兒療治調法記といふ  
 始終和語を以て以て輕易小むる事  
 勿し其義了於てハ一那須先生  
 乃意也先生の意ハ一書以引て  
 即古人乃意なるを但し今痘麻の  
 二門小至てハ増補せざる所あり  
 覽者那須先生并古人乃意不

わびと疑ふ人として恐き惟此二  
 門の方論乃下に其本據を記し餘  
 八聚要又見たま記す及及び知人  
 と欲する人八聚要は披て知へし若  
 人此書乃和字ある或鄙しと惣モ  
 只其義を用ゆることあり何ぞ保  
 嬰乃一助とありげり人哉あま予  
 辞せり忍びづるの意也

洛東 養拙齋退春題



小兒療治調法記目錄

- 小兒初生乃調法 初丁
- 小兒乃病症以知法 三丁
- 眼乃内 面乃色并圖
- 外証以察以 五丁
- 手の紋并圖 六丁
- 小兒乃脉以診法 六丁
- 小兒必死乃惡証 七丁
- 小兒乃雜病胎熱 八丁
- 一方
- 胎寒 當歸散
- 臍風撮口 五通膏 十丁
- 一方 香螺膏

●宣風散 十丁

●大小便閉 十二丁 ●釀乳乃法

●萬億丸 十二丁

●破泡 ●貼頰 一方 十三丁

●不乳飲并腹痛 食積 一方 十三丁

●葱乳湯 ●茯苓丸 ●白姜散

●一方 專 ●消積丸 ●安虫散

●一方 專 ●一方 ●集効丸

●香橘餅子 十六丁 ●中華餅

●胎驚 ●至聖保命丹

●一方 十七丁 ●夜啼

●一方 十七丁 ●至聖保命丹

●一方 十丁 ●導赤散 ●通心飲

●龍齒散 ●五味子散

●乳頭散 ●黄土散 十九丁

●蟬花散

●客忤附中惡

●犀角散 ●一方 九丁

●生赤 胎黃

●牛黃散 ●藍葉散

●清涼飲子 ●生地黄湯 九丁

●重舌 木舌 弄舌

●當歸連翹湯 ●千金方

●一方 十三丁 ●一方 ●一方

●雪消散 ●一方 ●瀉黃散

● 吃泥丸 九丁

● 清胃養脾湯 ● 砂糖丸

● 滯順

● 温脾丸 ● 通心飲

● 變蒸丸 九丁

● 醒胃散 九丁 ● 紫霜丸

● 人參散 九丁 ● 調氣散

● 神仙黑子散

● 解顛

● 人參地黃丸 ● 一方 九丁

● 栢子仁散 ● 三辛散

● 顛陷

● 一方 ● 當歸散

● 顛填

● 一方 九丁 ● 大連翹飲

● 龜胸

● 瀉白散 九丁 ● 百合丹

● 龜背

● 松葉散 九丁 ● 灸法

● 手拳

● 脚拳 ● 鶴膝 ● 海桐皮散 九丁

● 薏苡丸 ● 加味地黃丸

● 項軟筋軟

● 五加皮散 ● 健骨散 ● 生筋散

● 一方 九丁 ● 防風丸 ● 羚羊角散

● 小茸丸 九丁

● 脫囊 卅四丁

● 一方

● 一方

● 脫肛

● 提肛散 卅五丁

● 一方

● 洗藥

● 一方

● 一方

● 盤腸氣痛

● 乳香散 卅丁

● 茴香散

● 木香散

● 遺尿

● 破故紙散 卅丁

● 桂肝丸

● 益智二伏丸

● 魅病

● 龍膽湯

● 行遲 卅八丁

● 調元散

● 加味地黄丸

● 羚羊角散

● 五加皮散 卅九丁

● 齒運

● 芎藭散

● 一方

● 菖蒲丸 卅丁

● 急驚風 卅丁

● 敗毒散 卅丁

● 人參湯

● 鎮驚散

● 抱龍丸 卅三丁

● 利驚丸 卅三丁

● 宣風散

● 五福化毒丹

● 瀉青丸

● 金箔丸

● 琥珀散 卅五丁

● 灸法

● 慢驚風 卅六丁

● 醒脾散

● 黃芪湯 卅五丁

● 益黃散

● 錢氏白朮散

● 一方

● 補脾湯 卅丁

● 紫金錠子

● 補脾湯 卅丁

● 紫金錠子

● 驚後乃調理 ● 定志丸 單九丁

● 牛黃鎮驚丸 ● 灸法

● 慢脾風 五十丁 ● 黑附湯 五丁

● 川烏散 ● 補脾益真湯 五丁

● 前朴散 五丁 ● 異方銀白散

● 天鈞 五丁 ● 九龍控涎散

● 鈞藤飲 ● 發搐 五丁

● 大青膏 ● 涼驚丸 五丁

● 錢氏安神丸 ● 牛黃膏 五丁

● 浴體乃法 ● 塗額乃法 五丁

● 癩証 五十八丁 ● 五色丸 五丁

● 珠砂滾涎丸 ● 參朱丸

● 虎睛丸 六十丁 ● 牛黃膏

● 噤風 ● 辰砂膏 五丁 ● 單方

● 馬脾風 ● 牛黃奪命散 ● 無價散 五丁

● 諸疳 ● 消疳飲 五丁 ● 消疳湯

● 肝疳 ● 生熟地黄丸 六丁 ● 天麻丸

● 脾疳 ● 靈脂丸

● 五疳保童丸 ● 益黃散 五丁

● 心疳 ● 茯神丸 ● 龍膽丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

● 安神丸 ● 化虫丸 ● 肥兒丸 五丁

肺疳 六十二

清肺湯

化蠶丸 六十二

蝦蟇丸

腎疳

地黄丸 六十九

熱疳

胡黃連丸

冷疳 七十一

至聖丸 〇 木香丸

脊疳

大蘆薈丸

腦疳

龍膽丸 七十二

筋骨內外鼻疳

蘭香散

白粉散

麝香散 七十二

疳積

加味肥兒丸 一方

香蟾丸 七十三

蘆薈丸

一方 七十四

祖傳檳榔丸

蛇疳

下虫丸 七十五 妙應丸

丁奚哺露疳

十全丹 七十六

疳勞

黃芪湯 敵魚血煎

疳瀉痢 七十七

香薷丸 木香丸

四治黃連丸

秘傳保安丸 七十八

無辜疳

癰疾 七十九

淨府湯 八十一

千金消癰丸

益兒餅 八十二

肥兒丸

白餅子 紅丸子

大黃膏

諸熱 八十三

大連翹飲 八十三

五福化毒丹 全厚

地骨皮散

生犀散

瀉黃散 八十五

加減瀉黃散

甘露飲子



● 甘桔湯 八十六丁

● 感冒附咳嗽 ● 惺惺散

● 羌活膏 ● 香葛散 ● 參蘇飲

● 參花散 ● 一方 ● 蜜梨噙

● 吐瀉 ● 木瓜丸 八十八丁

● 白餅子 ● 玉露散 八十九丁

● 温中丸 ● 硃砂丸 ● 朱沈煎

● 一方 ● 助胃膏 ● 啓脾丸

● 參苓白朮散 九十二丁 一方

● 一方

● 痘瘡 九十二丁 ● 眞疑乃辨

● 預防乃方 九十二丁 ● 内外乃辨治

● 升麻葛根湯 ● 木香參蘇飲

● 四君子湯 ● 和中散

● 治法 ● 四順飲 九十七丁

● 紫草化毒湯 ● 五苓散 九十八丁

● 三注乃治例 ● 惡証百

● 穢氣戒避 百丁 ● 又禁忌

● 發熱恒行 ● 蘇解散 百五丁

● 敗毒散 ● 辰砂益元散 百六丁

● 人參羌活散 ● 紅綿散 百七丁

● 蘇發散 ● 四苓散

● 藿香正氣散 百八丁 ● 和中湯

● 理中湯 ● 清肺飲 百九丁

● 犀角地黄湯 ● 二寶散

● 出痘 百十丁 ● 凉血化毒散 百十一丁

● 固陽散火湯 ● 清地退火湯

● 秦朮湯 ● 化毒湯

● 連翹升麻湯 ● 解毒托裏湯

● 紫草透肌湯 ● 消毒飲

● 紫草湯 ● 四聖散

● 十神解毒湯

● 太乙保和湯 ● 羌活散鬱湯

● 益元透肌散 ● 九味神功散

● 痘出て快くはらる五証

● 五積散 ● 正氣散 ● 調解散

● 小柴胡湯 ● 人參白虎湯

● 肉荳蔻丸 ● 絲瓜湯

● 阮氏萬全散 ● 透肌散

● 解毒防風湯 ● 十奇散

● 如聖湯 ● 甘露飲子

● 起脹 ● 保元湯

● 百祥丸 ● 宣風散

● 保嬰百補湯

● 貫膿 ● 內托散

● 二物湯 ● 敗草散

● 收厭血 ● 木香散

● 回陽酒 ● 異功散

● 定中湯 ● 附子理中湯

● 回天甘露飲 ● 手拈散

● 結痂 ● 人參固肌湯

● 補中益氣湯 ● 加味保元湯

●還元附餘毒痘後乃餘症 百五十四

●八物湯 十全大補湯

●牛房子飲 五香連翹湯

●十六味流氣飲 黃連解毒湯

●小承氣湯 黃連阿膠丸

●駐車丸 吹雲散 一方

●化毒散 決明散 撥雲散

●退翳散 蟬菊散 一方

●涼肝明目散 望月砂散 百五十五

●一方 麥門冬飲 清金散

●射干湯 犀角黃連湯 百五十六

●走馬牙疳乃藥 消風散 百五十七

●夾班 玄參升麻湯

●生肌散 百五十四 升麻散 百五十五

●夾疹 荊防解毒湯 百五十五

●麻疹 二仙湯 百五十七

●防風通聖散 柴苓湯 百五十八

●犀角解毒湯 當歸六黃湯 百五十九

●茅花湯 四物湯

●瀉白散 黃連杏仁湯

●平胃散 三黃丸 百六十二

●香連丸 黃芩湯

●水痘 百六十三

●小麥湯

小兒療治調法記

● 小兒初生之調法



小兒生也下ての<sup>も</sup>啼聲出らる前  
 小帛<sup>も</sup>ても或ハ縮めても指<sup>は</sup>巻包も  
 黄連甘草等分濃煎<sup>じ</sup>たる汁<sup>を</sup>  
 其指<sup>を</sup>蘸<sup>し</sup>小兒乃舌の上<sup>に</sup>よわる古血  
 其外<sup>に</sup>穢<sup>ら</sup>ハ<sup>ハ</sup>き物<sup>は</sup>悉<sup>く</sup>拭去<sup>べし</sup>  
 若拭去<sup>ぬ</sup>とわ<sup>る</sup>く<sup>く</sup>既<sup>に</sup>啼聲<sup>出</sup>て  
 古血穢<sup>ら</sup>ハ<sup>ハ</sup>物<sup>は</sup>腹中<sup>に</sup>吞<sup>む</sup>る<sup>ハ</sup>  
 右<sup>に</sup>煎<sup>じ</sup>汁<sup>を</sup>見<sup>し</sup>口中<sup>に</sup>灌<sup>ぎ</sup>吞<sup>む</sup>む<sup>り</sup>  
 暫<sup>く</sup>わ<sup>る</sup>く<sup>く</sup>惡沫<sup>は</sup>吐<sup>き</sup>出<sup>し</sup>其<sup>の</sup>後<sup>に</sup>乳<sup>を</sup>  
 吃<sup>す</sup>べし然<sup>る</sup>と<sup>は</sup>疳<sup>が</sup>疔<sup>乃</sup>出<sup>る</sup>と<sup>輕</sup>  
 と<sup>あ</sup>り<sup>わ</sup>る<sup>ハ</sup>又<sup>に</sup>水<sup>を</sup>飛<sup>ば</sup>し<sup>た</sup>辰砂<sup>は</sup>自<sup>ら</sup>蜜<sup>を</sup>

みて煉。小豆乃大豆より生きて三月の  
内。一日お一粒づつ乳にて服せむべし。  
然則ハ胎毒痘疹乃患以免くとも  
●初生三五日の内。頭成て抱き  
出金くくべ。襤褸乃類り包きけり。  
母て置べし。然則ハ驚癇の病致せ  
あどあしとくべ。●乳と食と一時は  
混與金くくべ。疥癬痞積乃病致生せ  
るとあしあせ。●児衣ハたらく富貴乃  
家ハたたくも新き物以用てせるとあ  
せ七八十歳ある人乃古き衣物を縫  
改て児衣とせべし。然則ハ其見病多き壽  
長しとくべ。●児生きて四五ヶ月ハ

只乳ををを吃し。六ヶ月迄して  
始て稀粥以哺らむべし。二三歳已  
前ハ葷腥き物と與せ。其見疾多し。  
二三歳已後藏胎稍壯よあせて哺ら  
べし。若五歳過て。食らむれハ彌壽の  
旨。回春等乃書お見へたり。●初浴ハ  
益母草忍冬の前汁をわびせをし。  
或ハ壽世保元ハ五根湯と以てわびす  
と。●諸瘡を生せどとくべ。五根湯ハ  
桑根桃根柳根梅根槐根苦參白芷  
各一兩右水煎よするあり。●臍帯ハ  
刀以て断べし。毛帛絹の類あて臍  
帯を包て咬断せし。或ハ竹刀以て

断也。若くは短し。其断とわゆる長も  
悪く短も悪し。生きたる見乃足  
裏の長さ程断へ。但し初浴を  
いせ終て臍帯を断る。若前小断  
ハ初浴の時其断口より水氣腹に入て  
臍風を生ず。然ども手廻し悪き故  
初浴とも前小臍帯を断其臍の方  
に付たる断口を糸にて堅結し初浴を  
わびせし。然則ハ水氣腹中を通ず  
し。臍風臍着等の患は免ちる也。●  
初浴臍帯等の事調へ畢べ見乃口中  
舌の下。脣の上。兩頬を能見て。細小の  
白泡わし。指めて洗て去其惡汁也。

拭い取べし。若惡汁咽入ハ舌病喉  
病等乃種種の病生むる也。

●小兒之病症候知法

夫小兒ハ古くは亞科といつて其病  
証を語と能ハセ。其上脉氣のよ  
體ありけり。只眼の内并面の色或  
ハ外証を察し。或ハ虎口三關の紋  
候考へ見て。其病証善惡を知し  
肝要也。

○眼の内以見とハ眼ハ五藏六腑神氣  
乃集る所也。其兩眼を見。精光  
あり。黒精小。運轉の氣あり。睫ハ蜂芒  
あり。魚乃目。猫の眼。形小似る。死

仮令病甚く外に困ると危  
 く見ゆらとも眼乃内ふ神氣ありハ  
 活き症と知ま神氣有無の見分ハ  
 筆小何らも記し自心  
 通し心を得ておとび知べ  
 ●其面乃色以見と八面の赤ハ心藏  
 の病ありて風熱多ク面青肝藏  
 此病ありて驚風あり面乃黄カ  
 脾藏怯し疳積あり面乃白ハ肺  
 藏の虚寒カ面乃黒氣と生ずハ  
 腎藏敗きて命亡しと知也

面之圖



左の腮ハ肝ノ属し其色青を順と  
 白以逆とす若赤ハ肝經乃風熱  
 拘急を主とす青黒ハ驚風腹痛  
 淡赤ハ潮熱痰嗽を主とると知べ  
 ●右乃腮ハ肺ノ属し其色白以順  
 とす赤を逆とし若赤と甚きハ咳嗽  
 喘急悶亂し水以飲たると其邪腎ハ  
 傳せ小便赤く流る或ハ淋閉し

通ぜらるることをかたしと知べし

●額ハ心ニ属し其色赤きハ順と

し黒きを逆とす若青黒きハ驚馬風

腹痛ニ瘕瘕啼とを主とす少

黄あるハ盜汗頭髪乾き驚痛骨熱

乃症と知を

●鼻ハ脾ニ属し其色黄あるを

順とし青きを逆とし若赤きハ脾

經の虚熱飲食進せ深黄あるハ小便

通ぜず或ハ鼻燥き衄血を出せ症と

知べし

●頰ハ腎ニ属し其色黒きを順と

し黄あるハ逆とす若赤きハ腎と膀胱

熱ありて小便通ぜらるることをか

たしと知べし

●其外証以察せると甚齒咬す

ハ驚を發し口ハ涎沫を吐て啼叫

ハ虫の痛あるを昏睡し能嚏者ハ瘡

疹を發せんとする多し吐瀉し昏睡

して睛を露す者ハ胃の虚あり

睛ハ露らる者ハ胃乃實熱なるを稠

涎を流し血以咯者ハ肺乃熱あるを

青白き物ハ瀉し敷とらるれば

ハ胃の冷なるを乳とらるれば傷食と

知て宜くありと下せし身熱し

て水を飲ハ内熱あり赤黄



物以爲之。爲る。八胃の熱毒あり。呵欠して。面赤き。八風熱あり。呵欠して。面青き。驚風あり。呵欠して。面黄あり。八脾虚乃驚風あり。呵欠して。多睡あり。八内熱あり。呵欠して。氣熱する者あり。傷風ありと知べし。

●其虎口三關乃紋見と小兒一歳より六歳まで。手の虎口三關の紋を見て病乃輕重は知べし。或ハ壽世保元回春等小ハ三歳より三關の紋を見て三歳より後ハ醫者此一指以て寸關尺乃三部と候とあせわむ。

虎口三關之圖



男ハ左女ハ右手乃入さう指の本乃節を風關と名づけ。爰は脈をきハ病ありきなり。若脈あり病とあせ。輕く治し易し。第二節と氣關と名づけ。爰は脈見もきハ其病重し。第三節を命關と名づけ。爰は脈ありきハ其病劇し。九死一生あり。若又三關は脈通る度りてあせ。

其病極て重く必死の証と知べし

● 其脉の色紫あるハ熱と。赤ハ傷

寒と。青ハ驚風と。白ハ疳の病

と。黒ハ惡氣の中らるる。黄多

ハ脾困むと知べし。或ハ又淡赤ハ寒

熱乃邪氣表にある。深赤ハ傷寒痘

疹と。脉紋乱る時ハ其病久きと

細あるとハ腹痛啼し甚く

して乳食消せらるるを鹿くして

直し指甲或射様おわらハ驚風

驚風あるを黒くして墨のどくあるハ

必死乃証あると知べし

● 小兒之脉診法

小兒六歳より後ハ四指者乃大指也

よりして大人の脉と同一所乃寸關

尺此三部を候ひ見らる一息の間

一。脉數六七度わらハ平脉なりて病

なきあり。八九度わらハ熱と。五度

わらハ内寒と。端直ありて琴の糸

を按ぶとくある弦脉ありて風癩と

知べし。手と重く按て筋骨に至

て琴の糸のゆるみとを按ぶと

る。沈緩乃脉ありハ食傷と知べし。

或ハ又按る指の下極て大は往來

力ありて勁急ある洪緊乃脉ありて

汗ありハ傷寒あり。軽く按て琴乃

ゆるゆると。按てゆるゆる浮緩の脈よ  
して汗あらし傷風なり。軽く按て。  
指乃下極て大に浮洪あるハこそ風  
熱多り重く按て筋骨よゆる細  
く沈細の脈乳食乃積あり重く按  
てゆるゆる力あつて沈緊ある腹中  
は痛あつたり。此外委細の事を知  
んと欲ハ諸書の小兒門を考へ見て  
あきと知べし

●小兒必死之悪証

眼乃内は赤脈生じ腫を貫き或  
ハ額門腫起り又紅らつり爪ま  
黒く鼻乾燥肚大りして青筋のぞ  
其啼聲鴉の急は啼がごとくうらた  
口を開て舌は出し或ハ嚙咬し  
目直視睛働かず。口氣急ありて啼  
ともせせ口中長虫を吐出せし  
等の小兒ハ必死乃悪証ありて十人  
に一人も生る者あまありと知べし

●小兒之雜病

●胎熱

●胎熱とハ小兒胎中あて熱液受  
生きた下て身熱し面赤く眼液  
閉口中乃氣熱し。焦れ啼燥渴を  
るあり。こそと治むるハ

一方 甘草一ネ 黑豆二ネ 淡竹葉五箇

右到一劑子燈心七根入て水煎  
一一度度少づ服や又乳母  
よ多く服ち先てより

●胎寒

●胎寒とハ小兒胎中にて寒を受  
生きた下て面青く手足冷大便青く  
腹ひさげや痛く寒慄をいふ。こま  
を治せらるる

當歸散

當歸 肉桂 白姜 麝 炮 香附子  
木香 甘草  
右各等分末して一度は一字  
づ乳汁を調へ與但一日は二度

●臍風撮口

●臍風とハ臍帶と断時其断口より  
風冷水濕を侵るる因て生じらるり  
或ハ胎中より熱毒を稟とわきバ  
児生じると其臍を按視し硬直  
なり。こまは定て臍風あり必ず  
臍より一道乃青筋を出し吐  
至ア却て兩岔と生じて心よ至る  
者ハ必ず死せりと知べし青筋初て  
發る時急て燈心を用て香油  
蘸し青筋の頭より兩岔の盡  
る處まで燈燎し截住ら

小兒調法記

心と攻とを致さしめず。更ニ艾を以て中脘と灸すると三火して内は萬億丸一二粒を服し。以て其胎毒を世とべ。●中脘の一穴。臍の上四寸より。寸法ハ鳩尾の上。岐骨の際より下。臍の真中まで八寸あり。とモ。是と以て臍上の四寸計知。萬億丸乃方ハ 十三丁目

●撮口とハ胎氣熱と挟む。因て風邪臍に入其毒心脾の二經より流る。舌強。唇青。口を撮。で啼聲出さると。其穴の齒齦乃上を見。小泡子あり。粟粒の状乃

急で青き綿。ふても布ふても。軟る物。温水に浸し。手指を裏。軽くまを破せ。即口を開て安。し。甚き者。牛黄一分と竹瀝。とて調へ。口中。滴て入。せ。即愈。るあり。

五通膏 臍風撮口治法

生地黃 生姜 葱白 蘿蔔子

田螺肉

右各等分搗爛し。臍乃四方。指の厚程。附置。一時。む。を。あり。て。屁下。泄。と。あり。て。愈。る。なり。小兒臍帶。以。断。す。法。乃。ど。く。る。あり。ず。

七日乃内よ。風出ることわへん

一方 直姜蠶炒

末と一蜜とを調へ口を敷或ハ

乳頭乃上帯の下と亦可あり

香螺膏 臍風腫て硬く盤のごとく

大ゆつと治ま

田螺三箇 麝香少許

右搗爛し臍乃上は附須臾わを

再び附易きハ腫痛と立どあるや

消ま

宣風散 初生乃兒臍風撮口啼と

多く乳飲す口より白き沫と出ると治ま

全蝎二十箇頭尾金き者酒と用てわが

麝香 一字研末

右和勻へ細末し一一度は平字

ツ金銀の煎湯とて調へ服まじべ

● 大小便閉

● 初生の兒大便小便共は通ぜざ

腹脹て死せんと欲せば急は婦人

とて熱湯とて口と漱しあ。小

児の大便道小便道并は臍の下。兩

手乃内真中兩足乃裏と真中右七ヶ

處と吸てハ吐又口以漱ぎ吸てハ吐

くのごとくし。紅赤ある色を吸

出さぬで三五度もすせば治ま

あつて二便自ら通するなり

●生吐下て大便せらるるハ先葱乃

尖を用て肛門入りどつせ次よ

牛黄散よて硃砂丸と送下せべし。

牛黄散乃方ハ出 硃砂丸の方

釀乳乃法 兒胎中あて熱以受生

吐下て面赤く眼閉大小便通せず

乳を吮あて能ざる時

猪苓 澤瀉 焙 赤茯苓

生地黃 天花粉

右一服三不水煎し乳母飲し

乳を絞て去て先て空心に此藥

以飲し。暫あをて後乳を吮

むべし

●萬億丸 小兒大便通せらるる以治す

るあて神乃どし

辰砂 巴豆 殼去 寒食麵 粉

先辰砂以研爛し其後巴豆を

入同く研末し寒食麵と好酒

よて糕とて藥乃中に入同く

杵と百餘下能わき合せ黍の大

さよ丸じ。小兒乃大小虚實を

量て丸數以與べし但し三五丸

とらると多くハ過愈しす

●破泡

●小兒生吐下て即死するにわくハ

急よ口中乃上腭以見ふ白泡此粟

粒のどろくある物あるべし。のそぎ  
指で用て摘破す。綿を拭ひ淨め  
便活るなり。若其悪き汁喉に  
入バ治せぬ。總して毎日風  
あき處まで度度小兒乃上脛頰  
の内に見て自泡起るとあは。指  
甲を用て摘破ると拭ひ淨むべし

●貼額

●生む下るとき風引て鼻あき  
からバ  
一方 天南星  
末して生姜の汁に調へ膏と  
して額乃上貼べし。病去ハ除

取へし

●或ハ又初て生む鼻塞るとき乳  
食下らざバ  
一方 牙皂 草烏  
葱汁あて并膏とあり。額に  
貼て甚効あり

●不乳飲并腹痛 食積

葱乳湯 兒初て生む乳飲ハ大  
便せざると治せ

葱白一寸を四ツ破 乳汁 小半盞

右銀石乃器よ入少の間煎じ。四  
次ふ服むべし。立ごあらよ。ちり  
しり



茯苓丸 初生の兒乃口中拭と  
淨く之を穢惡腹に入れて腹滿氣短  
く。乳以飲し能く治す。

赤茯苓 黃連 枳殼 各等分  
右末と煉蜜を丸じ。乳汁を

飲まむべし

白姜散 兒胎中少く寒以受ると  
腹痛て乳以飲らば治す

木香 陳皮 檳榔子 各一分

肉桂 白姜 炙甘草 各半分

右水煎し綿子侵し飲まむ

べし。若くは丁香木瓜

液加ふべし

●腹痛乃痛多バ。あせ飲食は傷ら

あせ。あせ液治す

一方 白木一ナ半 山査子 神麴

砂仁 麥芽 各一ナ 陳皮

青皮 各七分 炙甘草 半ナ

寒あはば藿香 吳茱萸 液加へ。熱

あはば黄芩 液加ふ

右末とて飯のさ湯或白湯

みて用ひべし

●腹痛。口中乃氣温。面の色黄

み。目は精彩なく。或は白睛が

又多く睡て不食。大便酸臭

者ハ消積丸以用べし。甚き者小ハ

白餅子以以ておしと下し其後  
胃以和らるる白木散を用いし  
白餅子乃方五分白木散乃方四分  
消積丸

丁香九粒 砂仁十二箇 巴豆三箇皮心  
右細末とて 麵糊あて 黍乃大  
さ丸ト三歳已上ハ三五丸  
三歳々々内ハ一二丸 温水に  
下す

●心腹乃痛む總トて積痛食痛  
寒痛虫痛あや犬も同く少  
異あり虫痛ハ面皧白口中ハ沫清  
氷出て痛は火あもあは時とて

痛し是小兒本怯きゆハ胃寒冷  
とこハ虫動て痛多也但一癩と相  
似さる目斜まず手搐らる虫  
痛とすあはハ安虫散用い

安虫散  
黄粉 黄色炒胡椒 檳榔子  
練子核と去 鶴虱各二兩 枯礬二兩半  
右末とて痛む時一度一字或  
大なる者ハ五分或ハ一分 温水  
用いし 蜜鑑ハ米糊あて丸ト  
安虫丸と名く

一方 小兒乃腹痛治  
炙甘草 乾姜各二兩 伏龍肝一兩

人參 茯苓 白朮 百草霜

右末とく粥あて丸ド陳皮

湯以て服あむべし

一方 虻虫乃痛攻多すと治也

陳皮 半夏 茯苓 練根

甘草

右水煎ト用いし

集効丸 虫乃痛攻治也

木香 鶴虱 檳榔 訶子

蕪荑 附子 乾姜 大黃一兩半

烏梅 枝を去ニホ半

右細末とく煉蜜あて丸ド陳皮

湯或ハ湯又醋を加へて用いし

香橘餅子 小兒食積滯で面黄

し肌瘦肚腹膨脹飲食少く時

とて心腹の常嘔吐くし

腹らぐを肢體倦怠る攻治也

青皮 陳皮 神麴 麥芽

白茯苓各二兩 香附炒 厚朴

砂仁 山查 人參 白朮

炙甘草各一兩二稜 莪朮 二味煨

木香 青木香 各五ホ

右末とく煉蜜あて芡實乃大

さ丸ド一度ふ一粒で米湯

て飲あむべし

中華餅 小兒面黄あて肌瘦

肚大<sup>ちひ</sup>し<sup>く</sup>て青筋<sup>あざ</sup>出<sup>で</sup>腹<sup>はら</sup>く<sup>く</sup>こ<sup>こ</sup>不食<sup>ふじき</sup>  
一<sup>いち</sup>諸<sup>しよ</sup>の積<sup>じき</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>故<sup>ゆ</sup>治<sup>ち</sup>せ

山藥<sup>さんやく</sup> 薏苡仁<sup>いはいじん</sup>炒<sup>しやう</sup> 史君子<sup>しきんし</sup>炒<sup>しやう</sup> 各<sup>かく</sup>二<sup>に</sup>兩<sup>りやう</sup>

神麴<sup>しんむく</sup> 麥芽<sup>ばくが</sup> 蓮肉<sup>れんにく</sup> 白扁豆<sup>はくへんづ</sup> 各<sup>かく</sup>一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup>

白茯苓<sup>はくふくろう</sup> 芡實<sup>せんとく</sup> 白朮<sup>はくじやく</sup> 白芍藥<sup>はくしやくやく</sup>

酒炒<sup>しゆしやう</sup> 各<sup>かく</sup> 桔梗<sup>ききやう</sup> 五<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup> 三稜<sup>さんれい</sup> 煨<sup>ゐ</sup>

一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup> 山查子<sup>さんさし</sup> 甘草<sup>かんさう</sup> 各<sup>かく</sup>五<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup>

右末<sup>みぎま</sup>と<sup>と</sup>白麵<sup>はくめん</sup>四<sup>し</sup>兩<sup>りやう</sup> 右藥末<sup>みぎやくま</sup>一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup>

半<sup>はん</sup>白蜜<sup>はくみつ</sup>一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup> 香油<sup>あぶら</sup>少<sup>せう</sup>許<sup>きよ</sup> 水<sup>みづ</sup>と<sup>と</sup>相和<sup>あひまじ</sup>

餅<sup>もち</sup>と<sup>と</sup>烙<sup>あぶ</sup>て<sup>て</sup>熟<sup>じやく</sup>し<sup>し</sup> 食<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>先<sup>ま</sup>充<sup>ちゆう</sup>

と<sup>と</sup>小<sup>せう</sup>兒<sup>に</sup>不<sup>ふ</sup>益<sup>えき</sup>あり

●胎驚<sup>たいきやう</sup>

胎驚<sup>たいきやう</sup>と<sup>と</sup>ハ<sup>ハ</sup>吹胎<sup>ふいたい</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>ある<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>其<sup>その</sup>母<sup>ぼ</sup>

身<sup>み</sup>持<sup>もち</sup>常<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>乖<sup>がひ</sup>て<sup>て</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>や</sup> 或<sup>ある</sup>ハ<sup>ハ</sup>飲<sup>いん</sup>食<sup>じき</sup>色<sup>しき</sup>

急<sup>いそ</sup>に<sup>に</sup>急<sup>いそ</sup>し<sup>し</sup> 或<sup>ある</sup>ハ<sup>ハ</sup>怒<sup>いかり</sup>す<sup>す</sup> 或<sup>ある</sup>ハ<sup>ハ</sup>驚<sup>おどろ</sup>き<sup>き</sup>外<sup>あひだ</sup>

風邪<sup>かぜ</sup>と<sup>と</sup>感<sup>かん</sup>ぜ<sup>ぜ</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>其<sup>その</sup>氣<sup>き</sup>胎<sup>たい</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>児<sup>に</sup>

うつ<sup>うつ</sup>る<sup>る</sup> 生<sup>なま</sup>ま<sup>ま</sup>下<sup>くだ</sup>て<sup>て</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>一<sup>いち</sup>ケ<sup>け</sup>月<sup>げつ</sup>と<sup>と</sup>満<sup>まん</sup>

ざる<sup>ざる</sup>内<sup>うち</sup>に<sup>に</sup>驚<sup>おどろ</sup>き<sup>き</sup>發<sup>はつ</sup>し<sup>し</sup> 目<sup>め</sup>上<sup>じやう</sup>視<sup>し</sup>し<sup>し</sup> 腹<sup>はら</sup>

硬<sup>かた</sup>く<sup>く</sup> 手<sup>て</sup>足<sup>あし</sup>び<sup>び</sup>く<sup>く</sup> 糸<sup>いと</sup>々<sup>々</sup>及<sup>およ</sup>張<sup>ちやう</sup>す<sup>す</sup> 痰<sup>たん</sup>涎<sup>ぜん</sup>

盛<sup>さか</sup>る<sup>る</sup> 攻<sup>こう</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>治<sup>ち</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>

一<sup>いち</sup>方<sup>かた</sup> 辰砂<sup>てんさ</sup>研<sup>けん</sup> 牛黄<sup>ぎゆうわう</sup> 少<sup>せう</sup>許<sup>きよ</sup> 回春<sup>かいしゆん</sup>

麝香<sup>じやくかう</sup> 少<sup>せう</sup>許<sup>きよ</sup> 入<sup>いれ</sup>る<sup>る</sup> 尤<sup>なほ</sup>も<sup>も</sup>効<sup>きう</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>

右乳汁<sup>みぎちゆうじゆ</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>調<sup>てい</sup>へ<sup>へ</sup>口<sup>くち</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>入<sup>いれ</sup>せ<sup>せ</sup>ば<sup>ば</sup>太<sup>お</sup>心<sup>こころ</sup>

妙<sup>めう</sup>なる<sup>る</sup> 母<sup>ぼ</sup>ハ<sup>ハ</sup>防<sup>ぼう</sup>風<sup>ふう</sup>通<sup>つう</sup>聖<sup>せい</sup>散<sup>さん</sup>を<sup>を</sup>服<sup>はく</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>

至聖保命丹<sup>しせいほうめいたん</sup> 胎驚<sup>たいきやう</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>急慢<sup>いそまん</sup>乃<sup>なほ</sup>驚<sup>おどろ</sup>

風<sup>ふう</sup>故<sup>こ</sup>治<sup>ち</sup>せ

全蝎四 白附子 天南星炮

姜蠶炒 辰砂 麝香 蟬蛻各一

天麻 防風各二 金箔十片

右細末一 粳米の飯一 丸一

一兩一 四十九丸一 とありて初生の児

小半丸一 乳汁一 化一 用一

歳一 乃一 児一 一丸一 金銀薄一 湯一

化一 下一 十歳一 左右一 急候一

者一 小丸一 薄一 湯一 用一 化一

下一 七一 べ一

●夜啼

夜啼ハ心經一 熱一 ありて虚一 ありと

此一 ありと治一 する一

一方一 人参 黄連 姜炒 各一 分一

炙甘草五分 竹葉二十片

右姜一 入水煎

導赤散 夜一 入燈一 見一 啼一 小便

赤一 口中熱一 腹熱一 或ハ汗一 あり

身一 仰一 啼一 曉一 至一 方一 息一 治一

生乾地黄 木通 甘草各等分

右一服一 を二三一 分一 淡竹葉

七片一 入一 煎一 用一 右証一 黄

芩一 を加一 用一 此一 ありて効一

一一 あ一 通心飲一 麥門冬一 車

前子一 燈心一 薄荷一 と加一 用一

通心飲 木通 連翹 瞿麥

山梔子 黄芩 甘草各等分

右水煎

龍齒散 夜啼止らば治れ

龍齒 蟬蛻 鈞藤 茯苓

人參

右水煎

五味子散 夜啼及び腹痛て物の

祟あるに似るは治せ

當歸 赤芍 白朮 五味子各等分

茯苓 陳皮 肉桂 甘草各等分

右水煎

乳頭散 夜啼止らば腹痛は治れ

黄芩 甘草 當歸 赤芍

木香 各等分

右末とて乳乃頭ふ塗吃せむべし

黄土散 客忤夜啼は治れ

龍中黄土 蚯蚓屎 各等分

右末とて水と和調へ頂と五心

とふ塗ぬる五心とハ胸と兩の手

兩足の裏乃真中あや

蟬花散 夜啼止らば其狀物乃祟の

どくあるは治せ

蟬退 七箇

右下の方半分は截て細末とす

薄荷湯を用て好酒少許は入加へ

食後は服せむ。古人乃法と立ち

と其妙測<sup>そのちうそく</sup>い<sup>し</sup>。或者<sup>あるは</sup>此方<sup>このほう</sup>疑<sup>うたが</sup>  
て信<sup>しん</sup>ぜず。上<sup>うへ</sup>の方<sup>ほう</sup>半分<sup>はんぶん</sup>を截<sup>きり</sup>て。右<sup>みぎ</sup>  
乃<sup>すなは</sup>煎湯<sup>せんとう</sup>あて服<sup>のま</sup>し。又<sup>また</sup>た<sup>た</sup>六<sup>む</sup>復<sup>ふく</sup>啼<sup>てい</sup>  
あ<sup>あ</sup>と初<sup>はつ</sup>生<sup>せい</sup>ど<sup>ど</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>や

小兒<sup>せうに</sup>悪<sup>あく</sup>氣<sup>き</sup>に觸<sup>ふ</sup>犯<sup>つ</sup>し。物<sup>もの</sup>祟<sup>た</sup>よ<sup>よ</sup>て夜<sup>よ</sup>啼<sup>てい</sup>  
む<sup>む</sup>る者<sup>もの</sup>へ炭<sup>すす</sup>火<sup>び</sup>に醋<sup>す</sup>に灌<sup>そそ</sup>ぎ。其<sup>その</sup>煙<sup>えん</sup>にて  
薰<sup>か</sup>べ。藕<sup>せう</sup>合<sup>ごう</sup>香<sup>かう</sup>丸<sup>わん</sup>に服<sup>のま</sup>むべし

小兒<sup>せうに</sup>夜<sup>よ</sup>啼<sup>てい</sup>止<sup>と</sup>む。朱<sup>しゆ</sup>砂<sup>さ</sup>に用<sup>もち</sup>て甲<sup>か</sup>寅<sup>いん</sup>  
乃<sup>すなは</sup>二<sup>に</sup>字<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>書<sup>か</sup>き。牀<sup>とこ</sup>の頭<sup>あたま</sup>に貼<sup>は</sup>置<sup>け</sup>。即<sup>すなは</sup>ち  
止<sup>と</sup>む

●客忤<sup>かくご</sup>附<sup>つ</sup>中<sup>ちゆう</sup>惡<sup>あく</sup>

客<sup>かく</sup>忤<sup>ご</sup>と。初<sup>はつ</sup>生<sup>せい</sup>乃<sup>すなは</sup>ち兒<sup>に</sup>心<sup>しん</sup>氣<sup>き</sup>不<sup>ふ</sup>足<sup>そく</sup>の<sup>の</sup>り  
又<sup>また</sup>見<sup>み</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>外<sup>ほか</sup>乃<sup>すなは</sup>ち客<sup>かく</sup>人<sup>にん</sup>に<sup>に</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>忤<sup>ご</sup>へ

驚<sup>おど</sup>き<sup>き</sup>或<sup>ある</sup>ハ家<sup>か</sup>内<sup>ない</sup>乃<sup>すなは</sup>ち人<sup>にん</sup>馬<sup>ば</sup>に<sup>に</sup>乘<sup>のり</sup>行<sup>ゆ</sup>馬<sup>ば</sup>の  
汗<sup>あせ</sup>氣<sup>き</sup>に蒙<sup>もう</sup>る。直<sup>ちき</sup>に兒<sup>に</sup>孔<sup>くわう</sup>邊<sup>へん</sup>に<sup>に</sup>向<sup>むか</sup>ひ<sup>ひ</sup>或<sup>ある</sup>ハ  
穢<sup>けが</sup>し<sup>し</sup>き衣<sup>い</sup>物<sup>ぶつ</sup>を<sup>を</sup>著<sup>き</sup>る<sup>る</sup>す<sup>す</sup>く<sup>く</sup>直<sup>ちき</sup>に

見<sup>み</sup>お<sup>お</sup>近<sup>ちか</sup>に<sup>に</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>或<sup>ある</sup>ハ兒<sup>に</sup>乃<sup>すなは</sup>ち衣<sup>い</sup>類<sup>るい</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>  
人<sup>にん</sup>孔<sup>くわう</sup>頭<sup>あたま</sup>髪<sup>かみ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>或<sup>ある</sup>ハ又<sup>また</sup>白<sup>しろ</sup>き衣<sup>い</sup>物<sup>ぶつ</sup>に<sup>に</sup>  
青<sup>あお</sup>き帶<sup>おび</sup>に<sup>に</sup>。青<sup>あお</sup>き衣<sup>い</sup>物<sup>ぶつ</sup>も白<sup>しろ</sup>き帶<sup>おび</sup>と

初<sup>はつ</sup>生<sup>せい</sup>の兒<sup>に</sup>お向<sup>むか</sup>ひ<sup>ひ</sup>ど<sup>ど</sup>く異<sup>こと</sup>なる<sup>る</sup>が  
ら<sup>ら</sup>き物<sup>もの</sup>に<sup>に</sup>見<sup>み</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ま<sup>ま</sup>心<sup>しん</sup>氣<sup>き</sup>不<sup>ふ</sup>足<sup>そく</sup>お<sup>お</sup>  
て弱<sup>じやく</sup>き<sup>き</sup>し<sup>し</sup>忤<sup>ご</sup>へ<sup>へ</sup>驚<sup>おど</sup>き<sup>き</sup>て病<sup>びやう</sup>生<sup>せい</sup>ト<sup>と</sup>口<sup>くち</sup>

沫<sup>あわ</sup>を<sup>を</sup>吐<sup>つ</sup>面<sup>めん</sup>の色<sup>いろ</sup>變<sup>か</sup>り<sup>り</sup>喘<sup>あせ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>て腹<sup>はら</sup>  
痛<sup>いた</sup>む。反<sup>へん</sup>側<sup>せう</sup>し<sup>し</sup>び<sup>び</sup>く<sup>く</sup>え<sup>え</sup>き<sup>き</sup>其<sup>その</sup>病<sup>びやう</sup>と<sup>と</sup>

の狀<sup>かたち</sup>驚<sup>おど</sup>風<sup>ふう</sup>乃<sup>すなは</sup>ちど<sup>ど</sup>くあ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>上<sup>うへ</sup>に<sup>に</sup>竄<sup>は</sup>せ  
げ<sup>げ</sup>る。客<sup>かく</sup>忤<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>其<sup>その</sup>口<sup>くち</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>

見て上脘乃左右小泡粟粒の様  
ある物わく竹の針めてあせは刺  
或ハ指甲よく破其汁喉に入  
づるるうみして拭去藜合香丸  
姜湯めて頻服丸仍息角を  
焼て身は薰べ次は淡豆三合水  
又濕搗て雞子乃大さ丸  
児乃顛の上并は足の裏各五六返  
も摩て其後臍乃真中は摩るあせ  
良法あせといふ也

犀角散 外の人異ある物は見て汗  
ふるらゆき啼て熱壯るは治れ  
天麻 犀角 麥門冬 釣藤

辰砂各一 鐵粉 雄黄各半  
麝香少許

右末としく五分づ金銀乃煎  
湯めて服む。黄土散も亦可か  
也方ハ十九丁

●中惡とハ小兒不正乃邪氣り犯さ  
せ心腹刺痛悶乱して死せんと  
むるあせ

一方 葱白以て大便道并は鼻  
乃中お入せば立とあろよ愈らあせ

●生赤 胎黄

●生赤とハ初生の児其月乃内は肌  
膚あ丹は塗がどくあるをいふち先



牛黄散以以て裏を托し次は藍葉散以用て身に塗乳母ハ清涼飲子

三服と服をべー

牛黄散 爵金 炙甘草 桔梗

天花粉 葛根 各等分

右末とて薄苛湯に蜜以加へ

調へ服をむべー

藍葉散 藍青 知母 炙甘草

杏仁 山梔子 各五分 黄芩

升麻 柴胡 寒水 石膏

赤芍 各四分 羚羊角 三不

右水煎

清涼飲子

當歸

大黄

赤芍 各等分

右水煎

胎黄とハ胎おちる時母濕熱以受

るは因て其哭り傳へ生さ下て總

身面目皆黄あして金のどく大小便

共は通せぬ乳食進すして啼と

止らぬはつらつらと治るるは

生地黃湯以用べー或ハ又生さ下

て衣物太暖う過て此証以多すと

つらと漸漸に衣物以減下生地黃湯

以服をむべー

生地黃湯 生地黃 赤芍 川芎

當歸 瓜蒌仁 各等分

右水煎下子母俱に服べー

●重舌 木舌 弄舌

●重舌木舌ハ脾經乃實火ありて舌の下小き形ありて舌のどくある以重舌と名づけり舌腫硬くして柔くありらざる木舌といふなり

當歸連翹湯 重舌并唇兩傍の瘡を生むる以治す

當歸尾 連翹 白芷 各三ホ

大黃 煨 炙甘草 各一ホ

右水煎じ食後頻り服すべし

千金方 重舌以治す

竹瀝青 黃栢末

二味和勻舌乃上之時と多く貼べし

又一方 蒲黃以用て塗べし

又一方 胆礬以用て研細し

あせを敷べし

又一方 百草霜芒硝滑石以用て

末とて酒を調へ敷べし

雪消散 木舌以治す

朴硝五ホ 眞紫雪二分 塩半分

右末とて白湯に竹瀝二三點以

入調敷べし津を熱て妨げあり

一方 小兒乃木舌口を塞り満ん

とする以治す

紫雪二ホ 竹瀝半合

右研勻頻り付す即ち愈

重舌木舌ハ舌乃下ニ紫の脉あり  
三稜針以て少と刺惡血出  
セバ即ち愈るあり

●弄舌とハ小兒脾乃藏小微熱  
ありて舌以てあはらるる  
お因て時時舌以舒出―舐ると  
なり。少と治するは冷藥を用ひ  
て下をとりあはらるる瀉黄散以與て  
漸漸服せむべし。或ハ水以飲を  
以て醫者熱とすハ非なる水を飲  
ハ脾虚して津液少きなり。又若  
面黄ありて肌をせ五心煩熱  
して舌以舒出―舐るハ疳黄とす。

胡黄連丸以用ひべし。方ハ  
病乃後ハ弄舌ありハ凶きとなりと

瀉黄散 藿香 山梔子 石膏 五分 甘草 防風 粳米

右以一服と蜜酒ふかきほせ炒

香熟し水一盞以て煎して

●吃泥

清胃養脾湯 小兒泥土と愛し吃  
ハ脾の藏疳生し脾虚胃熱乃  
致す所ある以治し

- 黄芩 陳皮 白朮 茯苓

石膏 甘草

右各等分水煎し服之

砂糖丸 膩粉一分

砂糖は和麻子乃大さふ丸に米飲  
りて送下せ其泥土以瀉し

立どあろふ愈るなり

●滞頤

●滞頤と六口常は涎以流して頤頤  
を漬するを宜しを冷熱以分ちて

治せ

温脾丸 脾胃虚冷して涎以流し

收るよと能はれ治せ

半夏 丁香 木香 各五 姜 薑

白木 青皮 陳皮 各二小半

右末と糊して麻子乃大さふ丸

ト一歳の児は八十九二歳は六二十

丸米湯まで用ひ

通心飲 心氣以通ト水穀と分

ち熱以退げ尿と利せ方八十八丁ニ

●變蒸

●變蒸と八俗より所の智慧ばと

りをあり變と八常は異なり

蒸と八發熱あり初生乃児血氣以

足に陰陽未和せず藏腑以

せ七骨節未全くは生きて三

十二日目と五藏以變ト生ト六

腑以蒸養之のどく變蒸多遍也  
藏腑全く成胎毒と散下氣血方  
榮へ智恵も前も倍して後も痘  
を出すと少く變蒸なるは輕  
き發熱し微し汗あり其狀驚  
み似せども五日程ありて解し重  
ハ熱壯し脈乱し數あり或ハ吐汗  
煩し帝て燥渴すども八日程  
して解するあり或ハ胎氣以受る  
あり壯ありて實証ある児ハ發熱し  
あり人知らざる變蒸するもあり  
あるあり總して變蒸ハ藥以服  
るむ發するも若或ハ食傷小因傷風

小兒驚風等因雜へて變蒸發し  
人城して疑惑ハ起るとあり先二  
三日とくと様子と候い見て彌食  
傷ありハ食以消し傷風ありハ痰を  
行し驚ありハ神以安しそむて乃  
証は隨て療治せべし若是變蒸  
るも妄アらず藥以用しそむて藥  
の爲り害せらるるあり發熱るとき  
上唇あり小泡子ありて耳と尻と冷る  
ハ眞乃變蒸ありと知べし或ハ上唇  
あり小泡子ありて耳と尻と熱ありハ  
餘乃病と知て其証不隨て療治せ  
施せべし

惺芎散 小兒變蒸發熱 或ハ咳

嗽痰涎鼻塞 聲重 湯以

茯苓 白朮 人參 甘草

桔梗 細辛 川芎 各等分

右水煎

紫霜丸 杏仁 五十枚皮尖と去

赤石 代赭石 煨醋よの身 各二兩

巴豆 三十粒

右各別ニ研テ和勻ヘ蒸餅以湯

又浸シ黍の大さる丸ト三歳

已下ハハニ三九八歳已上ハ六十餘

丸食前米飲或ハ乳汁とて送リ

下ニ

人參散 變蒸骨熱 心煩啼

以治

人參 炙甘草 麥門 柴胡 各

龍膽 防風 各一不

右水煎

調氣散 變蒸吐瀉 乳以飲

多く啼を治

木香 香附 厚朴 人參

陳皮 藿香 炙甘草 各一不

右水煎

神仙黑子散 變蒸傷寒と相似

者あり其証詳おとべし若上唇

乃中ニ白泡子ある者ハ變蒸多

此方以用之

麻黄節去 大黄 杏仁皮去

右焼て性成存じ末と一服を

一字ありて水煎し服せ先温暖

乃處ろ見成抱て少汗ありて

冷せば効あり

●解顛

●解顛とハ小兒次第より人とありて頭

乃縫目開て合せり者成りてなり是

腎氣虧るありてありて腦髓足ら

少くありてありて治むるあり

人參地黄丸 人參 二枚 熟地黄 果

鹿茸 山藥 白茯苓 牡丹皮

山茱萸 各二枚

右細末とて煉蜜とて芡實の

大さよ丸じ人參煎湯以て研

化し空心より服せむべし

一方 天南星

微炮ありて末と醋とて調へ

付べし

栝子仁散 防風 一少半 栝子 一少

右末とて乳汁と調へ顔に塗へし

三辛散 頭骨合せりて治む

細辛 肉桂 各五枚 姜 薑 七少半

右末とて乳汁とて調へ付乾くハ

再び付く面赤とせり節ち効あり

● 頤陷

頤陷ハ始先藏腑熱ありて因て  
渴ひて水漿液の乏し。泄痢を病ひ久  
き時ハ血氣虚弱し。腦髓液充  
ると能はばらゆる。頤をうつやと  
坑乃どくろむ。液の乏しや

一方 黄狗乃頭骨

黄色よりあやせ末と一鶏の白こ

の汁あて調へ頤に付べし

當歸散 小兒腹痛ニ夜啼及び頤

陷は液治し

炙甘草 桔梗 陳皮 當歸各

右水煎

● 頤填

頤填ハ頤門腫起るとなり。脾乃

藏ハ肌肉は主る乳食常ふ乖比。飢

過さ。飽過さ。ひび。或ハ寒或

熱藏腑を調へり。先其氣上

りて頤門腫起ると高く毛髮黄よ

し。短く自汗あるなり。若寒氣

上逆する時ハ其腫起ると堅硬し。

或ハ寒と知て温むべし。若熱氣

上りて腫起ると此ハ柔軟なり。是

ハ熱と知て涼むべし。又肝盛り

て風熱交攻る時ハ亦頤門腫る

あつたわらとつて



一方 防風 栝子仁 白芨

右末とて乳汁とて願乃上

塗バ十日して愈るなり

大連翹飲 熱して願腫起る候

治以

連翹 瞿麥 蟬蛻 炙甘草

荆芥 木通 防風 當歸

赤芍 柴胡 各一 梔子 黄芩 各五分

右水煎或ハ紫草以加へ熱甚しき

あハ大黄を加ふ

● 龜胸

● 龜胸とハ俗より所の鳩胸多を肺

經熱以受脹滿して胸膈と攻るゆす

胸高くとて龜乃胸のどくとある候

龜胸とつふあは治するは肺氣と

瀉以べし又乳母五辛其外熱物以

食過して其乳を飲るむるゆす見

此病以成るを或又乳母たま乳

あると其ま飲るむる亦此龜胸の

病以成るゆす常より宿乳を絞去

て後又吃をむべし

瀉白散 桑白皮 蜜水よかき和黄色

地骨皮 二升 炙甘草五分

右水煎黄芩一升加ふ

百合丹 龜胸以治也

大黄 天門冬 杏仁

甜葶藶 石膏 木通 桑白

百合 各等分

右末と一煉蜜よく菜豆乃天ま  
丸じ一度に五丸食後卧ふ臨て  
湯よく飲むべし

●龜背

●龜背とハ小兒乃背高く龜の甲  
り似る或ハ大人も成まて治せざ  
ハ俗よりあせびーお成る是兒生  
ま下たる時背城能護らばる風  
邪背に客を傳へて骨髓入て此病  
成或ハ又強て坐せむると早く  
成ハ咳嗽久き時ハ肺氣虚して此症

成とりのアアと治るハ龜乃  
尿と用て其背に骨節を塗べし龜  
の尿乃取様ハ龜以青蓮の葉り  
置鏡と見るとハ尿自ら出るなり

●松葉散

龜背以治す  
松花 枳殼 防己 獨活  
大黃 前胡 麻黃 肉桂 少許  
右末と一米飲よく用べし

●灸法

肺命二穴 三の椎乃下左右各二寸ふちを  
心命二穴 五の椎乃下左右各二寸ふちを  
膈命二穴 七の椎乃下左右各二寸ふちを  
右各三壯灸之べし左右各二

寸とよ寸法ハ兩乳乃間八寸と  
以以て量て知べし

●手拳 脚拳 鶴膝

●手拳て展げらハ生と付の肝氣弱

くして兩脉緊縮すと兩手伸たり

か乃らさるを以て治するハ

●薏苡丸 當歸 秦朮 薏苡仁

酸棗仁 防風 羌活 各一ホ

右末と煉蜜して鷄頭乃大さ

九ト一度ト一粒ト麝香荊芥湯

みて化し用せし

●脚拳て展げら稟受乃腎氣不

足りて血氣ゆと榮へ脚乃指

拳縮ると伸る力ありなを以て

●海桐皮散 當歸 熟地黄

牡丹皮 牛膝 海桐各一兩

補骨脂 山茱萸 各五ホ

右葱白以入水煎

●鶴節ハ小兒生と付不足りて

血氣充げらハ肌肉瘦薄く骨節

露と日と枯悴て其形鶴乃脚の

どくあるはりなを以て治する

一ハ

●加味地黄丸 小兒乃鶴膝以治し

熟地黄六兩 山茱萸 四兩

山藥三兩一分五厘 牡丹皮 澤瀉

茯苓各三兩 鹿茸 牛膝

人參各二兩

右末まくく煉蜜れんみつをく丸を淡塩湯たんしんじゆとう

少すく用もちズべ

●項軟筋軟

五加皮散 項軟けうなんて頭正かぶたましらと

得えらら治ちれ

五加皮

右末まくく酒しゆ調とへ項乃骨の上けうのほのかみ

1塗ぬべ

健骨散 久ひさくく疝せん乃病やまひ以患を體虛たいきよ

ししくく不食ふじきしし及および諸しよの病後やまひのち天柱てんちゆ

骨倒こつたうハ乃項軟也けうなんなりととす

白姜はくきやう蠶さ

末まととくく三歳さんさい乃なり児こ六半ろくはん不薄奇ふはくき

酒しゆそそととのの乃なり其その後のち生筋散せいじんさん

以用もちて貼はべ

生筋散 木鱉魚ぼくべんぎよ六箇ろくかん 葶麻ていま六十粒

末まととくく先頭せんとう以抱をて手てにて頭かぶ

の上うへ以摩をて熱あつせせ先唾せんた之調を

へへああとと貼はべ

項けう貼はる方かた 肝膽かんたん乃風熱筋以

ししくく軟なんらら治ちれ

附子ぶし 天南星てんなんせい 各等分

右末と一、姜汁を調へ項乃軟た  
る處に貼次、防風丸、涼肝丸、成

服とせべし

防風丸 天麻 防風 人參 各一

姜蠶 全蝎 各五分 雄黄 辰砂

鹿射香 各二分 牛黄 一分 炙甘草 二分

右煉蜜を丸じ、薄荷湯を服用

ツバ、涼肝丸乃方ハ、四十四丁

羚羊角散 面紅、唇白、腸熱

て、項軟ると治れ

羚羊角 白茯苓 熟地黄

虎脛骨 酒炒 酸棗仁 炒 防風

肉桂 炙甘草 各等分

右末と一、一度五分或ハ一不温

酒或ハ塩湯を服用せ

小茸丸 胎中熱と受て總身筋軟

る以治れ

鹿茸 菴蓉 牛膝 木瓜

兔絲 熟地黄 當歸 天麻

杜仲 青塩 各等分

右末と一、煉蜜を丸じ、塩湯温

酒を化し用せ

脱囊

脱囊とハ、陰囊腫大し、墜下

し、おとほし、さうをいふ亦囊乃皮脱し

爛る者あり

一方 當歸 黃連 黃芩 木通 甘草

石水煎

一方 囊爛者者と治ん

野紫蘓乃葉 面青く背紅ある者也

右末とて香油を調へて付す

囊を濕りて捲き置くべし又皮

脱して兩丸露る者ハ藥と付て

外と青き荷葉を包へし後自ら

皮と生じざるあり

●脱肛

脱肛ハ小兒久しく瀉痢と患る

因て大腸虚し滑りて糞門を

脱出して收つらぬ候ハ

提肛散 小兒大腸虚し糞門脱出

る候治ん

龍骨ニ半訶子 没石子

赤石 罌粟 醋を灸で各等分

右末とて米飲みて食前服す

又葱の湯にて糞門乃出たる處

以洗ひ軟く托入べし

一方 葶麻子

搗爛し頂上り貼脱肛收る入

ハ即取去べし

脱肛洗藥 苦參 五倍子

陳壁土 各等分

右水煎きつる湯みて洗ひ木賊乃  
末以用て塗軟く托入る

一方 五倍子

末して付頻り托入る

一方 小兒瀉痢して後糞門收ら

づる治り

赤石 伏龍肝 各等分

右末とて糞門乃出たる付る

盤腸氣痛

小兒乃盤腸氣痛冷氣の爲に擣

きて腹痛多し腰曲り乾啼し額の

上り汗あきて口閉脚冷或ハ大便

青色ゆしてゆく上唇乾く者ハ盤

腸氣痛なる是多くハ生じ下して洗と

遅ふ因て風冷感に受て致す所

あり急て葱乃湯以用て其腹を洗

ひ葱以揉て臍腹乃間以慰へ良

久して尿自ら湧出せば其痛自ら

止なり宜し乳香散以用る

乳香散 盤腸氣痛治り

乳香 沒藥 各等分

右末とて木香の煎湯少く調へ

用る

茴香散 治証前り同ト

木香 炮 茴香 炒 附子 炮 金鈴子

檳榔 故紙 炒 白豆蔻 煨

蘿蔔子炒

右塩沃入水煎

木香散 小兒盤腸氣痛止ハ面青

手冷啼味ハ尿米消此とくあ氏

治也

川練子 七ツ皮核を去巴豆三十五粒と

同トヤ炒巴豆黄色トクタクとき

使君肉 木香 延胡索 藜香 各二

右末トク清米飲アて空心ヨ用

ソベ一必乃大小分量テ興ベ一

●遺尿

遺尿ハ膀胱冷弱トク小便自ラ

出テ知ラズ或ハ俗ラ云ハズをあり

破故紙散 小兒乃遺尿治ハ

破故紙 炒一兩

右末トク熱湯アて用ソベ一

桂肝丸 小兒睡中リ小便トク自

ラ覺ヘハ我治ハ

肉桂末トク雄雞肝 各等分

右搗小豆乃大さ丸トク温水にて

毎日三度用ソベ一

益智二伏丸 小兒乃遺尿又ハ尿

白濁ヨリ治也

益智 生 白茯苓 茯神 各等分

右末トク空心リ清米湯アて

用ソベ一



● 魁病

魁病とは孕婦物の祟以得其胎中  
導て見成病をむるをいふ又小兒生  
きて十餘月乃後母又妊とあやそ  
其乳以飲バ兒は精神爽多し身體  
萎痺し或ハ下利寒熱往來して病  
成り俗に云所のおとしげとも云ふ  
あやそ治するに

龍膽湯 柴胡 龍膽 黃芩  
桔梗 芍藥 茯苓 釣藤皮  
炙甘草各二升半 蟪娘ニツ  
大黃二兩濕紙に包煨む  
右水煎取の大小分量て服むべし

● 行遲

行と遅く髪乃生ると遅きハ氣  
血充らるゆゑなり

調元散 小兒生付乃元氣不足  
あはて頭の縫目開解し肌瘦腹大  
ひりく腫語とわそく行と遅く  
手足筒乃とく神色昏々齒の生る  
とたそ記を治し

山藥 五升 人參 茯苓 茯神各三  
白芍 熟地黄 川芎 當歸  
白朮 黃芪 蜜炙各一升半 菖蒲一升  
散草一升半

右姜棗以入水煎取乳母同服し

加味地黄丸 小兒肝腎虛して骨  
髓充て行ふと能らる後治し

熟地黄 八分 山藥 四分 山茱萸 粟

白茯苓 牡丹皮 澤瀉 各三分

鹿茸 酒炙二分 牛膝 三分

五加皮 三分

右末し煉蜜あて黍乃大らう

丸ト一度よ一ホツ塩湯あて空

心ろ用いべー

羚羊角散 小兒五六歳まで骨氣

虚し弱くして行と能らる後治す

白茯苓 醋炙 羚羊角

虎脛骨 醋炙て黄色り 生地黄 各五分

黄芪 肉桂 防風 當歸 各二分半

右末し煉蜜あて小豆乃大らう

丸ト食前う温酒あて三五丸

取用いをバ一月後後漸漸し行

べー

五加皮散 三歳まで行ふと能ら

る後治し

五加皮 一兩 牛膝 木瓜 各五分

右末し一服一ホ五分粥飲よ

調へ次う好酒兩滴添入て一日

に二度づ用いべー

●齒遲

小兒乃齒生るあと遲ハ是腎の

見調法已

〇三十九

不足なや

● 芎藭散

齒乃松々く生るは治し

山藥

川芎

當歸

白芍炒

炙甘草 各二小半

右末とじて白湯少く食後

用ひ。又此藥以て牙齦に塗

齒生るあや

● 一方 齒乃遲延治せ

雄鼠の糞 二十粒 兩方尖者

毎日一粒取用て齒の根乃上

せらべし。二十一日り至て齒

方よし生べし

● 語遲

● 小兒乃語と遲延ハ心氣不足

して邪乘ぞとせむ

● 菖蒲丸

語と乃遲延治し

菖蒲

人參

麥門

川芎

遠志

當歸

乳香

辰砂

右末と

煉蜜

少く丸

漉米飲

めて用い

● 急驚風

● 急驚風とハ或ハ驢馬牛犬禽獸

乃叫聲總して非常乃聲音

て卒り驚死。面青く口らひ

或ハ聲嘶て手足冷るよと

其驚定ると此ハ容色故の

良久して復作也。其身熱し。面赤く  
喉渴。口鼻乃氣熱。大小便黃。赤  
して赤く。惺惺として睡らる証也。  
是素熱甚多くて痰涎生じ。痰盛ふ  
して風痰生じ。不圖物了。驚馬。因  
て發る病あり。少くも六錢氏が利  
驚丸。瀉青丸。抱龍丸。宣風散。五福化  
毒丹等。以用せし。若眼睛翻。轉  
口。口と血痰出。兩足。或は跳  
肚腹。搐動。或ハ神緩。體。摸  
衣。と尋。或ハ証驚。して神昏。氣促  
也。藥。以用。せし。と吐。く。して喉  
入。と。鼻。吹。藥。以用。せし。と吐。く。して喉

心中熱し。痛。大。り。叫。者。ハ。治。せ  
ら。証。と。知。べ。い。

敗毒散 急驚風 初て起也 發熱

手足搐搦 眼上視 等乃証

治し 或ハ一切の風寒 胃

或ハ痘疹出 して 搗 發 せ ば

治し

人參 羌活 獨活 柴胡

前胡 茯苓 枳殼 桔梗

川芎 天麻 全蝎 地骨皮

白附子 姜蠶 甘草

右姜 以 入 水 煎

人參湯 最も能驚風利

柴胡 黃芩 人參 半夏

枳殼 防風 甘草

右水煎是小柴胡湯以枳殼防風

城加るたあ

鎮驚散 驚風搐搦痰嗽喘急

城治

天南星 臘月子黃牯牛乃膽と取開て

南星乃末と包ミ風を乾うて

防風 蟬蛻

右姜水入水煎

抑肝散 肝經虛熱して搐と發

或ハ發熱して咬牙し或ハ散高熱で

寒熱し或ハ肝木脾土より乘りて

嘔吐し痰涎腹脹不食し睡臥あど

安くし少く城治

當歸 白朮 茯苓

釣藤鉤 各一カ 川芎 八分 柴胡

甘草 各五分

右水煎子母共服べ

抱龍丸 小兒乃諸驚四時此風引

たり或ハ瘟疫邪熱煩燥して寧う

ららるる少く城致し痰嗽氣急并ふ

瘡疹出とて搗城發せ者

此藥城用いべ其藥性温平あり

燥ありは常に用ひて風城驅痰と

化し心城鎮熱と解し脾胃城

和し精神と益大いふ効あり

牛膽星一兩 天竺黃五小 雄黃

朱砂各二小半 麝射香一小

右末と濃煎したる甘草水

て麵の糊液煮て艾實の大さ

丸ト或ハ雪水とて糊液煮も佳

る也。薄苛湯或ハ葱白湯液用で

研化し用し。痰壅と咳嗽

姜湯あて用し。痘疹己ま形見

し敬馬あつるハ白湯あて用し。心

悸て安くしつらハ燈心の煎湯

眞珠乃末投入和勻へ時り拍ら

服し心へ。錢仲陽ハ此抱龍丸

天麻液加又一方ハ半黄五分珍

珠一小琥珀一小液加ハ甘草乃

煎湯と煉じ膏とて丸ト金

箔十片液衣し用し驚風百病

液治して大ひり効ありと

利驚丸 急驚風液治する効あり

天竺黃二小 輕粉 青黛 各一小

黑牽牛 頭末半兩生あて用し

右研勻へ煉蜜あて梧子乃大さ

丸ト一歳の児ハ一丸二歳の児

ハ二丸五歳乃児ハ三丸薄苛

の煎湯あて食後り用し

宣風散 急驚風搐搦定らば液

檳榔二枚 陳皮 甘草各五分  
黑牽牛 四兩半 八生半 八炒

右末とて蜜湯あて二三歳乃  
児六五分四五歳此児ハ一食  
前用ゾベ

五福化毒丹 急驚風痰熱搐搦等  
乃証以治ハ

桔梗 微炒 玄參 各六兩 茯苓 五兩

青黛 炒 牙硝 人參 各二兩

炙甘草 一兩半 麝香 半分

銀箔 八片 衣とせ

右末とて煉蜜あて丸ド一兩以  
十二丸とて一歳乃見ハ一丸と

四服り分ち薄苛湯あて用ゾ

瀉青丸 又ハ瀉肝丸 涼肝丸 各  
急驚風以治ハ

羌活 大黃 混紙よ包ミ煨セ一本  
川芎 山梔子 牛膽星

當歸 防風 各等分

右末とて煉蜜あて艾實乃  
大らよ丸ド半丸或ハ一丸竹葉

の煎湯よて用ゾベ

金箔丸 急驚風慢驚風痰涎塞

盛あられ治セ

半夏 南星 煨製 白附 炮

防風 各半兩 雄黃 珠砂 各二小

生犀角 一小 牛黃 龍腦

麝香 各半小 金箔 二十片

右末と、姜汁の麵糊めて麻子

乃大さよ丸、三五丸を二

十九日、人參乃煎湯にて用

べ、慢驚風、小龍腦、去

奪命丹 急驚風、人事、見知、目

直視、牙咬、舌を、唇白く、或ハ黒き

者、治、

南星 半夏 各四分 末と、姜汁を

硃砂 四小 巴豆 一小 油を去

珍珠 二小 新く、白き者、金鉤

銀鉤 各十片 輕粉 麝香 各半小

右末と、て、麵の糊めて、黍乃

大さよ丸、一歳の児、ハ一丸、燈

心乃煎湯にて用、

琥珀散 小兒乃急驚風、慢驚風、涎

流、昏冒、目直視、搐搦、肚痛、

驚癇、時時發る、治、常服、

病根、除、

辰砂 一小 琥珀 牛黃 天麻

乳香 全蝎 蟬蛻 姜蠶 炒

代赭石 燒白附子 牛膽星 各一

麝香 五分 片腦 一字

右末と、て、三歳の児、ハ一



薄苛湯にて用之。慢驚風六

附子以加

灸法 急驚風以治之

前頂乃一穴以灸之。百會乃

前一寸。若あそにて愈

はる時。兩眉乃頭人中一穴。各三

壯灸之。●百會ハ鼻筋の通

前乃髮際を五寸。巔正中ハ

豆以容る程乃陷ある處也。今

右の寸法ハ前ハ髮際を。後乃

髮際を至るまで一尺二寸あり

以て量を知べ。●人中乃穴ハ

鼻柱の下陷ある中あり也

●慢驚風

●慢とハゆる義。急驚風乃物り

驚き。卒々發るに對して。慢驚風

と云ふ。急驚風ハ實症ありて治し

易く。慢驚風ハ虛症ありて治し難

し。あそ多くハ乳食節ありて

脾胃は損じ。久しを吐瀉。或ハ大

病は煩ひ。醫師藥を誤り。脾胃を傷

み因て。慢驚風と成る也。其証身冷

面黄み。渴せ。口鼻乃氣寒。大

小便青白く。昏睡して。睛露。目

上視し。手足痠。痰して。搐。是脾

虛して。風は生ず。若四肢

厥冷咳嗽吐瀉。面黯。神慘。魚口。鴉聲。乃おとく。胃痛。兩脇動。口。白。瘡。生。髮。直。頭。搖。眼。睛。轉。痰。涎。喘。噎。頭。軟。覺。大。小。便。口。眼。手。足。一。邊。牽。引。者。八。治。せ。ら。る。症。と。知。べ。醒。脾。散。小。兒。吐。瀉。止。慢。驚。風。と。成。脾。困。と。黙。黙。と。言。不。食。を。治。以。

人參 白木 白茯苓 木香  
 白附子 全蝎 天麻 姜蠶  
 各等分 甘草 半減  
 右姜棗と入水煎

一方。天麻。姜蠶。以。去。て。南。星。炮。半。夏。陳。倉。米。二。百。粒。以。加。入。累。効。あり。と。い。ふ。

黃芪湯 慢驚風。治。之。乃。神。藥。也。  
 人參 一。小 黃芪 二。小 蜜。水。以。炒  
 炙。甘。草。五。分 炒。芍。藥。一。小。以。加

右水煎  
 益黃散 胃中乃風熱。以。治。之。  
 黃芪 二。小 陳皮 人參 各。一。小  
 白芍 七。分 生。甘。草 炙。甘。草 各。五。分  
 黃連 少。許

右水煎。食。前。不。用。以。之。  
 錢氏白朮散 積。の。痛。を。治。し。胃。以。

小兒調去記  
 〇四七

和し津液生じ渴を止煩を瀉利して  
慢驚風とありんときる者ありは服

して効あり

人參 白朮 白朮 木香  
藿香 炙甘草 一不乾葛 二不

右水煎

●丹溪ハ山藥 白扁豆 肉豆蔻 各一

不攷加へ姜一片入煎也

●若慢驚已不作ハ細辛 天麻 各一

不 全蝎 三枚 白附子 麩子包煨

た々八分攷加へて同く煎也

一方 慢驚風攷治ハ子母共服

此べ

人參 白朮 各一不半夏

天麻 各七分 全蝎 炒一枚 陳皮

茯苓 各半不 細辛 三分 薄芎

甘草 各二分

右姜以入水煎

●釣藤飲 吐久し瀉利脾胃乃氣

弱く虚風慢驚攷治也

釣藤 鈎半不 蟬蛻 防風 人參

麻黄 節以去 天麻 姜蠶炒

蝎尾 炒各二分 炙甘草 各一分半

右水煎 虚寒乃香不ハ附子半不攷

●補脾湯 小兒脾經不足ありて土

敗肝木來り侮り自睛微く動き

小兒周法記

微瀉或六潮熱往來不食或泄瀉嘔吐面乃色黃者用脈力

あま攻治

陳皮 人參 黃芪 當歸酒

服芍 神麴 葛根 肉豆蔻各

分半夏 白茯苓各七 白芍酒炒

白朮一分 黃連 炙甘草各四分

右姜以入水煎

紫金錠子 急慢驚風涎潮搐以發

或ハ吐瀉不食神昏氣弱

凡と治之

人參 白朮 白茯苓 白茯苓神

赤石末之散七次山藥炒

乳香 辰砂各三小麝香一

右末と糝一兩以て彈子乃

大さ丸ト金箔以て一粒以

薄荷湯あて研化し用之

驚後調理之法

定志丸 驚風已退神志定ら

は攻治之

琥珀 茯神 遠志 甘草湯洗

人參 酸棗仁炒 天麻 白附

天門冬 炙甘草各等分

右末と煉蜜にて皂子乃大さ

丸ト辰砂と衣と燈心薄荷の

煎湯あて用之

牛黃鎮驚丸 驚風退て後あせは  
用いて調理をぐし心神安ん氣血  
を養ひ和平にして前方り驚風乃  
發せり防比劑也

麥門冬 當歸身 酒を洗ひ

赤芍藥 煨 生地黃 酒を洗ひ 薄荷

木通 黃連 姜 煨 山梔子

辰砂 水飛牛黃 天竺黃 三味研

龍骨 炭火を煨各二ネ 青黛 研一ネ

右末と一煉蜜とて菘豆乃大豆

丸ト二三十九粒淡姜湯にて用込

灸法 醫林類證云 慢驚風ハ陰証

なり吐瀉乃病久き小因て脾胃虚困

し。搐ふ似て搐よわ〜び藥以選ひ  
用ゆとゞゞも仍灸をせ切要とを

べ〜とゞゞ

●眉心灸三壯 あせ六兩乃眉の真

中あせ

●額會灸三壯 あせ六上星の後一

寸よ陥うあせ處あせ上星ハ鼻筋

乃正中通り髮際を一寸上の

陥うあせ中りあせハ額會髮際

とを二寸上ふあせ

●百會灸三壯 あせ八前ふ出ん四寸

尺澤二穴灸七壯 あせ八肘乃中横

紋の上動脈に中りあせ

●慢脾風

●慢脾風ハ面青ク舌短ク頭低眼合て開ク也睡多ク中ノ頭搖ク  
 舌出シ頻ニ醒ク臭吐物と嘔  
 口以嚙又咬牙し微し擗て休也  
 或ハ身冷或ハ身温クして四肢冷  
 其脉沈微也陰氣極於盛胃  
 乃氣極やて虚レシテ十人ノ一二  
 ありて救ヒゴシ是慢驚乃後  
 吐瀉脾敗損多由て病此傳變色  
 獨受所あるゆへ脾風とシ治法  
 ハ大要胃敗生ト陽返回也黒附湯

川鳥散或ハ四君子湯ヲ附子以加へし  
 若大衝乃脉ありハ百會以灸して救  
 多し大衝とハ足外大指乃外側  
 大指の本節乃後陷多處動脈  
 此あり或ハ百會前より出レ ●醫林  
 類證不云ハ小兒頭熱とシども眼  
 珠青白くして足冷ハ頭熱とシ  
 ども或ハ腹脹て足冷ハ頭熱  
 とシども或ハ瀉して足冷四ノ六  
 頭熱とシども或ハ嘔して足冷五  
 六頭熱とシども或ハ渴して足  
 冷也上乃五証忽ち吐て搐也  
 者ト慢脾風とシ速ニ補脾益真

湯液與べし。每服三小。更に全蝎一枚  
を加驚し。因て搐者宜し。前朴散  
枚與べし。每服三小。更に附子前胡各  
半小。を加慢脾風。若身冷て粘汗し。  
直了臥て尸乃おとく。喘嗽頭軟覺へ  
べ大小便し。虚痰上り。攻呼吸の氣  
穢き者。治せざる。症と知べし。とる。

黑附湯

脾風以治し

黑附子 炮三小

木香 一小半

白附子 一小

炙甘草 五分

右姜以入水煎。匙以て下る。

川烏散

脾風以治す

川烏頭 生一小

全蝎 木香 各五分

香を加へ

補脾益真湯

小兒稟受弱く。外實

裏虚を因て乳以て大便乃

色青く。慢驚風と成氣逆上し。涎潮

眼珠直視し。四肢抽掣を或は變

蒸客忤を因て作す。或は驚嚇を因て作

り。或は誤て心以鎮免熱以生寒

冷乃藥以服せり。因て作す。以治す。

- 木香 人參 當歸 黄芩
- 丁香 厚朴 訶子 陳皮
- 炙甘草 草菓 茯苓 白朮
- 肉豆蔻 麵小包 煨を 肉桂

半夏 附子 炮各七分

全蝎 微炒 一服 一攻 用 以

右 每服 三小 姜 二片 棗 一枚 水 一

盃 半 入 煎 下 七 六 分 小 至 止 見 乃

吐 飢 乃 時 熱 一 服 免 服 訖 以

心 腹 以 揉 動 一 其 藥 力 以 助 之

回 之 久 一 時 許 過 乳 食 以 與

之 一 湯 之 者 小 人 參 茯 苓 之

加 之 附 子 丁 香 肉 豆 蔻 以 入 之 一

● 瀉 之 者 小 丁 香 訶 子 以 加 之 一

● 嘔 吐 之 者 小 陳 皮 丁 香 半 夏 之

加 之 一 ● 腹 痛 之 者 小 厚 朴 良

姜 以 加 之 一 ● 腹 脹 之 者 小 厚 朴 丁 香

前 胡 枳 殼 以 加 之 一 ● 咳 嗽 之 者

前 胡 五 味 子 以 加 之 一 附 子 肉 桂 草

菓 肉 豆 蔻 之 去 之 一 ● 痰 喘 之 者

之 小 赤 茯 苓 枳 殼 前 胡 以 加 之 一

附 子 丁 香 肉 豆 蔻 草 菓 以 去 之 一

● 足 冷 之 附 子 丁 香 厚 朴 以 加 之 一

● 氣 逆 一 下 之 小 前 胡 枳 殼

以 加 之 一 當 歸 附 子 肉 豆 蔻 以 去

之 一 ● 惡 風 自 汗 小 肉 桂 黃 芪

以 加 之 一 心 腹 乃 結 氣 或 嘔 噦 之

前 朴 散 泄 瀉 一 腹 脹 之 時 痛 之 或 驚 以 發

之 之 以 治 之

小兒調法記



前胡 白朮 人參 陳皮  
良姜 藿香 炙甘草 厚朴 各等分

右水煎肚腹飢者服之  
異方銀白散 或ハ吐或ハ瀉一痰涎  
鳴微一喘ぎ晴以露一驚死跳か

どくある以治ん

石蓮肉 白扁豆 炒茯苓 各二分

白附子 人參 天麻 全蝎

木香 炙甘草 藿香 各半分

陳米 三分 香色炒

每服二分 冬瓜仁 七粒 姜一片 入

水煎此藥ハ胃以助以風を去慢

驚風了通下用

●天釣

●天釣ハ天吊と同ト是乳母酒食

前炒鹹酸物以食過一毒氣乳

入たら以吃ちむるハ小兒心肺熱

以生ト外天風以感ト卒々熱壯

小眼翻ト騰り手足掣ト已搐き

魚乃釣ト已たら状のどくある代

天釣トハ小兒風熱以解利を

時ハ手又應トて愈るたあを

九龍控涎散 小兒熱以蘊之痰經

絡を塞ぎ頭仰き目上視を以治ん

滴乳香一分 天竺黄一分半

雄黄 蠟茶 枯礬 各一分

炙甘草 荆芥 炒 藜豆 一百粒 半生  
赤脚蜈蚣 一條 酒浸 一炷

右末 一 每服 半小匙 一 小は  
て 人參 薄荷 湯あて 用ゾー

● 釣藤飲

天弔 潮熱 以 治 之

釣藤 人參 各 半 小 全 蝎

天麻 各 一 小 犀角 炙甘草 各 半 小

右末 一 每服 一 小 水煎

● 發搐

● 搐 八 手 足 之 々 々 手 以 握 り び び 々

先 々 之 々 々 々 男 乃 發 搐 目 左 以

視 八 聲 之 々 右 以 視 八 聲 之 々 女

乃 發 搐 目 右 以 視 八 聲 之 々 左 以 視

八 聲 之 々

● 寅 卯 辰 乃 時 子 搐 以 發 潮 熱 一

目 上 視 一 手 足 動 搖 一 口 舌 涎 之 熱 々

以 流 一 頸 乃 筋 急 々 々 此 肝 木 太 旺

之 々 々 々 地 黃 丸 以 以 腎 以 補 以

瀉 青 丸 以 以 肝 以 抑 一

● 巳 午 未 以 時 搐 之 發 潮 熱 驚 悸

一 目 上 視 一 白 睛 赤 々 牙 關 緊 急 口

舌 涎 以 流 一 手 足 動 搖 々 々 此 心 火

太 旺 之 々 々 地 黃 丸 以 以 肝 以 補

以 導 赤 散 涼 驚 丸 以 以 心 瀉 之 下

● 申 酉 戌 之 時 搐 以 發 潮 熱 一

喘 之 目 微 一 斜 視 一 睡 之 時 睛 以 露

手足冷大便淡黄水以下  
此肺病者益黄散以脾以補  
以導赤散以心以抑瀉青丸以  
以肝以抑

●亥子丑乃時搐以發潮熱  
不堪卧時稔身温  
壯熱多目睛斜視喉乃中小痰  
大便銀褐色以乳食消  
多睡以醒益黄散  
脾以補以導赤散  
驚丸以心以抑

●傷風乃發搐口中氣熱  
呵欠煩悶手足動

青膏以發散之  
素怯者多病  
●傷食以發搐身温  
多睡以多唾或吐以不食  
以搐者先搐以定先搐退  
以白餅子以用以後安神丸以用

●百日乃内の發搐  
真假乃二証  
者八重  
實也  
搐以發

ありは治せらるる大青膏液以て  
發散し塗願乃法と浴體の法也

用ゾー

地黄丸ハ六味瀉腎丸ハ四十四

導赤散ハ十八白餅子ハ十八

益黃散ハ六十五

涼驚丸 龍膽 防風 青黛各三

釣藤ニホ黄連一兩ニホ

龍腦一ホ牛黄 麝香各一字

右末と一々麵乃糊あて黍の

大ら丸一三五丸とせ一二十

丸金銀乃煎湯にて用ゾー

大青膏 小兒乃傷風吐瀉心温

乍ら涼乍ら熱せらば治し

天麻 青黛各一ホ白附子一ホ

烏蛇肉 酒に浸し焙り乾せ

蝎尾 硃砂 天竺黄

麝香各一字

右末と一々生蜜と和膏と成毎

服半息子乃大さ或ハ一息子

大さ生じて一月乃内の兒ハ

米乃大さ牛黄膏と同ドク薄

湯あて化し一處り用ゾ五歲

已上乃兒ハ甘露飲と同ド服

まひべー甘露飲ハ六十九

牛黄膏 熱及び傷風壯熱し湯

以治以

雄黃 甘草 甜硝

寒水石 生各二ノ半 爵金一ノ

煤豆粉一ノ 龍腦一ノ

右末と一蜜と和膏と成半皂子

乃大さま一々食後う薄苛水

化し用之

錢氏安神丸 邪熱驚啼以治之

麥門冬 馬牙硝 白茯苓

山藥 炙甘 寒水石 各五ノ

硃砂一兩 龍腦一字

右末と一煉蜜にて芡實乃大さ

丸ト半丸で砂糖水化し用之

塗願乃法 麝香 蜈蚣 牛黃

青黛 各一字 全蝎 半ノ

薄苛葉 半ノ

右末と一熟棗乃肉を膏と

之新き綿り塗の願乃上

貼四方一指許出火孔上に

指灸灸頻り熨べし生きて

百日の裏外乃見ハ此塗願の

法并浴體孔法以用之

浴體乃法 肥胎并胎怯胎熱以

治之肥胎と八生を落とら大肥

たらあとも胎怯と八生を落よ

り瘦百く面は精光をさる胎

熱と八前（八前）に見たるを八

烏蛇肉 酒に浸し焙（焙） 白礬 青黛

天麻 各二小 蝎尾 硃砂 各半小

麝香 一字

右同く研末し（研末）て毎服三小葉の

わら挑乃枝一握り同く煎（煎）して

浴せ（浴）べし但し背へ浴せ（浴）べし

●癩証

●風熱驚駭（風熱驚駭）し（驚駭）て時多（時多）く目眩

運搖（運搖）き痰沫（痰沫）吐（吐）忽（忽）然（然）と（と）て地亦倒

し人事（人事）と見知（見知）らば癩（癩）と（と）り身熱

し（し）て脈浮（脈浮）多（多）く陽（陽）と（と）て治（治）易（易）く

身冷（身冷）て脈沈（脈沈）多（多）く陰（陰）と（と）て治（治）難（難）く

總（總）して小兒（小兒）乃五癩（五癩）治（治）せり

皆臟（皆臟）は隨（隨）て少（少）と治（治）せ（せ）べし

●各一獸（各一獸）乃屬（乃屬）せり所（所）あり

●犬癩（犬癩）ハ反折（反折）り上竄（上竄）して犬（犬）の叫（叫）せり

●牛癩（牛癩）ハ目直視（目直視）先腹

滿牛（滿牛）乃叫（乃叫）せり少（少）と脾（脾）あり

●雞癩（雞癩）ハ驚（驚）き跳（跳）り反折（反折）り手縦（手縦）雞（雞）の叫（叫）

する是肺（是肺）あり●猪癩（猪癩）ハ乃（乃）どく

あり沫（沫）吐（吐）猪（猪）の叫（叫）せり少（少）と腎

●羊癩（羊癩）ハ目眩（目眩）て舌吐（舌吐）羊（羊）乃

叫（叫）せり是心（是心）あり五癩（五癩）重（重）き者（者）ハ死（死）せ

病後（病後）甚（甚）し者（者）も亦死（亦死）し治法（治法）皆

五色丸（五色丸）用（用）べし

五色丸

辰砂 珍珠 各五ホ

水銀

黑鉛 各二兩 水銀 同下 煎

雄黃 三兩

右煉蜜にて 麻子乃大ら丸ト

三四丸 金銀薄奇湯少て用下

硃砂滾涎丸

五癩皮治

白礬

硃砂 赤石脂

硝石 各等分

右末とて 蒜皮研膏し 藜豆

乃大ら丸ト 三十九丸 食後子煎

芥湯少て用下

參朱丸

癩皮治し 大効あり

人參 蛤粉 朱砂

右末とて 猪乃心血少て 梧子の天

ら丸ト 三十九丸 金銀湯少て

虎睛丸

癩証邪氣心入治

虎睛 一對 灸遠志 姜製犀角

人參 麥門冬 琥珀 各一ホ

菖蒲 茯神 各一ホ 半夏 二ホ

牛膽星 三ホ 麝香 一ホ

右末とて 甘草膏少て 芡實の天

ら丸ト 辰砂衣とて 二丸ト

金銀竹葉燈心乃煎湯少て用下

牛黃膏 小兒乃風癩皮治

牛膽星 黃連 姜炒全蝎 洗ひ炙

蟬蛻 麴 各二小半 姜 薑 各一

白附子 防風 天麻 各一小半

木香 一 麝香 五分

右末と 蒸たる棗乃肉少 小

豆の大少 丸 荊芥生姜乃

煎湯不化 食 遠く用

● 禁風

禁風とハ眼閉口噤 啼聲漸

少く舌乃上り肉肉聚 粟米の

狀乃どくみく 乳吹くと能

口より白き沫と吐 二便通せらる

み 胎中 熱氣 受て 毒と心脾

又流 由 喉舌 見 或ハ

風邪乃爲り 搏して 成とあら

辰砂膏と用 辰砂 硼砂

牙硝 各一 小半 玄明粉 二 小

全蝎 真珠 各一 麝香 一字

右末と 油紙 包 自然 膏

と成 豆粒 程 乳汁 調 乳頭の上

小付て 吮 乳 又ハ 金銀薄 苛湯

にて 用 潮熱 あら 甘草湯

成 以て 用

單方 見 生 きて 七日 乃 内 口 噤

治

牛黄 一 小



細く研竹瀝液以て一字と調

用之

●馬脾風

小兒肺脹喘滿胸膈氣急兩  
脇動死陷こて坑以之鼻乃充脹  
悶亂嗽渴聲啞て鳴之痰涎閉  
塞之俗俗り馬脾風といふ急治  
せらば死すあとい且夕あを後

乃二方以て治之

牛黃奪命散

白牽牛 黑牽牛 各半生半熟頭  
未取て五ホ

大黃 檳榔各兩

右末と三歳乃見よハ二ホ冷漿

水にて用之し涎多しハ輕粉

加へ涎無ハ蜜少許以加へ

無價散 風熱喘促 悶亂安ら

俗り馬脾風といふ者以治之

硃砂 二ホ半 輕粉 半ホ

甘遂 一ホ半 麵小包 煮焙乾之

右末と香油一滴以温漿水少

許乃中へ入浮へ其油乃上ホ右

乃藥末一字以抄て置藥末下ホ

沈去バ却て漿水にて用之

一方は滑石二ホ以加へて油隊膏

と名ソタ

暴瀉俗は馬脾風といふ大小便硬

きハ急ニ牛黄奪命散ヲ用テ吐瀉  
下シ次ニ白虎湯ヲ用テ吐瀉平ク

●諸疳

●内經ノ意數肥物以食之其人多  
シク内熱セシ數甘物以食之其  
人多シク中滿セシ蓋シ其病  
肥物と甘物ニ因テ致セ所あるニ  
リ名シテ疳トシ小兒四五歳  
でハ乳餽未息ビ胃ノ氣未全クハ  
穀氣未充クハ父母只當分の愛を  
加シ瓜菓物其外一切料理ハ肥甘  
物ニ怒リ朝ニ與ヘ暮ニ食ニ心

●漸漸積滯リ腹固ト成テ身熱  
體瘦面乃色黄シテ或ハ肚大ひス  
青筋出腹痛瀉利一諸の疳作也  
トシ又錢仲陽ハ小兒乃疳多クハ  
大病の後或ハ吐瀉乃後藥以テ下  
之ニ因テ脾胃虚損シ津液亡トテ  
成所あるトシク

消疳飲 小兒乃疳疾身熱一面黃  
小肚大ひ一青筋あやテ瘦弱キ  
成治一通シテ諸疳治ハ  
人參 白朮 白茯苓 胡黃連  
黃連 神麴 青皮 陳皮  
砂仁 炙甘草

右水煎食傷ふハ山査子以加へ。  
虫わらふハ使君子以加へ。

消瘡湯 小兒大便乃色瘡白小便  
濁濁或或澄澄て米泔米泔のどくある以

治治ん

山査子 白芍炒 白茯苓

白木 澤瀉 黄連 姜炒各一ホ

青皮 四分 甘草 生二分

右姜棗以入水煎

●肝瘡

肝瘡ハ即風瘡多ク頭以揺揺し。

目以揉揉て白膜睛睛と遮遮り面腫汗流

是面乃色青青く黄黄子子髪立筋青青く腦

熱熱しし腐瘦腐瘦たる以以りりハハ地地黄黄丸丸六六

味等分分ある以以て肝肝と補補べし

生熟地黄丸 肝瘡以治治す

生地黄 熟地黄 各五ホ 川芎

赤茯苓 黄連 杏仁 半夏

天麻 甘草 當歸 枳殼

地骨皮 各二ホ 半黑豆 四十五粒

石末と煉蜜あて丸一用之し

醫統不ハ當歸二ホ餘ハ各二ホ半

姜黑豆十五粒以入水煎ト用之

とあしとあとあ

天麻丸 小兒乃肝瘡風瘡眼瘡以  
治治ん

青黛 黃連 天麻 五靈脂

川芎 夜明砂 蘆薈 各一分

龍膽 防風 蟬蛻 足去各一分

全蝎 二枚 焙 麝香 少許

右末と猪膽汁を糕に浸し丸

ト薄荷湯にて用ひべし

●脾疳

脾疳ハ即虫疳也。腹脹氣粗く

酸臭は物以下し。泥土を愛し喫以

り。此は脾を補べし

靈脂丸 脾疳食疳に治し

五靈脂 麥芽 青皮 砂仁

使君子 白豆蔻 陳皮 白朮

煨薑 炙甘草 各等分

右末と米の糊にて丸じ。米湯

以て用ひべし

五疳保童丸 五疳に治す

黃連 白鱧 青皮 五倍子

草龍膽 棟根 蟾頭 青黛

雄黃 夜明砂 蘆薈 熊膽

麝香 胡黃連 天漿子 各一分

右末と糯米乃糊み。麻子の大

ひらゝ丸じ。二歳の児へ毎服一

丸米飲みて用ひべし。一日三

度で一方小乾蝸牛微し炒たり

一分に加

益黄散 脾疳及び肺疳治し

陳皮 一ふ 青皮 訶子

炙甘草 各五分

右一服とて水煎じ用ひ又人參白朮各一ふ加へて効しわをとり

○心疳

心疳ハ即驚疳あり面黄し

頰赤く煩満壯熱し虚しく驚れ易く口ろ瘡以生じおし心疳補べし

茯神丸 心疳治し

茯神 蘆薈 琥珀 黄連

赤茯苓 各三ふ 遠志 姜炒 釣藤

蝦蟇 炒 各二ふ 菖蒲 一ふ 鹿射香 許

右末とて粟乃糊みて麻子の大

ひさ丸とて薄苛湯液以て十九

つ用ひ

○龍膽丸 小兒孔心疳頰赤く面黄

し鼻乾き心躁ぎ口の内ふ瘡以生じ

驚悸みち治し

龍膽 赤茯苓 黄連 胡黄連

朱砂 各二ふ 麝香 一字

石末とて蒸餅液泡し黍乃大

ひさ丸とて每服二十九食後遠

ざけて白湯少して用ひ

安神丸 邪熱驚き叫び心疳面黄

又頰赤く。壯熱するは治む方ハ幸キテ  
化虫丸 疳因て虫生じ。五心  
煩熱も治す。

燕蕒 黄連 神麴 麥芽 炒各

右末と。麵乃糊にて黍の大ハ

ら丸ド。空心る米飲して用也。又

ハ煉蜜めて菘豆大ひき丸也。

ハ蕪荑丸と名く。十九丸を十五丸

至て米湯まで用也。

肥兒丸 諸疳多くハ乳をくして食

成與ると太早き因。或ハ泄瀉と患

る。因て胃虚。虫動き。日漸く

羸瘦腹大ひかり。行くと能ハ代髮立

發熱し。精神ふき治す。

黄連 神麴 麥芽 肉豆蔻

使君肉 各五分 檳榔 二分

木香 二分 右末と。麵乃糊以て丸ド

熟水にて用也。

肥兒丸 疳消し。積を化し。癖成

磨し。熱を消し。肝成伐。脾を補ひ。食

成進。光虫を殺し。肌膚成潤し。元氣

を養ふ。

人參 山查 神麴 麥芽

黄連 姜炒各三分半 白朮

炙甘草 茯苓各三分 使君肉 四分

胡黃連 蘆薈各二小半 碗盛泥

少封土坑の中置四方へ糠

以入火まで煨透して用

右何れも末と一黄米乃糊して

餅と一米湯まで用

○肺疳

肺疳ハ氣疳より咳嗽氣逆上

多く喘ぎ鼻液採甲咬寒熱往

來也亦脾以補へ一あは虚す者

其母以補へあは益黄散并後

方宜しく選ひ用之。益黄散乃

方ハ六五丁

○清肺湯 肺疳以治

桑白皮 五小紫菀 前胡 黄芩

當歸 炙甘 天門冬 連翹

防風 赤茯苓 生地黄

桔梗各二小半

右每服二小水一盞入煎用

○化疳丸 治証前同

蕪荑 蘆薈 青黛 白芷梢

川芎 胡黄連 黄連

蝦蟇 煨各一

右末と一猪膽汁と糕以浸一丸

杏仁の煎湯まで卧不臨て用

へ

○蝦蟇丸 五疳腹脹面黄と體瘦寒

熱し泥以喫ひ鼻を揉甲以咬頭髮  
長せむ肌肉は瘡癬あまて乳食以  
吐大便乃色定まらば日小漸く瘦る  
以治也

蝦蟇 使君 炒肉以取

皂角 燒各十二兩 青黛 二兩半

龍膽 二兩 雄黃 研水飛して二兩

右末と水糊して粟米乃大ひ糸  
丸して一歳乃兒了七丸乳米飲以  
以て用也

○腎疳

腎疳ハ即急疳多を腦熱肌削  
がし手足氷乃じく腹痛滑泄

遍身小瘡疥以生齒腫斷宜る  
若急治せば牙斷潰爛して  
一時脱落世俗は走馬疳  
と呼とり。さかち和俗は齒瘡  
と云者あまを六味等分る地  
黄丸以て腎を補べ

○地黄丸 腎疳以治

熟地黄 四兩半 赤茯苓 山茱萸

山藥 牡丹皮 各三兩 使君

川芎 練子 焙各二兩

右末と煉蜜して丸して空心

用也

○熱疳



○熱疔ハ潮熱火乃どく。大便澀り  
滞り。肌肉黄ぢと瘦雀目あるはり。

○胡黃連丸 肥熱疔治也

胡黃連 川連 各半兩 硃砂 二兩半

右末と一和勻へ猪膽乃内り入  
淡漿液用て煮鍋乃上よ。杖を且  
し。線以て猪膽を釣鍋の底小。  
著ららし。飯炊炊の間程煮  
て取出し。蘆薈麝香各一分以  
研入。飯よて麻子乃大いさ丸ト  
五七丸を。一二十九乃至米飲  
よて用ゆべし。一方よ。青黛半  
蝦蟇足液去灰よ焼て二分以加

○冷疔

○冷疔ハ泄瀉。虚汗出て止ら

○至聖丸 冷疔瀉治也

丁香 丁皮 各一木香 厚朴  
使君 陳皮 肉豆蔻 濕紙包  
右末と一神麩乃糊少て丸ト。米

飲以て用ゆべし

○木香丸 瘦冷疔治也

續隨子 一兩 蝦蟇 大ひる者三ツ  
麝香 一木香 青皮 檳榔  
肉豆蔻 各二木半  
右末と一煉蜜以て丸ト。薄苛

湯少用之

○脊疔

脊疔ハ虫脊骨以蝕ハ。鋸乃齒のじく十指皆瘡以生。頻々甲を咬身熱。羸瘦下利。或は汗あり

○大蘆薈丸 木香 蕪荑 青黛

檳榔 黄連 蘆薈各一兩

蟬蛻 二十一箇 胡黄連 五木

麝香 少許

右末と猪膽二箇乃汁取て糕と浸一丸ト米飲して用之

○腦疔

腦疔ハ頭悶へ腦熱。滿頭瘡と

生じ身汗。顔腫脹高起あり

龍膽丸 龍膽 升麻 防風

赤茯苓 蘆薈 油髮 青黛

黄連 練根 焙各等分

右末と猪膽汁一糕と浸し丸ト薄苛紫蘆湯して用之

○筋骨内外鼻疔

○筋骨内外鼻疔

○筋骨ハ血液濁して瘦るあり

ハ地黄丸六味等分を以て肝以

補へ

○骨疔ハ喜て冷る地より因り

六味等分を地黄丸以て腎以補

べ

○内疳ハ目腫腹脹痢色定らざり或ハ沫青白く漸漸瘦弱此冷証也木香丸以用之方ハ七十丁

○外疳ハ鼻乃下赤くたゞ自鼻以揉頭又瘡あり耳以透て生じ赤く結ハズ此瘡の爛じ以治せり後乃三方を用之

○蘭香散 蘭香葉莖各二ホ麩七性以

銅青 輕粉 各半ホ

右末として乾し付べし

○白粉散 烏賊骨の末一ホ

輕粉一ホ 白芨乃末三ホ

右和勻へ先清漿水以用て瘡を

洗ひ拭ひ乾しして付べし

○鼻疳ハ上焦壅滞り疳虫鼻の中ホ上りて蝕ひ赤しして痒く壯熱

して啼叫び皮毛乾き焦じ肌膚瘦削るがごとく鼻乃下じ唇よ連て

瘡以生じ赤く爛々たり

○麝香散 鼻疳鼻乃下は瘡以生じ

る以治し

麝香 半ホ 雄黄 升麻 各二ホ半

枯礬 五ホ

右末とし人乳以調へ付べし

○疳積

加味肥兒丸 諸の疳積腹脹大い

あしく壯熱を治す

青皮 陳皮 香附子 神麴炒

麥芽炒 白朮 白茯苓 三稜

莪朮 二味煨 醋少 炒 黃連 姜炒

胡黃連 使君 蘆薈

檳榔 各五分 木香 三分

右末と 麵乃糊以て丸ト 燈

心湯あて用ゆべし 〇虚したら

ぬハ 人參を加へ發熱あきふハ 胡

黃連去べし

〇一方 小兒乃疳積腹脹て鼓のとく

あし治す

蝦蟇

多少の拘らせ 毎日六七足以用

て頭足皮腸を去只本身と四分

腿と用て 白水の中へ塩酒葱

椒入共煮熟して吃し免愈

るゆて 〇是を用ゆべし

〇香薷丸 疳治し 食積虫積を消

し 及び腹脹大ひあるを治す

三稜 莪朮 青皮 陳皮

檳榔子 神麴 麥芽炒

龍膽 各五分 練子核去 使君

胡黃連 川黃連 各四分

白朮 一兩 木香 二分 乾蟾 五箇

右木香以上乃藥末と 乾蟾

醋液用て煮膏とて薬と和若  
乾く再び醋糊を加へて麻子乃大  
ひら丸とせし毎服十五丸清米飲  
て用也

蘆薈丸 疝氣にて腹脹骨熱せら

治法

木香 蘆薈 檳榔子 各二小半

蝦蟇 酒に浸し炙骨を去

黄連 各一兩 蕪荑皮を去 青皮

陳皮 各五小 黄連已下乃四味ハ巴

豆三七粒壳液去たるを同トを煎

巴豆液捨去べし

右末と猪膽汁とて小豆の大い

湯よて用也

又一方 疝積腹大ひら丸治法

胡黄連 阿膠 醋に浸し各五分

麝香 當門子 四粒 當門子とハ麝香

麻乃手はよく洗つて堅まりん

色少し黄多る液にふあきを用

川黄連 炒 神麩 炒 各二小

右末と猪膽汁とて丸と白木

湯よて用也

祖傳檳榔丸 疝疾乃積塊腹大ひ

りして虫ある等証治法

檳榔子 一兩 三稜 麩 毛液去醋と

義木 醋して炒 青皮 陳皮

雷丸 乾漆炒 麥芽麩 神麩

山查子 各五分 鶴虱 畧炒 胡黃連

炙甘草 各三分 蕪荑 二分 半

木香 良姜 各二分 壁土搥 炒

砂仁 一分

右末と 醋糊して 丸じ 空心り

淡姜湯を 用じ

○ 蛇疔

○ 蛇疔ハ小見り。太早く 肉食は 與る

るは 肥膩き 物腸胃は 停り 畜化

吐き 腹痛と 脹滿唇 紫小 肛門及 齒は

○ 下虫丸

新白苦練皮 酒に 浸し 焙す

綠色貫衆 木香 桃仁 蕪荑

鶴虱 各一分 雞心檳榔

乾蝦蟻 炙焦し 各三分

使君 五十箇煨 肉は 取る

輕粉 五分

右末と 麵乃 糊して 菽豆の大 小の

さま 丸じ 每服二十 丸天 明り 清る

肉汁を 用じ 右乃 方を 當歸を

黃連 各二分 半分 加へ 脊疔及 疔

疔勞は 治す 之を

○妙應丸 蛇疔治之

檳榔 腹子 黃連 各半兩

黑豆 白豆蔻 各一兩 木香

白蕪荑 史君肉 各二不半

右末とて 皂角湯と以て丸とす

湯とて用之

○丁奚疔露疔

○丁奚疔丁ハ伶仃の義也之危く

弱乃貌翼ハ腹乃大ひあると云也

其証手足と項と極て細く尻高く

肉削ぐと云る 瘦臍突出て胸陷

或ハ穀癥生じ生米を愛し喫

○哺露疔哺ハ乳也飲せると露ハ

わらわると讀り乳哺消せハ脾胃

虚し形瘦骨露也虚熱往來し頭

乃骨分開し食以翻し虫を吐煩渴

嘔噦せると云

○十全丹 丁奚疔露疔治之

青皮 陳皮 莪朮 五靈脂

川芎 白豆蔻 檳榔

蘆薈各半兩 木香 使君肉

蝦蟇各一不

右末とて猪膽汁と糕と浸

丸と用之

○疔勞

○疳勞とハ疳小勞瘵乃証あきて

骨蒸朝熱し盗汗し腹硬く面肌

瘦飲食少きとも肌膚と成らるる

○黃芪湯 小兒乃疳勞喘嗽し骨蒸

虚汗渴きて腹瀉し食少を治に

黃芪 人參 當歸 川芎

芍藥 蝦蟇 炙足城去 生地黄

驚甲各一介半 茯苓 陳皮

半夏 柴胡 使君肉各一介

右姜棗水煎入煎也

○驚血煎 小兒乃勞疳治也

黃連 胡黃連 各二介 柴胡

川芎 各半兩 蕪荑 人參 各三介

使君 煨し十二枚

右驚乃血一盃 吳茱萸半兩 以

て胡黃連と黃連との二味を拌和

醃し一宿し次乃早炒乾し只二

黃連のこみ用て前乃五味の藥を

和末と栗の糊を丸し米飲

以て用也

●疳瀉痢

○疳瀉とハ泄瀉を疳治り其証

毛焦唇白く額乃上り青き紋出

て肚腸鳴泄利を治るなり

香薷丸 疳瀉治り

黃連 三介 肉豆蔻 木香



訶子 砂仁 茯苓 各一分

右末とて飯炊以て丸じ。米湯  
て用いべし。或ハ至聖丸炊用  
亦可。方ハ七十丁

○疳痢ハ疳又痢病乃加る。外  
風寒暑濕炊挾。或飲食宿滯。水  
穀調らば頻下痢。さらたや

○木香丸 疳痢炊治

黄连 木香 厚朴

夜明砂 各三分 訶子 一分

右末とて米炊以て丸じ。艾葉  
生姜湯よて用いべし

○四治黄连丸 五疳八痢炊治

黄连 一分四分と作。一分ハ酒  
炊用て浸し炒。一分ハ生姜の

汁炊用て炒。一分ハ呉茱萸湯  
炊用て炒。一分ハ益智炊用て

同トを炒。益智炊去

白芍 酒よて煮焙。四兩 使君 焙。四兩

木香 二兩

右末とて蒸餅炊以て丸じ。米飲  
よて食前用い。一日三度。但

猪肉冷水炊忌べし

○秘傳保安丸 小兒乃五疳八痢吐

瀉肚大ひは青筋わきて面黄。こ

肌瘦疳積等乃疾炊治

肌瘦疳積等乃疾炊治

肌瘦疳積等乃疾炊治

肌瘦疳積等乃疾炊治

白朮 陳壁土多ひ和て炒土以去三兩

神麴 木香 檳榔 茯苓

三稜 使君 厚朴 葶藶

甘草 各一兩 蒼朮 二兩 陳皮

枳實 人參 莪朮 各一兩半

黃連 猪膽汁浸 砂仁 麥芽

益智 肉豆蔻 藿香

白豆蔻 各五分

右末と蜜まて龍眼肉乃大ひ

ら丸ド毎服一丸米飲り化

一用也

●無辜疔

無辜ハ鳥乃各一して晝隠夜

出ろ鳥なる也。小兒乃衣物或ハ席物

埃乾て夜外に置若此鳥其上埃過

ろ又ハ羽埃其上に落る埃知らず

して其ま小兒不著むとハ毒わを

て瘡乃病を成埃無辜疔といふ也。

其証腦項乃邊に枝埃生し。或は埃

按バ轉動して痛まど其中小米

の粉乃どくある虫わを速くよる

埃破ららる時其虫熱氣を隨て流

散し藏腑を淫蝕し。以て肢體小

瘡瘡生し。便利に膿血を下し壯

熱して羸瘦頭露し骨高と埃致

むなる也。初起ると針を用て刺破

膏藥貼て愈せし

癰疾

癰疾ハ血と膜と乃間小包まきて。脇は僻側塊あり或はあま俗る加たるといふ者あり。錢仲陽乃意は案どろり。癰塊ハ兩脇は僻あり。痞結ハ中脘は否る。あま乳哺調らず。飲食滯り。邪氣相搏て成或ハ乳母の身持悪く。意正し。うらづらふ因て致せ所なり。古人多くハ尅伐以用て痞癰既久し。飲食減少し。脾氣必も虚し。久しや愈は必も先胃乃氣を固せ。以て主と。正を養時ハ積自ら除くべし。若直は其結きたる以攻と欲せハ惟善結を以消せると能ハらるのみにわらむ。抑亦其脾土以損は。總して脾虧損せば變証百出べし。各類以參へ及び其証は隨て主治せし。若癰塊日久し。元氣脾胃共は虚せば朝り補中益氣湯以服し。免夕千金消癰丸を用ひ。間は混元丹と與へ兼服し。免効し。次獲者多し。

淨府湯

淨府湯 小兒乃一切癰塊發熱し。口乾き。小便赤く。或ハ洞瀉するを以治し。

柴胡 茯苓 猪苓 澤瀉

山查 三稜 莪朮 二味醋炙炒

黃芩 人參 半夏 各八分

胡黃連 甘草 各三分

右姜棗以入煎之

○千金消癖丸 小兒乃癖疾積塊以

治之 殊子効 一 あり

蘆薈 阿魏 別りて糊とあす

青黛 木香 厚朴 檳榔

陳皮 白朮 去炙甘 各一 小使君

胡黃連 山查子 香附子

三稜 莪朮 二味醋炙炒 各二 小

人參 白朮 茯苓 各三 小

麥芽 炒 神麴 水紅花子 各四 小

右末と 阿魏 一 小 水了 研麴

と 和糊と 菘豆大ひさま丸ト

米飲白湯あて用ゆべし

○益見餅 小兒乃癖疾治以

木香 一 小 檳榔 一 小 半

神麴 炒 二 小 半 白朮 四 小 山查

使君 水紅花子 各五 小

右末と 黃臘以入 麵水 小 和煎

餅とあてて吃むべし

○肥兒丸 癖疾治以 神乃と

方ハ 六十七

○白餅子 癖疾治以 方ハ 六十八

○紅丸子 血膜水以包て脇乃傍時  
時痛く寒熱が發せり後治日久  
く結疔瘰と多しる小も亦用ひて

効一あや  
三稜炮 莪朮 煨 芫花 醋炙  
烏梅炒 桃仁 皮尖と去 杏仁 上二同  
巴豆 二十粒 霜と取  
硃砂 五小衣とせ

右末と醋糊以て菓豆の大ひ  
うま丸硃砂と衣と三五丸  
米湯よて用ひ

○大黃膏 朴硝 大黃 各等分  
右末と蒜液研和膏とありて膏

木綿乃類を伸て瘡癩を貼へ  
自ら軟ふあをて消るなり

○諸熱

○傷寒乃熱手足少冷發熱惡  
寒汗多面の色青く慘て舒る  
あは左乃額を青き紋あり

○傷風乃熱手足微温く汗わ  
りて面赤く光り

○傷食乃熱ハ目胞腫右の額を青  
き紋あり身熱頭額腹肚尤も甚  
し夜熱晝真涼面黄く或ハ吐利  
して腹疼むなり

○驚風乃熱ハ面の色青紅く額乃正

中<sup>あ</sup>り青<sup>あせ</sup>き紋<sup>いん</sup>ありて手<sup>て</sup>乃<sup>な</sup>心<sup>こゝろ</sup>は汗<sup>あせ</sup>なり。  
時<sup>とき</sup>時<sup>とき</sup>驚<sup>おどろ</sup>湯<sup>ゆ</sup>ありて手<sup>て</sup>の脉<sup>いん</sup>絡<sup>らく</sup>微<sup>すこ</sup>動<sup>どう</sup>  
て發<sup>はつ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ありあり

〇風<sup>かぜ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ身<sup>み</sup>熱<sup>ねつ</sup>一倍<sup>いちばい</sup>能<sup>よ</sup>食<sup>じ</sup>唇<sup>くちびる</sup>紅<sup>かへ</sup>ま  
頰<sup>ほ</sup>赤<sup>か</sup>く犬<sup>いぬ</sup>小<sup>せう</sup>便<sup>べん</sup>秘<sup>ひ</sup>して通<sup>と</sup>じがごと

〇潮<sup>うしほ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ水<sup>みづ</sup>乃<sup>な</sup>朝<sup>あさ</sup>の時<sup>とき</sup>を導<sup>みち</sup>む指<sup>さし</sup>引<sup>ひ</sup>わら  
どくあり

〇變<sup>へん</sup>蒸<sup>じやう</sup>乃<sup>な</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ身<sup>み</sup>體<sup>たい</sup>上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>蒸<sup>じやう</sup>熱<sup>ねつ</sup>上<sup>じやう</sup>  
氣<sup>き</sup>虛<sup>きよ</sup>驚<sup>おどろ</sup>耳<sup>みみ</sup>冷<sup>ひや</sup>微<sup>すこ</sup>汗<sup>あせ</sup>し唇<sup>くちびる</sup>乃<sup>な</sup>上<sup>じやう</sup>

下<sup>した</sup>は白<sup>しろ</sup>き泡<sup>あわ</sup>ありて狀<sup>じやう</sup>珠<sup>しゆ</sup>子<sup>こ</sup>のどくし  
重<sup>おも</sup>た者<sup>もの</sup>ハ身<sup>み</sup>熱<sup>ねつ</sup>一<sup>いち</sup>脈<sup>いん</sup>亂<sup>らん</sup>腹<sup>はら</sup>疼<sup>いた</sup>み啼<sup>な</sup>

叫<sup>こゝろ</sup>び乳<sup>ちゆう</sup>食<sup>じやく</sup>ありて能<sup>よ</sup>食<sup>じ</sup>或<sup>ある</sup>ハ吐<sup>と</sup>現<sup>げん</sup>む  
一<sup>ひと</sup>歳<sup>さい</sup>過<sup>か</sup>てハ此<sup>こゝろ</sup>証<sup>しやう</sup>あり

〇潮<sup>うしほ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ渴<sup>かつ</sup>飲<sup>いん</sup>發<sup>はつ</sup>する時<sup>とき</sup>あり〇驚<sup>おどろ</sup>  
熱<sup>ねつ</sup>ハ顛<sup>てん</sup>り叫<sup>こゝろ</sup>び恍<sup>ふやう</sup>惚<sup>ぼつ</sup>む〇夜<sup>や</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ夕<sup>ゆふ</sup>

り發<sup>はつ</sup>り且<sup>かつ</sup>止<sup>と</sup>〇餘<sup>よ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ寒<sup>かん</sup>邪<sup>じゃ</sup>未<sup>ま</sup>だ  
盡<sup>つ</sup>び〇食<sup>じやく</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ肚<sup>と</sup>背<sup>はい</sup>先<sup>せん</sup>熱<sup>ねつ</sup>〇疳<sup>かん</sup>熱<sup>ねつ</sup>

ハ骨<sup>こつ</sup>蒸<sup>じやう</sup>盜<sup>たう</sup>汗<sup>あせ</sup>〇壯<sup>さう</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ一<sup>ひと</sup>向<sup>むか</sup>止<sup>と</sup>び  
〇煩<sup>わん</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ心<sup>こゝろ</sup>燥<sup>そう</sup>して安<sup>やす</sup>く〇積<sup>せき</sup>

熱<sup>ねつ</sup>ハ頰<sup>ほ</sup>赤<sup>か</sup>く口<sup>くち</sup>ろ瘡<sup>そう</sup>あり〇風<sup>かぜ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ  
汗<sup>あせ</sup>出<sup>で</sup>て身<sup>み</sup>熱<sup>ねつ</sup>〇虛<sup>きよ</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ困<sup>こん</sup>倦<sup>けん</sup>して

力<sup>ちから</sup>少<sup>すく</sup>〇客<sup>かく</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ來<sup>き</sup>去<sup>き</sup>定<sup>ぢやう</sup>らざ〇癰<sup>おん</sup>  
熱<sup>ねつ</sup>ハ涎<sup>ぜん</sup>嗽<sup>そう</sup>して水<sup>みづ</sup>飲<sup>いん</sup>〇寒<sup>かん</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ發<sup>はつ</sup>

る〇瘡<sup>そう</sup>乃<sup>な</sup>狀<sup>じやう</sup>のど〇血<sup>ち</sup>熱<sup>ねつ</sup>ハ辰<sup>ちん</sup>  
巳<sup>し</sup>乃<sup>な</sup>時<sup>とき</sup>發<sup>はつ</sup>り〇痘<sup>たう</sup>疹<sup>しん</sup>の熱<sup>ねつ</sup>ハ耳<sup>みみ</sup>鼻<sup>び</sup>の

尖<sup>せん</sup>り冷<sup>ひや</sup>る〇右<sup>みぎ</sup>十六<sup>じゅうろく</sup>乃<sup>な</sup>諸<sup>しよ</sup>証<sup>しやう</sup>あり

或得と各歸とる所りり其間と三  
兩証交へ互よとる者あり其輕重  
小隨てあはれ治せし

○大連翹飲

小兒乃傷風感冒發熱

痰壅り風熱丹毒腫痛之頸項よ  
核あり頤赤く瘡瘡眼目赤く腫口  
舌よ瘡生し咽喉疼し小便淋瀝  
胎毒痘疹乃餘毒其外一切乃

熱毒治し

柴胡 黃芩 荊芥 各一ふ二分

甘草 一ふ六分 連翹 藎麥

滑石 車前子 赤芍

大力 各八分 蟬蛻 五分 梔子

木通 當歸 防風 各四分

右竹葉燈心草水煎

○五福化毒丹

小兒熱毒成蘊積唇

口腫破し瘡生し下牙齦とる血

出し口臭く頰赤く咽乾し煩燥し

并し痘疹乃餘毒のまだ解せぬ或

頭目身體多く瘡瘡生むる

治し

青黛 二ふ 桔梗 生地黃 酒洗ひ

大力 微し炒 赤茯苓 犀角 各五

玄參 朴硝 連翹

粉草 各六ふ

右末とて煉蜜以て龍眼の皮

らよ丸ト。毎服一丸薄昔湯みて  
化り用べし。兼る驚わら  
バ。朱砂散以て衣とせしべし。

○地骨皮散 虛熱潮熱治し。亦傷

食壯熱治し

知母 柴胡 人參 地骨皮

赤茯苓 半夏 甘草 各等分

右姜戎入水煎

○導赤散 壯熱ハ心熱なり。一向不

熱しく已び甚し。兒ときハ驚癇治

發せ。あせを治する。此方を用ひ

べし方ハ十八丁

○生犀散 小兒乃骨蒸肌瘦頰赤く

口乾き日晩り潮熱し及び病後よ

餘熱除る。治し

大黃 蒸し 鹿 麥門冬 黃芪

秦朮 桑白皮 人參

鱉甲 醋おて炙 茯苓 地骨皮

柴胡 赤芍 枳殼 犀角 各等

右青蒿少し入煎せ。一方は知

母りを痰わらふハ半夏散加

○瀉黃散 脾熱しく目黄く。肚大ハ

口唇り瘡生。眼ハ偷針散生

せし等乃証治し

藿香 山梔子 石膏 甘草

防風 蜜酒にて香色を炒。各等分



右末と温湯にて用ひ  
○加減瀉黄散 濕熱胸煩皮膚赤色  
橘子の皮と黄芩と白朮亦黄芩  
を以て治す

黄連 茵陳 各五木 黄柏 黄芩  
茯苓 澤瀉 山梔子 各三木

右水煎

○甘露飲子 胃熱して口臭と齒齦  
腫痛と咽口と瘡液生し目赤と皮  
ひ瘡疹熱盛るを治す

枇杷葉 毛茛 熟地黄 生地黃  
麥門冬 枳殼 茵陳 天門冬  
黄芩 石斛 炙甘草 各等分

右水煎

○桔湯 肺熱して手眉毛以指る  
を治す

桔梗 五木 甘草 一兩  
右水煎一方子黄連以加

○感冒附咳嗽

○感冒ハ俗り咳氣といふ者なり  
て外邪乃淺きなり宜しく發散

○惺惺散 外風寒感一痰嗽發熱

人参 白朮 白茯苓 甘草  
桔梗 薑根 細辛 薄荷

右水煎

○羌活膏 感冒發熱 咳喘痰喘潮熱 搗搗以治之

人參 羌活 獨活 前胡

川芎 桔梗 天麻 各五分

薄荷 地骨皮 各三分 甘草 二分

右末之 煉蜜和之 艾實乃大以

之丸 每服一丸 姜湯以之

化之 用之

○香葛散 小兒傷寒 食飲夾之 驚風

夾之 四時乃瘟疫瘧疾以治之

香附子 紫菀 陳皮 青皮

葛根 甘草

右姜葱以入水煎

○參蘇飲 感冒咳嗽以治之

陳皮 茯苓 各一分 半紫菀

半夏 桔梗 前胡 葛根 各一分

枳殼 九分 人參 甘草 各五分

右姜棗以入煎之

○參花散 咳嗽發熱氣喘以治之

人參 天花粉 各等分

右末之 蜜水以之 調用之

○一方 小兒哮喘病之 喉之痰以

治之 治之 其乳母勞之

遇之 即發之 見其乳飲之 亦嗽之 六

君子湯之 桔梗杏仁桑白皮以加之

母子共ニ飲ベ

○蜜梨噲 咳嗽痰喘治也

甜梨一箇

右刀ちて切ニツ不割離さ切掛  
て内へ蜜成入麵よ包こ灰火り  
埋こ熟して麵成去梨を吃む

ベ

○吐瀉

○小兒初て生じ下吐せりしわ

み見乃口中の穢ら介し物成  
能拭ひ盡ら毛喉乃中へ吞入る  
り木瓜丸成用て治せ

○木瓜丸 初生乃見吐せ成治

木瓜 檳榔 木香 麝香

膩粉

右各一字研勻麵乃糊成以て黍  
乃大ひはらよ丸じ二三丸で甘草  
湯ちて用ゾ

○初て生じ三日乃内吐瀉壯熱  
乳成飲せ大便不乳食消せ或ハ  
白色あるハ食不傷ら々わを

ハ下して後ニ胃と和せべし下せ  
小ハ白餅子胃成和せら小ハ益黄散  
成用ゾ益黄散ハ六十五丁

○白餅子 小兒腹中ニ癖わを乳を  
飲せ嗽して痰成生せ成治

滑石 輕粉 半夏 南星 各一  
巴豆二十四粒 皮膜去 水一升  
液用て煮し。水盡るまで度とせ。

一よ水三升と作せ。

右巴豆以研勻て。衆藥を入糲  
米乃飯以以て。菘豆の大ひらよ  
丸。三歲已上乃兒小ハ三五餅也  
下小ハ一二餅。薄苛湯ふて用

ゾベ

○吐瀉するもの。黄ある物以瀉するハ  
熱ある乳り傷らるる者。白餅子  
液用て。あせと下し。後玉露散  
と用ゾベし。青き物以瀉するハ冷

乳小傷らるる者。白餅子以  
用て下し。後玉露散温中丸を  
用ゾベし。亦白餅子以て下せと  
依せど。熱乳も傷らるる者。小ハ玉露  
散冷乳も傷らるる者。小ハ益黄散温中  
丸以用て。愈る者ありと云り

○玉露散 一よ甘露飲と各く

石膏 寒水石 各半兩

生甘草 二ホ半

右末とて。每服一字。或ハ五分  
温水にて用ゾベし

○温中丸

人參 灸甘 白朮 各一兩

右末と。姜汁麴乃糊あて丸に。粳米飲以て用之。

〇児生月乃裏は嘔吐あて先。硃砂丸以て用之。後。

朱沈煎と用之。悪物下て嘔と止。

〇硃砂丸

辰砂 南星 巴豆霜 各半

右末と。麴乃糊以て黍。大い丸。毎服二丸。薄昔湯。

あて用之。

〇朱沈煎

硃砂 水飛 二 沈香 二

藿香 三 滑石 五 丁香 十四 箇。右末と。毎服半。新水。汲。

花と。薬末。抄て油。上。置須臾。下澄。水。去別水。用て空心。服。下。

〇小見上り吐。下。瀉。者。脾。胃。俱。小。傷。

〇白朮散 治症前。出。四。十。七。

〇又方 四君子湯。陳皮。藿香。加。へて吐瀉。治。

〇助胃膏 脾胃。虛弱。吐瀉。止。飲食。思。及。久。瀉。虛。寒。

治

人參 白朮 茯苓 炙甘草 各二

丁香 肉桂 藿香 各三

白豆蔻 木香 山藥

陳皮 各五 肉豆蔻 二箇

砂仁 二十箇

右末とて煉蜜以て彈子乃

大いり丸ト毎服一丸米湯

て用

○啓脾丸 食以消瀉と止吐

疝を消し黄以消し脹を消し腹痛

以定先脾を益し胃以健

人參 白朮 白茯苓 山藥 炒

蓮肉 各一兩 山查子 陳皮

澤瀉 炙甘草 各五分

右末とて煉蜜以て丸ト米

湯少用之小兒常傷食

を患る者此以服之立

あり不愈る者

○參苓白朮散 小兒脾虛乃泄瀉

治

人參 白朮 茯苓 山藥 炒

炙甘草 各二分 白扁豆 一分半 炒

蓮肉 砂仁 桔梗

薏苡仁 炒 各一分

右末とて棗湯少之二分

用之。但一見乃歲の數不應  
一或ハ半カ一ネツ用之

○一方 水瀉以治之  
五倍子

末とて陳醋以てゆき調  
熬して膏とあり臍乃貼之  
即止とツマ

○一方 益元散。白木乃末一兩次  
加へて毎服一二ネ米湯みて用  
之。小兒の水瀉以治之。殊  
効あり。益元散ハ  
滑石六兩。炙甘草一兩

右細末して用ゆ

○痘瘡

○内經小諸の痛。痒。瘡。皆心  
火。屬之。とツリ。夫小兒痘疹乃  
証ハ最モ酷疾と云。不日の間。死  
生掌之。及之。蓋一胎毒命  
門。又藏之。因て熾火の太過。熱毒  
流行。乃年小遇と化ハ痘毒。少也。正傳  
因て發作

○眞疑乃辨

○小兒痘瘡ハ大抵傷寒と相似  
リ。發熱煩燥。して臉赤く唇紅小  
身痛。頭疼。乍寒。乍熱。嘔  
噴。呵欠。喘嗽痰涎。始て發

時傷風傷寒或因得者有時氣  
傳染一得者傷食發熱嘔  
吐或因得者跌撲驚恐或因  
得者或八日竄驚搐或  
風乃証のどく或ハ口舌咽喉肚腹  
疼或ハ煩燥狂悶昏睡或ハ自  
汗或ハ下利或ハ發熱或ハ  
發熱セズ其証多端ありて卒  
辨一易く必モ耳と尻と冷る  
以て痘証と知べし瘡疹六陽屬  
一腎乃藏小証あり耳と尻とハ  
俱に腎不屬するゆゑ腎乃部なる處  
獨冷るなり又其耳乃後次見るなり

紅脈赤縷ありハ眞乃痘症と知べし

○預防乃方

○天時乃不正は値て隣郷痘瘡盛  
は發バ宜し三豆湯と用之

○三豆湯

赤小豆 大黑豆 菘豆 各一盞

甘草 一兩細く切

毎日右四味と煮熟して煎汁  
豆共に見え與て飲食止むべし永  
痘瘡と出さざるとり正傳并保元

○内外乃辨治

○總して痘瘡出として未出する  
は因て發播する者ハこそ外風寒



の邪と感して内ニ心熱と發せりたり  
惺惺散と用ゆり宜し方ハ八十分  
ハ升麻葛根湯木香參蘇飲と用ゆ  
べし 正傳

○升麻葛根湯

葛根 升麻 芍藥 炙甘草 各一

右水煎

○木香參蘇飲

木香 一分半 半夏 四分 人參 三分

紫蘇 桔梗 葛根 前胡 各四分

陳皮 茯苓 各五分 枳殼 三分半

右姜と入水煎

○痘瘡出欲し米出吐利

者ハ是中焦寒滯り或ハ宿食と  
挾むり四君子湯り縮砂陳皮と  
加へて用ゆべし或ハ和中散と用ゆ  
べし 正傳

○四君子湯

人參 白朮 茯苓 各一錢

甘草 五分

右水煎

○和中散

厚朴 一分 白朮 五分 乾姜

炙甘草 各三分

右姜と入水煎

○治法

○痘症乃發熱ハ大抵傷寒と相似  
 リ但一傷寒ハ表より裏へ入尺  
 一經の形症と見ハ痘症ハ裏より  
 表へ出て五藏乃証皆見ル○呵欠  
 一煩之悶ゆるハ肝孔症なり○乍  
 冷乍熱一手足稍冷多く睡る  
 ハ脾乃症なり○面燥き腮赤く咳  
 嗽嚏噴ハ肺の症なり○驚悸ハ心の  
 症なり○厥冷耳涼るハ腎乃平症  
 一○又心窩と觀よ紅色わり耳の後  
 一紅筋赤縷わり或ハ身熱一手乃  
 指皆熱一惟中指獨冷但一男ハ左  
 女ハ右是痘症なりと知べ一已上五

藏乃証何よりても獨多者ハ恃其  
 藏の毒甚しきと知て治と作べ一○  
 若呵欠一煩之悶ゆる肝症多き者  
 ハ川芎山梔子青皮の属と用べ一  
 ○若面燥き腮赤咳嗽嚏噴一肺  
 症多きとてハ黄芩知母地骨皮乃  
 属と用べ一○若驚悸一々心症  
 多き時ハ黄连木通の属と用べ一  
 ○若乍冷乍熱一手足稍冷多  
 く睡る一脾症多き時ハ防風甘草の  
 属と用べ一○惟腎ハ耳冷厥冷て  
 平症あると以て宜しとて若耳熱  
 一厥熱多き時ハ腎乃邪なりと知

て黄栢木通茯苓猪苓乃屬と用ゆ  
べし然れどもころもハ其大畧とりの機  
臨變應むるごとハ其治と作の  
人よわらざり保赤全書

○凡小兒痘瘡乃時行も感トて發  
熱セバ毒と解一發表の劑と用ゆ  
と第一といへ若能發熱乃初於て心  
と盡一療治セバ痘瘡出ると少く或  
ハ出ると多くと亦勢輕らべし此  
義を知ぞし解毒發散一手ぬけ  
りハ痘瘡危らべし醫統

○痘のまご出ば已は出る乃時辰砂と  
細末一見乃大小と看て或ハ一ス或

ハ半ス密水と調へて服まじへ痘多  
く人者ハみくべし少く人者ハ無る

べし正傳

○痘瘡發熱乃時牛房子以茶と  
して蜜と調へ顛門の上貼て痘  
瘡眼入乃患は免らるべし同上

○總して痘瘡氣虛血虛分て  
神藥以用ゆハ氣虛の者ハ人参  
白朮解毒乃藥と加ふ血虛の  
者ハ四物湯解毒乃藥加ふ  
蓋し酒炒の黄芩黄連ハ清涼解毒  
乃能わると痘瘡も用て其毒は解ま  
べしとりの同上

○總として痘瘡氣血乃虛實以分  
とゞども大抵多くハ氣血の不足ハ  
属ハ然れども氣血不足ハ中ヲ於  
て或ハ氣虛多キ歟血虛多キ歟の  
優劣以分別シ氣血を補ふ藥乃中  
ニ輕重以分テ用ヅル。若外邪を  
夾て實を者わハ少シ防風等  
乃藥以加ふヘー同上

○大法血液活シ氣を調へ表以安ト  
中液和シ輕清消毒温涼乃劑と兼  
て治ふる以平治の法とせゞ。温ハ  
黃芪當歸木香乃輩涼ハ前胡葛根  
升麻の属あり以佐らるハ川芎白芍

枳殼桔梗薤活木通紫草乃属を以  
て調適せゞー 同上

○大小便乃消息如何とゞふこと或  
知べ。若小便赤く汚る者ハ大  
連翹湯方八十三丁 甘露飲方八十五丁  
以用ゞ。大便秘結ハ内煩並外  
熱を者ハ小柴胡湯ヲ枳殼を加  
へて用ゆる最も穩當なる。或ハ少シ

四順清涼飲子以與へー。大便黃  
黑色あるハ其毒氣已ニ盛なり熱  
劑以多く與へゞ。但ハ少シ  
化毒湯を與へて可なり。或ハ用ゞる

也亦可なり。若二便一ニ秘結する

とちり時八腸胃壅遏一脈結逆氣  
滞り毒氣從て泄るとちり目閉聲  
啞肌肉黧黑ふあへ一あせ八踵  
旋させして變症あらべ一同上

四順飲 痘熱壯よ或ハ大便秘する  
治れ

當歸 芍藥 甘草 大黃

右水煎

紫草化毒湯 痘已出未出で熱  
擁り快くしる治れ

紫草 二分 陳皮 一分 升麻  
甘草 各五分

右水煎 右二方背脊大成

仁齋楊氏大熱ハ小便以利せし  
五苓散導赤散方ハ八丁以用ゆ

小宜一 小熱ハ毒を解せし消毒  
飲方ハ草草 四聖散方ハ草草 以用ゆ

小宜一とりの正傳

五苓散

澤瀉 一分半 白朮 猪苓  
赤茯苓 各一分 肉桂 五分

大凡七日以前ハ裏實とい温燥  
乃劑投せしむ能毒を助せバ

八日以後ハ裏虚とい寒涼乃  
劑投せしむ能生氣を伐せし

回春

○三法乃治例 肯腎大成

○凡氣虛の証初り發る身熱  
 手足厥冷乍小寒く乍小熱精神  
 倦怠肌肉眈白飲食減少四肢倦  
 て睡臥せらると安靜し便清く自調  
 ふ八虚症あると疑ふ未紅點見へ  
 づ前み參芪飲小紫蘇防風白芷  
 等乃輕劑の發散藥以加へて用お紅  
 點は見ぬの後ハ參芪飲み輕劑乃  
 川芎桔梗を加ふ紅點は見ハ一日の  
 後ハ重く參芪飲を用け病は隨て  
 加減せべ一參芪飲ハ即保元湯あり  
 方ハ百共下 七八日漿足の後ハ保嬰百

補湯方ハ百共下 みて氣血調養ふ

而已此症未稍塌陷黑唇ら者ハ  
 多くハ木香散異功散以用て功と  
 收ひべ一 方ハ百共下

○凡血熱乃症初り發る身熱  
 と壯盛ありて腮紅は臉赤く毛焦  
 色枯煩燥渴て水飲飲と欲  
 一昨夜啼哭し睡臥寧く好て  
 冷ら處り臥し小便赤く淡ら  
 熱症ありと疑ふ未出づ前  
 升麻葛根湯方ハ百共下 或ハ升麻流氣飲  
 皆服せべ一とつとも十神解毒湯  
 方ハ百共下 乃穩あるふハ及ハ未出づ

者紅點以見之至り三四日乃後  
熱症悉平り勢將に漿液行とせり  
時大に保和湯を用り方八頁七八九  
日漿足の後保嬰百神湯方八頁下  
採用て少を調養せし此症七  
八日乃間し紫黒ふし乾き枯及  
び青灰し乾き黒く陥ひ者あり  
少少不奪命五毒丹大造保童丸  
談笑博金丹一字金丹或八百祥丸  
李膏指尾膏獨神散等乃方皆審  
る用之し惟泄瀉ありて後黒  
く陥し乾き紅あり者ハ木香散與  
功散を從て治せし此祖宗世業

不傳乃秘ありて萬試萬中  
者少奪命大造等の諸方皆腎  
大成見へたる也

○凡熱毒擁遏乃症初ら發るる身  
熱あるし壯盛ありて腮紅小臉  
赤く毛焦し皮燥き氣粗く喘滿  
し腹脹煩燥し狂言譫語し睡臥  
寧く入ら大便秘結し小便赤く澀  
り面浮眼脹多く啼多く怒り是  
的は熱毒擁遏に係る也乃まだ紅  
點以見らる時先升麻葛根湯方八頁下  
一服採用て隨て羌活散附湯方八頁  
下採用て紅點を見せし至り三

日乃内諸症悉く平くよしく勢將お  
漿液行とよると比益元透肌散方百今  
加減し々用ゾー漿足の後ハ保嬰  
百補湯以用ウて調養する而已六七  
日乃外紫黑色あしく乾き枯及び青  
灰乾き白陷ひ者ウを奪命大造談  
笑博金一字金百祥丸牛李膏猪尾  
膏獨神散等乃諸方皆審くよ用  
ゾー惟前ハ泄瀉あせー者ハ木  
香散異功散以用て治ハへー

○惡証

○初うて出たる時勇壯ある者○まき  
間あく出て蟻種乃布グどくある者

○隨て出隨て没せる者○蚊虫乃  
咬グどくある者○氣血相失せる  
者○倒出せる者○水以飲て鼻よ  
促るふあしくある者回春

○瘡塌寒戰咬牙一渴止ビ○痘化  
色紫黒あしく喘ぎ渴て寧くぐ

○灰白色あしく痘の頂き陷る腹  
脹○頭温ふしく足冷悶亂しく

水以飲者○氣促く泄瀉しく渴  
者正傳

以上皆不治乃症あり

○瘡正又出て吐利せる者ハ困死  
○出て譫語止らる者ハ惡候



○大便下血。乳食化せざ其

○瘡爛。血泣瀉。膿無者。治

○大小便秘結。目閉聲啞。肌黑

○面乃色青。此者。八死

○痘後驚。發者。八危

○面黑。鼻臭。黑氣。治

○爆渴。小便淡。泄瀉。不食

○頭面腫。盡。抓破。臭。爛

○瘡瘡。黑。焦。風。頰。頰。攻。唇

○項腫。硬。或。胸膈。高。出。者

○穢氣。避。保赤。全書

○腋。下。乃。臭。氣。房。中。淫。液。乃。氣

○遠。行。勞。役。汗。汗。氣。溝

○泥。糞。穢。濁。惡。乃。氣。婦。人。經。水

○乃。氣。諸。瘡。腥。臭。之。氣。硫。黃。蚊。烟

○氣。蠟。燭。燈。火。吹。滅。之。氣

○誤。頭。之。髮。を。焼。氣。紫。烟。魚。骨

○孔。氣。葱。蒜。韭。等。乃。氣。油。之。物

○炒。氣。酒。之。醉。葷。之。腥。氣。麝

香燥穢乃氣

○又禁忌 同上

○生人往來とつて見あはぬ外乃  
人往來とつと成忌あはぬ或ハ生産の  
房室とつを來り或ハ喪ふ臨て來り  
總トて何あても穢氣わらん人成恐  
建忌ばるる也○言罵怒ると○對して  
頭を梳ると○對して痒グを成搔  
しく○掃地とつと勿進○對して荒  
言とつと勿進○飲食詞樂とつと  
勿進○僧道師巫其房入とつと勿進  
以上乃穢氣禁忌の諸條也是を謹  
守る時ハ重き者輕き者變小謹

守らざると時ハ輕き者重き者變大也

○仲景乃曰小兒痘の時乳香成焼て

諸乃惡氣を避べー蓋ー榮衛香

遇時ハ行り臭小遇時ハ變ハたつと

○正傳ハ犬黃蒼木成焼て惡氣を

避沈檀乳香降眞龍腦麝香成焼と

勿進帷帳乃内ハ胡荽成掛或ハ胡荽

を酒に漬し床帳に噴掛併ハ木香

成焼も佳とつと

○發熱

○痘發熱三五日ハ一々出る者乃也  
血氣充足不由て毒少く感動ハ難  
きと灼火の燎とつと杯水乃流と

難が如し其痘必也稀疎ふし愈易  
し發熱纒一日或ハ半月ふし即  
出者ハ血氣怯弱由て毒多之感動  
し疑きし烈火の焚易く長河乃  
決し易きか如し其痘必ハ稠密ふ  
し愈難し保赤

○發熱乃初先痘症の吉凶皆爰了  
兆ハ少急宜し汗し藏腑乃  
胎毒及ハ外感不正氣盡く汗小  
從て散せむむ時ハ痘出て自然う  
稀少し但し熱甚し者ハ其毒之  
亦盛なり熱少き者ハ其毒も亦微き  
なり熱少く毒微き者ハ必ハ療治せ

る及ハバ安リ汗る時ハ表氣虛  
し痘起發せると能ハ反て害  
成べし熱甚し者ハ汗し身  
乃熱盡く退く故佳とい或解せむ  
死者ハあし以解し下せき者ハ  
を下せむ表熱壅盛あるハ微し汗  
せらるる少くハ表解せむ裏  
熱壅盛あるハ微し利するおらむ

ハ裏解せむ同上  
○凡痘疹但身熱以覺へて傷寒  
似て疑似のまに明くあし時ハ  
先惺惺散方ハ本或ハ參蘓飲方  
以用せし熱甚し者ハ升麻葛

根湯 友全子 人參敗毒散 與之。若紅點を見之者、葛根湯、表虚を得し、依恐して、正傳

○又云、二日已前紅點未見、必  
ぞ升麻湯、參蘇飲、乃類を用て、其表  
發し、務て微汗、さむる、以度と  
り、若未汗、せど、表猶未解、せど、ハ、畧  
紅點、乃肌肉の間、隠約、せる、故見と  
り、つと、升散、開發の、劑、尚除く、る、  
ら、げと、り、同上 ○保赤全書、升麻  
葛根湯、乃下、初熱、壯ふ、甚し、を、疑  
似未明、り、あ、げ、ら、る、を、依、服し、或  
ハ、痘、已、り、出、て、表熱、甚し、此、者、と

治いとのり

○凡痘瘡初発て出ると、身發熱、  
耳と尻冷、呵欠、咳嗽、面赤、きハ、  
必、是、痘、以、出、之、の、症、と、知、て、升麻  
葛根湯、山查子、牛房子、を加へて、  
用、少、之、ハ、其、痘、出、る、と、稀、少、く、愈  
易し、とのり 正傳

○初熱、乃時熱、壯ふ、憎寒、ら、て、頭、  
た、咳、嗽、し、清涕、以、流、し、傷寒、に、相  
似、る、の、間、大、小、便、調、ふ、者、ハ、升麻、葛根  
湯、或ハ、參蘇飲、ニ、方、九、十、丁、俱、了、葱、姜  
以、加、へ、て、用、之、保赤  
○初熱、頭疼、身熱、腰腹、皆痛

ひ者ハ蕪解散以用ゾベ一保赤

○蕪解散 紫蕪 葛根 防風

荆芥 白芷 蟬退 紫草

升麻 木通 牛蒡子 甘草

右各等分燈心七根入水煎夏ハ

香薷以加へ冬ハ麻黄を加へべ一

○初熱壯盛おしして頭體腰腹俱了

痛も吐瀉咳嗽兼作る者其証必重

重し急し敗毒散以與へ熱甚し

犀角以磨和服之むべ一同上

○敗毒散 升麻 葛根 紫蕪

川芎 羌活 防風 荆芥

前胡 薄荷 桔梗 枳殼

牛房子 蟬退 山查子

地骨皮 甘草

右姜一片水煎若熱甚し比ハ柴

胡黄芩以加へ夏ハ香薷冬ハ麻黄

を加へ瀉ありハ猪苓澤瀉以加へ

○前乃証煩渴き譫語ありて小便

便火のいづく鬼祟以見ごとく多者

おハ右の敗毒散を以て辰砂益元散

以用ゾベ一 同上

○辰砂益元散 痘乃熱毒太盛狂言

引飲以治れ

滑石水飛六兩甘草末一兩

辰砂三分

右合勻小兒ハ二升大人ハ二升  
燈心湯とうしんとうにて用もちゾ

○發熱痰甚はつねつたんしん一也譫語昏迷せんごこんみ

驚搐きやうちく者ハ外風寒がいかん感

一内熱ないねつ發はつ也

驚搐きやうちく甚一也

止やまらる者ハ紅綿散こうめんさん以もつて辰砂しんさ

益元散えきげんさんを調とへ用もちゾ一痰盛たんせい者

者ハ薄荷湯はうとうにて抱龍丸ほうりゅうわん

用もちゾ亦妙またた也同上

○人參じんじん羌活散きやうかつさん

獨活どくわつ柴胡さいこ前胡ぜんこ防風ぼうふう

荆芥けいがい黃芩わうじん甘草かんさう枳殼しき

桔梗きやうきやう川芎せんじやう茯苓ふくりやう紫草しさい

地骨皮ちこつひ牛房子ぎゆうぼうし蟬退せんたい

一方いっぽう獨活どくわつ無な一いつ猪苓しゆりやう澤瀉たくさ

○右水煎

紅綿散こうめんさん全蝎ぜんけつ炒しやう天麻てんま麻黃まわう

蟬退せんたい薄荷はうとう甘草かんさう紫草しさい

荆芥けいがい

右各等分水煎

○初熱しよねつ驚きやう發はつ一也目上視めじやうし頭後かぶのうしろ

小向せうかう身反張みへんちやうハ肝木かんぼく以もつて風かぜ

生しやうむるむるる惺惺散しやうしやうさん蟬退せんたい全蝎ぜんけつ

加くわへて用もちゾ一方いっぽうハ十六丁じゅうろくぢやう同上

○初熱しよねつ傷風傷食しやうふうしやうじき咳嗽くわい嘔吐おうと

者ハ蘓發散以用ゾー 同上

○蘓發散 紫蘓 陳皮 半夏

蒼朮 厚朴 甘草 白茯苓

羌活 枳殼 神麴 各等分

右姜以入水煎

○初熱小身痛吐瀉者ハ四苓散小柴胡羌活砂仁藿香以加て用

散小柴胡羌活砂仁藿香以加て用

同上

○四苓散 白朮 猪苓 赤茯苓

澤瀉

右姜以入水煎

○初熱口渴乾嘔者ハ藿香正氣散ハ姜炒乃黃連瞿麥を加て

用ゾー 同上

○藿香正氣散 藿香 大腹皮

紫蘓 陳皮 桔梗 茯苓

半夏 厚朴 白芷 甘草

右姜棗以入水煎

○和中湯 初熱乃乾嘔を治ハ 同上

人參 五分 白朮 七分 白茯苓 五分

甘草 五分 陳皮 一ネ 半夏 八分

藿香 一ネ 砂仁 一ネ

右姜以入水煎

○發熱吐瀉止バ身熱口渴者

ハ四苓散ハ方ハ百七十 黃連淡竹乃葉

以加て用ゾー 同上

○發熱嘔吐瀉利止比口渴者身手足共冷飲食不進能入脈沈細者八和中湯以て之を治すべし。甚き者八理中湯以て之。用之。穀食化せむ。山查子神麩麥芽以て之。若し血失して治せむ。胃の氣益虚し。血脈凝滯して。のまだ出づる者。出せ。已よ出る者。陷伏倒置して。遂に救を以て之を致す。和中湯の方此表 同上

○理中湯 人參 白朮 甘草 乾姜 各等分

右姜朮棗以て水煎

○初熱聲遂に變むる者。重し。清肺飲。甘桔湯。以て之。宜し。牛房子。荊芥。玄參。を加ふ。日上。甘桔湯方ハ八十六

○清肺飲 麻黄 一ふ五分 麥門冬 二ふ 知母 天花粉 荊芥 各一ふ 柯子 菖蒲 各八分 桔梗 二ふ

右水煎竹瀝姜汁以て用之。初熱太盛し。或ハ鼻衄。或ハ大小便血以下。一切失血の症。小ハ急。犀角地黄湯。以て之。上。犀角地黄湯。犀角 芍藥 生地黃 牡丹皮



右三味等分ふして煎じ犀角を  
鎊ふて細くして薬汁を入用

ツド

○初熱<sup>やと</sup>。或ハ紫<sup>むら</sup>點<sup>しん</sup>色<sup>しき</sup>は見<sup>み</sup>し小便<sup>せうべん</sup>  
血<sup>ち</sup>乃<sup>なり</sup>どく口<sup>くち</sup>渴<sup>かつ</sup>き亂<sup>らん</sup>語<sup>ご</sup>あり者<sup>もの</sup>三寶<sup>さんぼう</sup>

散<sup>さん</sup>は用<sup>もち</sup>ツド一日上

○二寶散<sup>にぼうさん</sup> 犀角<sup>せいかく</sup> 玳瑁<sup>たいぼ</sup>

右二味水<sup>にみづ</sup>を磨<sup>すり</sup>て頓<sup>とん</sup>服<sup>ふく</sup>せ

○初熱<sup>やと</sup>。四肢<sup>しし</sup>強<sup>つよ</sup>直<sup>ちよく</sup>り。舉<sup>あ</sup>動<sup>どう</sup>くもと

能<sup>あた</sup>る者<sup>もの</sup>ハ四君子湯<sup>しし君子湯</sup>方<sup>かた</sup>八九十<sup>はちくじゅう</sup>川<sup>せん</sup>

芎<sup>きう</sup>當<sup>とう</sup>歸<sup>き</sup>羌<sup>きやう</sup>活<sup>かつ</sup>獨<sup>どく</sup>活<sup>かつ</sup>天<sup>てん</sup>麻<sup>ま</sup>蟬<sup>せん</sup>退<sup>たい</sup>全<sup>ぜん</sup>蝎<sup>けつ</sup>

姜<sup>きやう</sup>蚕<sup>さん</sup>木<sup>もく</sup>香<sup>かう</sup>加<sup>か</sup>へて用<sup>もち</sup>ツド 同上

○發熱<sup>はつねつ</sup>三日<sup>さんじつ</sup>小<sup>せう</sup>生<sup>せい</sup>死<sup>し</sup>決<sup>けつ</sup>むる例<sup>れい</sup>先<sup>まづ</sup>

發熱<sup>はつねつ</sup>乃<sup>なり</sup>時<sup>とき</sup>紅<sup>こう</sup>紙<sup>し</sup>條<sup>じょう</sup>以<sup>もち</sup>胡<sup>こ</sup>麻<sup>ま</sup>の油<sup>あぶら</sup>を侵<sup>しん</sup>

一<sup>ひと</sup>點<sup>てん</sup>照<sup>しょう</sup>見<sup>み</sup>心<sup>しん</sup>頭<sup>とう</sup>皮<sup>ひ</sup>肉<sup>にく</sup>乃<sup>なり</sup>裏<sup>うら</sup>ふ

若<sup>し</sup>一<sup>ひと</sup>塊<sup>くわい</sup>紅<sup>こう</sup>者<sup>もの</sup>あり或<sup>ある</sup>ハ通<sup>と</sup>身<sup>しん</sup>り

塊<sup>くわい</sup>紅<sup>こう</sup>者<sup>もの</sup>ハ八九日<sup>はちくじゅうにち</sup>ふして決<sup>けつ</sup>して

死<sup>し</sup>ハ○發熱<sup>はつねつ</sup>乃<sup>なり</sup>時<sup>とき</sup>身<sup>しん</sup>大<sup>だい</sup>熱<sup>ねつ</sup>多<sup>た</sup>く腰<sup>こし</sup>

痛<sup>いた</sup>て腹痛<sup>ふくう</sup>ぬむ三日<sup>さんじつ</sup>以<sup>もち</sup>過<sup>か</sup>て纔<sup>しかた</sup>紅<sup>こう</sup>

點<sup>てん</sup>を生<sup>せい</sup>し硬<sup>こう</sup>して手<sup>て</sup>り碍<sup>がい</sup>る者<sup>もの</sup>藥<sup>やく</sup>

以<sup>もち</sup>用<sup>もち</sup>ぬむして安<sup>やす</sup>し○發熱<sup>はつねつ</sup>の時<sup>とき</sup>

渾<sup>こん</sup>身<sup>しん</sup>温<sup>ぬる</sup>煖<sup>ぬる</sup>ふして時<sup>とき</sup>ありば驚<sup>おどろ</sup>と發<sup>はつ</sup>

せら者<sup>もの</sup>ハ痘<sup>たう</sup>心<sup>しん</sup>は在<sup>あ</sup>て出<sup>で</sup>き者<sup>もの</sup>○發<sup>はつ</sup>

熱<sup>ねつ</sup>乃<sup>なり</sup>時<sup>とき</sup>一日<sup>いちにち</sup>小<sup>せう</sup>遍<sup>へん</sup>身<sup>しん</sup>紅<sup>こう</sup>點<sup>てん</sup>生<sup>せい</sup>し稠<sup>ちゆう</sup>

密<sup>みつ</sup>ふして蠶<sup>さん</sup>種<sup>しゆ</sup>の布<sup>ふ</sup>をくく摸<sup>も</sup>る

手<sup>て</sup>碍<sup>がい</sup>らる者<sup>もの</sup>ハ決<sup>けつ</sup>して死<sup>し</sup>ハ○發<sup>はつ</sup>

熱乃時腹中大い小痛之腰杖ふて  
打やぐどく痘出るに至て乾燥し  
腰腹の痛之尚止らる者ハ決して死  
之○發熱乃時頭面の上より一片此  
紅色をて胭脂乃どく多る者ハ  
八九日乃後死ハ 濟世全書

○出瘡

○凡頭をて出て足に至るは順とし  
足をて出て頭に至るは逆とし入門  
○痘初て出る時先胸は見え若胸  
より稠く出ハ消毒飲よ方首卑山查子  
酒炒の黄芩紫草湯加へて用之食  
減せば人免之湯加へべし正傳

○痘初て出る小三五相連し出る  
者ハ必ぞ稠密なる單小形は見え  
者ハ必ぞ稀し保赤

○又保赤の意は按せらる痘初て  
出て色貴く明潤ありて鮮多る者  
乃を若頭焦せ黒しと皮帯る者ハ  
少毒血分ありて血は涼し毒  
を解する小涼血化毒散は用之し  
急し治せざれば黒く陷え救ひ  
がし○痘初て出て形貴く兼て  
實ありて厚比者なり若色白く皮  
薄きハ少毒専氣分ありて内氣は  
神ハ火を散せし固陽散火湯乃

内生地黄以去白木決其量加へて  
用之。急治せしむば痒場しく  
死に大抵初て出る痘瘡右乃二症  
而已。此時急宜し治せば白  
色轉しく紅活としも黒色轉しく  
淡紅としも起脹貫膿收靨恙多  
るべし。同上

○涼血化毒散 當歸尾 赤芍藥

生地黄 木通 連翹 紅花  
牛房子 紫草 桔梗 山豆根

右水煎

○固陽散火湯 人參 黃芪 甘草

當歸 升麻 葛根 荊芥

連翹 防風 生地黄 木通

右水煎

○熱しむ退くべし。紅點以見て  
者ハ火裏乃苗痘と名け必以紅紫  
ありて地界以分る。若急治せ  
しむば苗必枯べし。清地退火湯  
或ハ秦朮湯以用之。同上

○清地退火湯 地骨皮 一升

地膚子 九分 牛房子 七分 柴胡 一升  
紫草 八分 葛根 八分 連翹 六分

當歸 五分 木通 三分 蟬退 二分

右姜一片水煎如熱退くハ再一

劑以服之

○秦朮湯 痘六七日熱退くばる治

秦朮 酒煮て洗ひ炙る

右水煎し用之し熱立どあろう退く

○痘紅點は見し表甚熱する者

不ハ急う人參養活散以方八百六丁

用之し若紅紫色を兼ハ化毒湯又酒炒乃黄芩黄連紅花以加之し厚

化毒湯 紫草 升麻 甘草 蟬退 地骨皮 各等分

右水煎 初て出で稠密やして蚕種乃布

○其形勢乃重き者ハ其表以輕し其内以涼之し連翹升

麻湯或ハ化毒湯又紅花酒炒の黄芩を加へ用ぬ或ハ解毒托裏湯以

用之し同上 連翹升麻湯 連翹 升麻 黄芩 葛根 各一ネ 麥門冬 二ネ

右水煎 解毒托裏湯 桔梗 牛房子 人中黄 防风 荆芥 酒紅花 當歸尾 蟬退 升麻 葛根 赤芍藥 連翹 各等分

右水煎し人尿以燒て調服す

人中黄とハ甘草乃末以竹の筒  
不入木少て兩方を塞ぎ冬糞缸  
小侵し立春り取出し陰干し  
し甘草成晒し乾し用し

○痘出て稠密なりて片成し或ハ  
毒留してのせし泄せ斑點隠きて  
肌膚乃中ふりやそ出るも似て出  
者ハ紫草透肌湯以用之ー同上

○紫草透肌湯 紫草一分 升麻五分  
牛房子 防風 荆芥 黄芩 各八  
甘草三分 木香五分

右姜以入水煎如紫色なりて腹痛  
止る小蟬退一ふを加ふべし

○痘出て稀しとゞも肉絶と一  
般なり紅暈なき者ハ保元湯ハ  
方八頁下 川芎當歸紫草紅花以加へ  
用之ー同上

○初て出自汗わりハ熱氣熏蒸し  
然るちや但し汗出て表虚せハ恐ハ  
收壓せしむ人保元湯ハ方八頁下 黄  
芪以倍し以て其表を實之ー熱  
ある者ハ炒黄芩炒黄連以加へ  
用之ー同上

○消毒飲 醫林類證ハ痘疹出と欲し  
及いばに出び己も出て熱しを解せ  
し者急り此薬以進之ー三四服

あへ快く毒透し消さるる。

手ろ應トて神効ありとツリ

牛房子 炒三小 荊芥 一小 防風

生甘草 各半小

右水煎犀角乃末以加て充妙を

○紫草湯 一小紫草木香湯と各く痘出

て快く及大便自利する以治

以類證并正傳

紫草 木香 茯苓 白朮 各一

甘草 半小

右一服とし糯米百粒投入水

煎 四聖散 痘出て快く倒壓面する

以治以 同上

紫草 木通 各一 枳殼

甘草 各半小

右水煎

○十神解毒湯 身發熱り壯熱臆

紅。臉赤く毛焦連色枯。已み出未

出で三日已前痘點煩紅燥渴して

飲と欲し睡臥寧く小便赤

く溢る者ハ少と熱盛多るを並小

皆治以 肯腎

當歸尾 生地黃 川芎 赤芍

牡丹皮 桔梗 大腹皮 木通

連翹 紅花

右燈心十四根紙入水煎

背脊大成小云此方血熱乃痘疹を  
 治ハ血成涼し血成行ハ成以て主  
 とし佐セタニ桔梗川芎を以て開  
 提發散の功あり引ニ大腹皮木通  
 成以て熱毒と疎利セタニ効あり也  
 臣ニ連翹牡丹皮成以て解毒乃良  
 あり也少ニ成用カテ血熱の痘疹を  
 治セるときハ能内外分消し熱毒盛  
 るをとりども表裏成解散して自  
 然ニ和平あり古人黃連解毒湯  
 成用ハ恐クハ驟ニ寒涼成用カバ惟  
 熱毒を伏して出ると快くはらる

のそみわくは熱毒を去グ爲り抑  
 れ藏腑不舒し或ハ肚痛ニ腹脹内  
 潰て死セラ者少をわり人豈此方を  
 用ケラの穩當あるや如や若巴と成  
 得てして黃連黃芩黃柏成用ケラ  
 ことわくハ酒少ク炒用カ其寒涼乃  
 性成制し其上行の熱を助ベと  
 云り

右加減乃法

身乃熱壯盛多ハ葛根前胡成加  
 へ○毒盛ニ綿密ありハ荊芥牛房  
 子成加へ○渴セるハ天花粉竹葉  
 滑石と加へ○小便尿血ハ犀角山

梔子を加へ○大便秘小犀角黄  
連或ハ桃仁加へ○吐血一乾嘔  
小ハ黄连犀角を加へ○紅斑以發せ  
る小犀角黄芩黄柏山梔子玄参以  
加へ○小便赤小ハ山梔子を加へ○小  
便短く溢る小ハ猪苓澤瀉以加へ  
○小便秘る小ハ滑石瞿麥を加へ  
○大便秘る小ハ枳殼前胡以加へ  
○大便秘して喘小ハ枳殼前胡大  
黄以加へ○煩燥る小ハ麥門冬天  
花粉以加へ○煩燥渴き狂亂譫語  
をる小ハ知母麥門冬石膏を加へ○嘔  
き吐小ハ猪苓澤瀉黄連を加へ○咽喉

痛むハ甘草牛房子薤白以加へ  
○泄瀉ハ猪苓澤瀉防風以加へ○  
嘔くハ陳皮以加へ肯腎

太乙保和湯

專血熱乃痘瘡以治ハ十神解毒湯  
以服して後熱瘡悉去内外和平工  
なりて紅點を見一三日乃後易ら  
せ長大粗肌の者少と以用ゆら  
時ハ能元氣と保和し血以活し毒  
と解し痘以助て漿と成痂易く  
落易し同上

- 桔梗 紫草 川芎 山查子
- 木通 人參 红花 生地黃



甘草 糯米 五十粒

右燈心七根姜一片入水煎

便澁り腹脹一ハ大腹皮ハ加ハ○繁

紅潤ハ○當歸ハ○出

て快ハ○牛房子ハ加ハ○陷

塌ハ○黃芪ハ加ハ○痛ハ○ハ

白芷ハ加ハ○勻ハ○防風ハ加ハ○

水泡ハ○白芍藥ハ加ハ○嗽

一ハ五味子麥門冬ハ加ハ○渴ハ一ハ

麥門冬ハ加ハ○痒ハ一ハ白芍藥ハ加ハ○

加ハ○一 同上 又云漿足ハ此方ハ

用ハ○禁ハ○同上

羌活散鬱湯

實熱壅盛ハ詩

過表ハ達ハ○氣粗ハ

喘滿ハ腹脹煩燥ハ狂言謔語ハ睡

臥寧ハ大小便秘ハ毛豎面浮

眼張ハ怒ハ○如ハ○用ハ○神効

○并ハ外風寒ハ○搏ハ○出ハ快ハ

らハ○治ハ○同上

防風 羌活 白芷 荊芥

桔梗 地骨皮 川芎 連翹

甘草 大腹皮 牛房子

紫草

右燈心十四根ハ入水煎

○益元透肌散

專擁執ハ乃痘瘡ハ治

以羌活散ハ湯ハ以服ハ後擁瘡ハ悉

開き氣血和平し見點三四日乃後  
 肥大なりし者漿液成らる者  
 此は用ゆる時能氣と毒を解  
 し肌と透し元陽は領出して瘡を  
 助け漿液成て膿窠と結び易し  
 加減は太乙保和湯と同ト漿足乃  
 後ハ別ト保嬰百補湯なり方百世テ同上  
 桔梗 紫草 川芎 山查子  
 木通 人參 甘草 牛房子  
 蟬退 陳皮 糯米五十粒  
 右燈心十四根棗二ツ入水煎

○

九味神功散 痘出て毒氣太盛  
 血紅一片地界は分たて蚊蚕種の

吐瀉七日以前乃諸証用之 濟世  
 黃芪 人參 白芍 紫草  
 紅花 生地黃 牛房子  
 前胡 甘草

右水煎

熱甚しきハ黃芪黃連各一ト以  
 加へいぼ退る者ハ大黃と加之  
 ○驚あつらふハ蟬退翅足を去して一  
 箇と加ふ○痘出て三日乃内頂陷  
 じ者ハ虚よりし神功散を以て  
 血と活し火と退くべし○若四日  
 以前虚証ありて其色黒く慘しハ

小兒周法已

○痘

保元湯ホゲンユウ 方良ホリヤウ 肉桂ニクキを加ふ○若  
色白シロイロく光者ヒツクメハ寒サムイなり○乗ノリせらる。  
神功散シコンサン 肉桂ニクキを加ふ○腹ハラ乃  
痛イタシむ者モノハ毒盛ドクモリなり○神功散シコンサンと用  
ぶ○面紅退オモロコシりて地界分チカイたげり  
者モノハ神功散シコンサン 前胡ゼンコを加ふ○吐ト  
せらる者モノハ毒盛ドクモリ 火炎ヒエンに乗ノリせて宣ノゾク  
ふ○神功散シコンサンと用ぶ○泄瀉セリヤせら  
る者モノハ火盛ヒエン 奔越ベンエツせらる者モノハ神功  
散シコンサン 升麻シヨウマを加へて以て提ヒツぐへ  
○痰タニある者モノハ白附子ハクブシと用て磨スリ服  
し切キふ二陳湯ニチンユウと用ぶ○陽明ヤウメイ乃  
經キョウとして燥サカシく孤陽無陰コヤウムイオンとして施セ

化カゆると能ノはげらるべし○嗽セウふ者モノハ杏仁  
乃前湯ノゼンユウ 宜ヨクし白附子ハクブシを磨スリして服  
ぶ○遍身疼痛ヘンシントウツウせらる者モノハ木香キコウ一  
味ミは以て磨スリ服ハクして即止ソクトメ○痘湯トウ  
と發ハツせらる者モノハ神功散シコンサンを服ハクして渴カく  
げらる者モノハ或アル尚渴シヨウカクく者モノハ紅花子コウカシ一味  
と用て煎湯ケンユウして飲ノミ若子ニヤクシらくハ  
紅花コウカと用ぶハクも亦可マタリなる者モノハ牛房子ウシバシに  
加へて尤モトモト妙ミヤウなる者モノハ汗アセ出て止トメらる  
者モノハ身ミ已マ了ラ涼乃血リョウノケツハ氣キの溢ユルりて隨ツ  
たる者モノハ當歸トウキ 五イ苓リョウ 黃芪ワウキ 三サン 酸棗仁サンソウジン 炒シヤウす  
共トモ一服イツボクとして水前スイゼン温服オンボクせしむ  
立タところ止トメ○痘トウの色白シロイロハ氣虛キキョ

白濁ハクダク

〇重オモシ

一屬也。此ハ氣ヲ補フと主とし、初  
ら出る時、色白き者ハ大虚あり、大  
ハ一氣血ヲ補フ也。人參、白朮、黃  
芪、當歸、川芎、升麻、葛根、木香、甘草、乃  
類、大便滑泄をり、え、訶子、肉豆蔻と  
加之。○痘の色黒きハ血熱ノ屬也  
こハ血と涼をり、と主とし、初ら  
時、色黒きハ大熱なり。宜しく毒と  
解之。一、黃芩、黃連、黃柏、共酒  
浸し、炒。牛房子、紫草、升麻、葛根、防風、  
荊芥、甘草、人參、黃芪、乃類、以用之。  
○痘瘡紫黒、乾枯し、變じて黒きハ  
腎ノ歸し。身乃熱をり、と火をて、

磨之。冷水にて服せ、こハ回生乃妙  
あり。○痘瘡初ら出る時、光壯ふと、  
忽然として黒く陷し、心煩燥、急氣  
喘、妄言、鬼神、見がごとくあり、ハ人  
乃牙齒、以焼て、性を存し、末として、  
酒にて調服せ、但し齒一ツを一服  
とせ、一。○初ら出る時、多く驚搐  
或生せば、急に導赤散、方寸、以て、  
疎通せ、一、木通、甘草、防風、生地、黃  
黃連、同く用之。再び辰砂、以加、調へ  
服せ、一、須臾、ふして、救活し、疲瘡  
せば、此神功散、以服せ、一、百發して

見聞云記

百中なるを 同上

○痘出て快くくづる者乃五証

○一証小嚴寒乃時節ふして寒氣の爲り折く起發せると能はざる

者八宜一々寒散散と表を温むべし

冬三月寒甚しは時紅斑初れ見

ハまば五積散正氣散參蘓飲 方八九十三

楊氏が調解散陳氏が木香散小方鼻先

宜し 正傳

○五積散 蒼朮一分 乾姜炮厚朴各四分

白芷 川芎各三分 芍藥 茯苓

炙甘草 當歸 肉桂 半夏各二分

桔梗一分 陳皮白朮枳殼

麻黃各一分

右肉桂枳殼の二味別よ末と

外乃十三味慢火みて炒色を轉

ぜし免攤冷し次よ二味の末

入一服とし水一盞半姜三片入

煎して一盞不至り熱服は同上

○正氣散 厚朴 半夏各一分半

陳皮 藿香 白朮各半

炙甘草 三分半

右姜三片棗一ツ入水煎

○調解散 青皮 陳皮 枳殼

桔梗炒 人參 半夏 川芎

木通 葛根各四分 甘草

紫蘘 各二分

右姜二片棗一ツ入水煎

○一証不炎天の時節ふして煩き  
渴き昏迷し痘出て快くしづむ者

ハ辰砂五苓散以生地黃麥門冬の  
煎湯少く調へ用ひし熱甚しき

不ハ小柴胡湯より生地黃を加へ煩き  
渴きて大便實なる者ハ人參白朮

湯輕き者不ハ人參竹葉湯より生  
地黃以加へて煎服せし辰砂五

苓散ハ五苓散より方々辰砂を加へ  
細末するなり同上

人參 各一分 半夏 八分 甘草 五分

右姜棗以入水煎

○人參白朮湯 知母 六分 甘草 二分

石膏 一兩二分 人參 二分  
粳米 五勺

右水煎米乃熟せし後待て温服以

○一証不涼藥以服して脾胃を損  
傷し或ハ胃虚して吐利する者ハ

中以温り氣を益べし理中湯以  
夏人丁り用ひ吐利甚しき不ハ附子を

加ふべし或ハ陳氏異功散 方々夏人丁 木  
香 香薷 九以用ひし同上

○肉苳蔻丸 木香 砂仁 白龍骨

訶子肉 各五錢 赤石脂

枯白礬 各七錢 肉苳蔻 五錢 煨

右細末 麩糊 黍米 大

丸 三十九丸 五十九丸

至るまで 異功散 煎 送下

一証 或ハ血疱 成 半分尚

是紅點 或ハ毒氣 發越 する

透らば 必也 食 能

大便常 乃 者ハ 半ハ裏

温 半ハ助養 劑 用 宜

四聖散 方 用 加減 之

及ハ紫草 木香 湯 方 草 絲瓜 湯 阮

氏 萬全散 楊氏 安班 湯 小宜 同上

○ 絲瓜湯 絲瓜 幾箇 右皮子 煨 連 煨 性 存 未

一 毎服 一抄 時 米湯 用 調

服 或ハ紫草 甘草 乃 煎湯

用 調 服 防風 人參

○ 阮氏 萬全散 蟬蛻 各等分

右 毎服 四錢 水 一盞 薄荷 三葉

を 入 六分 煎 用 熱 實

者ハ 升麻 加 一証 外實 乃 人皮 膚厚

肉 腠 密 毒氣 以 泄

因 出 快 者 消 毒

飲方百四 透肌散トウキサン 宜ヨク 若大便秘

結ムス 毒飲ドクイン 大黄山梔子ダイサンシ

加クハ 煎服ケンボク 痘出トウシュ 太稠タイチウ

犀角地黄湯セイカクヂョウ 方百九 解毒防風湯ゲドクボウフウ

宜ヨク 血氣不足ケツキブツ 十奇散ジュキサン

宜ヨク 咽嗑ノドヒキ 利リ 如聖湯ニョウジョウ

枳殼薄荷シキボウ 加クハ 用ヨウ 口中クチュウ

氣熱キネツ 咽痛ノドイタム 口舌クツツ 瘡疥ソウセツ 生ナ

露飲ロウイン 子コ 用ヨウ 同上

透肌散トウキサン 紫草茸シソウキョウ 綠升麻リョクシヨウマ

甘草カンサウ 各一カクイチ 粳米キョウマイ 五十粒イソリツ

右水煎ミナモト

解毒防風湯ゲドクボウフウ 防風ボウフウ 一イチ 地骨皮ヂコウヒ

生黃芪シヨウキョウ 芍藥セキヤク 薊芥キヤク

牛房子ウシノボ 炒シロ 各五分カクゴフブ

右水煎ミナモト 或アル 未ミ 温水ウンスイ 調テウ

服ボク 亦可ヤク 亦可ヤク

十奇散ジュキサン 黃芪キョウキ 人參ニンジン 當歸トウキ 各二カクニ

厚朴コウハク 桔梗キキョウ 各一カクイチ 桂心ケイシン 三分サンブ

川芎センキョウ 防風ボウフウ 甘草カンサウ 白芷ハクシ 各一カクイチ

右末ミナモト 一イチ 每服マイボク 一イチ 或アル 八ハチ 二ニ

温酒ウンシュ 少シウ 調テウ 服ボク 以ヨリ 水煎スイケン 以ヨリ

用ヨウ 以ヨリ 亦ヤク 可カク 也ヤ

如聖湯ニョウジョウ 桔梗キキョウ 二ニ 甘草カンサウ 一イチ

一方イツフ 小シウ 牛房子ウシノボ 麥門冬マクモントウ 各二カクニ 加カク

右水煎ミナモト



○甘露飲子 生地黃 熟地黃

天門冬 麥門冬 枇杷葉

枳殼 黃芩 石斛 山茵陳

甘草

右水煎食後温服

○痘出しく三日小生死と決せ

例痘出て頭面う稀少く胸背ふハ

皆あき無しく根窠紅潤頂突

く手は碍り水珠乃どく光澤ある

者ハ藥液用おむしく吉なき○痘

出る時腰腹疼く止む口乃氣大

ひ臭く痘乃色紫黒色ある者ハ決

して死せると知へ○痘出て其色

白く皮薄しく光り根う全く紅色

あく或ハ根は微く紅色あきどと三

五日ふしく菘豆乃どいあきハ決

して膿液貫し能ハば後う一泡の

清水を成し擦破りて即死ハ其好

者ハ因て妄ふ下藥液與ふとんハ

○痘出て頂起ると能ハば湯泡

及び燈心火あて焼がどくある者ハ

十日乃後う痒場しく必死と知

べ○痘出て口鼻耳焔紅小して

血止けら者ハ死ハ○痘出て紅斑

斑生じ絞ある者ハ六日乃後決して

死ハ○痘出て黒斑を生じ悉の状

乃どく肌肉塊成て黒き者ハ即  
時死せり知べし 濟世

○起脹

○紅點或見し者三日乃後先出  
る者先起脹後出る者後小  
起脹根窠紅く肥満光澤を以て  
面目漸腫期は依て灌漿一便常  
のどく他証なき者ハ療治せらよ及  
ばん若起脹せらる者あるハ或ハ元  
氣本を弱き者因て毒液送るこ  
能ハ或ハ雜証阻滯るとりて升  
發せると液得しをばん其是發熱  
紅點を見ハその時療治は仕損

なるを爰了於て急を圖て治せ

ばん後治しごとく保赤

○保元湯 或ハ參芪飲と名く專

元氣虛弱精神倦怠肌肉柔慢面

青白睡卧安靜ふしと振らる者液

治し已出るといまでも出らる液分た

ど皆治し 肯腎

人參一ネ 黃芪二ネ 甘草五分初

生して用ぬ出定る

右姜一片入水煎

楊仁齋曰能元氣益神益火とハ更め

て保元湯と名く蓋し元氣虛弱乃

者の爲り立ちたるを後世痘と治せ

者多くあまは主として元氣虚實  
乃異と分たせ大槩血熱毒擁の症  
不用は是實は以て實は攻音候ら  
づらんや同上

〇濟世全書保元湯乃加減ふ

〇若額起脹らふハ川芎六分は加  
へて引と一〇面部ハ升麻四分と  
加へて引と一〇胸膈ハ桔梗四分  
は加へて引と一〇腰膝ハ牛膝四  
分は加へて引と一〇兩手ハ桂枝  
二分は加へて引とせ

〇二日ふして痘乾き紅潤少くハ  
保元湯ハ肉桂は加へ兼て血は活

當歸白芍は加へ若毒ありハ玄參平  
房子を加へ氣は勻らふ陳皮を加  
へ

〇二三日根窠圓ありとらふも頂  
陷む者ハハ川芎肉桂は加へ

〇四五日根窠起脹らふとらふも色光  
澤あり者ハ氣虚ハ血盛ありとら  
ふ藥肉桂糯米を加へ

〇五六日氣盈血弱く色紅紫ありハ  
木香當歸川芎は加へ

〇五六七日氣交り旺せぬ血歸附  
せぬとらふも漿は成ると能はらふハ急  
ら肉桂糯米は加へて其漿と成は助

くび

○七八日毒漿了化せとくゞゞ満  
げら八氣血凝しとわきて犬ひふ振  
し能ぐとくは肉桂糯米液加ふ

○八九日漿冲満ぞ血凝し附り氣  
弱しく險多々糯米液加へ以て氣を  
助け其血液駕せべ

○十一二日氣血冲満し盡く漿濕  
潤しと飲らげら八内虚をある白米茯苓  
苓液加へ其收飲液助け結痂せべ

○十三四日毒盡く解せとくゞゞも  
漿老結痂乃際或ハ雜症わらふ保  
元湯を以て証隨之を加減し寒

涼大熱乃峻劑液用ゆると勿也

○十四五六日痂落潮熱し唇紅よ  
口渴き不食せらふ八四君子湯を方  
九中陳皮山查子黃連液加ふ若渴き

甚しは八參苓白朮散液方八九十丁  
用ゆ若熱解せらふ八大連翹飲方  
八十三丁黃苓液去て用ゆ

○凡痘瘡渴き液發せらる者八氣物  
て津液枯竭せらるるを保元湯に麥  
門冬五味子を加へ用わて即止若止

らる者八參苓白朮散一二劑おし  
即止

○痘六七日ふしと陷と起脹せ

黒色くろしきにしてし氣絶きせつと欲ちし膿うみは貫くわんる者ものは八穿山甲湯せんざんかうとうを泡うぶし淨きよめ黄色きせうに炒ちやう末まつとして毎服まいふく五分ごぶん木香湯もくかうとう或あるは紫草湯しそうとうを以て用もちぜし酒さけは入いれせ八更はつせいみ妙たみあり但たゞし瀉しゃわらふ用もちぜしととつり濟世せきせい

○肯腎大成けんじんたいせい參芪飲さんぢいん加減かへん禁忌きんぎ乃法はふ即保元湯すくほげんとうなり

○出いでて快くわいりしらるらるふふ川芎肉桂せんきうにくわいは加くふ蟬蛻せんたゐ牛房子ぎゆうぼうし人牙じんが紫草しそうを用もちぜししは禁忌きんぎ

○小便赤せうべんしやくきしし大腹皮たいふくひ茯苓ふくろうを加くふ車前子せんぜんし滑石くわくせき瞿麥くわくまく山梔子さんしは禁忌きんぎ

○大便溏たいべんとう白朮はくじやく茯苓ふくろう肉豆蔻にくとうを加くふ猪苓ちゆれい訶子かし龍骨りゆうこつ凡石ばんせきは禁忌きんぎ

○小便短せうべんたんく溢あふるるふふ大腹皮たいふくひ木通もくつうを加くふ浮石うせき瞿麥くわくまくは禁忌きんぎ

○大便實たいべんじつ秘ひするるふふ酒炒しゆちやうの當歸たうきを加くふふ大黃たいかう枳殼しやくせき生地黃じちかうは禁忌きんぎ

○泄瀉せつやふふ白朮はくじやく肉豆蔻にくとう木香もくかうを加くふ龍骨りゆうこつ石脂せきし枯凡こはんは禁忌きんぎ

○嘔吐おうとふふ干姜かんかう丁香ていかう香陳皮かうちんひは加くふ半はん夏げん枳しは禁忌きんぎ

○煩渴はんかくふふ交門かうもん芍藥しやくやく五味子ごみしを加くふ天花粉てんかふ葛根かくこん烏梅うまい半夏はんげは禁忌きんぎ

○食じきは減げんするるふふ白朮はくじやく人參じんじん神しん麩ふを加くふ山查子さんぢし縮砂しゆくさは禁忌きんぎ

○喘嗽少。杏仁。麥門冬。五味子。以  
加。天花粉。桑白。と禁じ

○發痒少。川芎。當歸。芍藥。白木。茯苓。  
苓。を加。姜。蚕。蔞。煎。以。禁じ

○痒。甚。き。少。外。茵。陳。以  
て。焼。あ。と。と。燻。べ。し。沐。浴。發。散。の。藥。  
以。用。ゆ。し。と。禁。じ。氣。脱。と。成。人。と  
を。恐。る。也。皆。腎。

○表。虚。し。て。起。發。せ。る。者。或。ハ。黑。く  
陷。む。し。甚。し。此。者。少。無。病。小。兒。乃

糞。以。焼。て。性。を。存。し。蜜。水。に。調。へ。服  
せ。べ。し。一。方。り。人。猪。猫。犬。乃。四

蠶。皮。臘。月。に。焼。て。灰。と。し。て。萬。全

散。と。名。く。正。傳

○黑。陷。二。種。氣。虚。し。因。て。毒。氣。盡

く。出。る。し。能。を。治。る。者。少。酒。炒。乃。黃  
芪。紫。草。人。參。等。乃。藥。同。上

○錢。氏。云。黑。陷。青。紫。の。者。ハ。百。祥

丸。あ。て。あ。せ。以。下。せ。黑。く。し。ら。る。者。ハ  
慎。て。下。せ。と。勿。逆。同。上

○百。祥。丸。ハ。太。峻。き。な。り。宜。風。散。と。以  
て。あ。せ。と。代。へ。し。同。上

○百。祥。丸。紅。牙。大。戟

陰。干。ふ。し。て。水。に。煮。軟。け。骨  
灰。去。日。り。乾。し。復。汁。孔。中。に。納  
て。煮。汁。盡。た。し。時。焙。乾。し。末。と。ん

右一味蒸餅めて粟乃大ひさよ  
丸毎服二十九赤芝麻湯めて

用ゾー

○宣風散 類證ふ氣怯き者欠木香

一ふ加ふとつと

方ハ四十三丁

右末として蜜湯又調へ服せ先

黑糞液下し次り湯糞と下して

後四君子小厚朴木香加陳米

湯めて用お胃を和し良久して

糞黄よ成瘡自出透る

○保嬰百補湯 痘瘡八九日漿足れ

後別り他痘無ハ此方以て氣血

以調理し脾胃を資養し實熱二

瘡よ拘らぬ皆ふと服せとべし惟

氣虚乃痘あ八九日の後本方り黄

芪ニ小肉桂少許加ふ若別瘡あ

らバ虚實以審み瘡よ隨ふて加

減せらる而已肯腎

當歸 芍藥 地黄 白朮

人參 茯苓 山藥 甘草

右棗ニツ入氷煎

○起脹三日小生死以決を例痘

三日乃後痘當よ逐べし漸起脹て

紅ふ綻ひ頂き肥滿光澤ある者ハ

必しも藥液用おせし此乃吉痘

なり

○痘起脹乃時成て根窠全く起脹也頭面皮肉紅く腫瓠瓜乃状のどくある者ハ決して死せると知べし

○痘起脹乃時遍身痘乃頂き皆黒く其中より眼あやそ針の孔乃どく

紫黒ある者ハ決して死せると知べし

○痘起脹乃時遍身痘胎伏して起脹らる者腹中膨脹して飲食せら

し能くハ氣促く神昏き者決して死也若六日乃内痘尚紅紫頂は満る者ハ即死ハ

○痘起脹の時腰腹痛遍身尚是紫點ふして蚊虫乃咬がどく全く起脹らる者ハ決して死ハ

○痘起脹乃時黒く陷之悶亂し神氣昏暗なる者ハ決して死せると知べし 濟世

○貫膿

○膿ハ血乃變ちる血あるとハ膿

あを血をきとハ膿無痘貫膿ハ至て大勢已り成が故也此時必膿

ある故以て主とハ膿ある時則生膿無とハ則死ハ必然乃理なる也痘

七日小至て若頂陷ハ膿貫と能らる者ハ必先り調治成失ふ由

小兒痘記

三



の故を急ぎ根窠を以て血聚り  
甚難証ありハ則大いに氣血を補ひ  
必漿の満足を俟て方り止斯の如く  
して猶回生せしむ若頂陷灰白多  
と此ハ氣血俱に離れて能爲る事と  
あり初出を七日に至て貫膿乃  
時とい其形圓滿光澤小して膿窠  
あり者ハ毒化して漿と成色緑水  
乃てくふして漸蒼蠟を變じ手  
以將て少きを按其皮堅く飲食  
二便常の如く更ニ他証なき者ハ  
吉方と保赤

○内托散 氣血虚損一或ハ風邪穢

毒冲傷し瘡毒液して内陷伏  
し出らざれば或ハ出て匂ひ快ら  
ざると治しあまは用ゆる時ハ血を活  
し氣を勻へ胃を勻へ虚液補ひ瘡毒  
を托て盡く出し收り易く厭面易  
し此方木香液去て十奇散或ハ十  
宣散十補散と名く濟世

黄芩 人參 當歸 各二分 川芎  
防風 桔梗 厚朴 白芷  
生甘草 各一分 木香 肉桂 各三分  
正傳小末と一毎服一分或ハ二分  
温酒にて調へ用ゆる水煎下用ゆる  
も亦可方と名く

齊世小紅紫黑陷熱毒ノ屬者者  
 ハ内托散肉桂と去て紫草紅花黃  
 芩以加ハ〇若淡白灰黑陷伏して  
 虚ノ屬者者内托ノ丁香以加て  
 裏を救ハ内托以て表攻攻ノ膿を  
 貫るくして膿以貫らる者小内托  
 小人參黃芪當歸を倍し煎熟して  
 人乳好酒を入温服ハ此を貫膿の  
 巧法なり〇凡膿以貫と肥満ま  
 ハ結靨易し若痘脹満光澤あり  
 とワゴも然も摸り見し軟ふして  
 皮皺む者ハ中小膿ありとワゴも  
 甚満足也後必收靨と能ふ

或ハ皆膿以貫間り少膿貫ら  
 る者ありハ終ニ虚寒瘡場ノ証ハ  
 變ハ内托散小氣血と補ハ膿以排  
 せら藥を加へて用ゆハ〇凡虚ニ  
 因て瘡以發し遍身抓破して膿  
 血淋漓て坐卧せらと能ふは者  
 ハ内托散小肉桂と去瘡以止る白  
 芷血を和せら當歸氣を調る木香  
 以倍し加ふハ氣行り血運て其  
 痒しと自止外ハ敗草散と方會  
 付ハ風以感ト變証と致し以て  
 痰上り咳嗽聲啞し以免る者  
 若遍身抓破して並ハ膿血清

あく皮白く乾き豆殻乃ごとくあり  
者ハ死ハ 齊世

○正傳ハ痒癢ハ形色脉乃上り於  
て虚實分つべし實多るとはハ脉

力あるを氣壯を虚をさるハ  
脉力無して氣怯し○虚痒ハ

實表乃劑以て凉血の藥を加ふ  
○實痒若大便通せざる者ハ大黃等

乃寒凉の藥を以て其結糞以下  
氣怯して輕き者ハ淡蜜水ハ滑石

乃末以て調へ鵝翎を以て瘡癩れ上を  
刷おふは潤せべしと有り

○又云凡血氣不足をば痒と多

此証所謂諸痒虚とせざるを十  
補散 方宜早 及木香散 方宜早 丁

香肉桂以加胃ハ肌肉を主すハ尤も  
四君子湯ハ川芎當歸木香紫草と

加へ煎服せらるに宜し或ハ毒物以食  
せらる因て痒とを作者ハ二物湯

百花膏或ハ四君子湯ハ解毒乃藥  
以加ふべし 正傳

二物湯 蟬蛻 洗ひ淨う二十一  
灸甘草一兩

右水煎時時あま以服せべし  
○百花膏 石蜜

多少不拘に湯と用て和時

時鵝翎以て瘡の痒き處と刷ハ加カも亦落易オチヨク

敗草散

屋蓋たる少くも或カ磨マ

乃背上ノあてても年久き茅の腐クたる

以用て洗アひ淨ス先焙り乾カく細末コ

帛シに裹マきあて以用て撲ツひ亦

牀席ト乃上リ鋪キも佳シき

○痒カし甚シき者ハ荊芥ハを以て紙ニ

に裹マき條ニとし火カ燃スし痒痘ノ

頭ヲを指定シちあて以刺ス或ハ乾カきたら

荷葉ヲを烟ニ小燒シあて以熏ス並ニ妙シ

なを又細茶ヲ當歸ヲ黃芪ヲを以て烟ニ

燒シあて以熏ス保赤

○灌膿三日不生死ハ決スちる例ハ痘

起脹三日乃後ハ不當シ根窠紅潤ハ

して膿ハ以灌リ充滿シて黄蠟色ハ乃

どく二便常ノのどく飲食減ルち

者ハ吉候ナるも必ズも藥ヲ以用シル

り及ババ紅紫黒ハして外削ルち如

く聲啞スちる者ハ死スル

○痘灌膿乃時ハ當テ純クあて清水ヲ

皮白クして薄ク水泡ト相似ル者ハ

三四日わきて遍身抓破リて死スル

○痘灌膿乃時ハ當テ痘中乾キ枯

全く血水無ク者ハあて以空痘ト名

く決スして死スル

○痘灌膿乃時當吐利止也。或  
二便下血而下乳食化也。痘爛  
盡膿者決して死也。

○痘灌膿の時當て二便通ぜ  
目閉聲啞腹中脹滿一肌肉黑者  
ハ即死也。濟世

○收靨

○痘十日不至て血盡毒解し其膿  
漸乾き蒼蠟色乃じく。或ハ葡萄色  
の如くあして上ノ鼻乃兩傍或ハ  
面部を收起て下胸腹に至り然  
して後額の上と脚乃背と齊く結  
靨飲食二便常乃じくある者ハ

吉也。或ハ手足乃心或ハ手の指乃尖  
或ハ陰上先收る者俱吉。上とを靨  
て下不至る者順にして下とを收  
て上に至る者逆と知べし。○人中ハ  
任督二脉交會乃衢乃總ト痘  
初先て出るとを收る不至るまで共  
此人中乃部位不先見る者ハ佳也。  
あは陰陽和暢をもつたをも  
人中ハ鼻乃下陷るる處あり保赤  
○背腎不云落靨而後痘痕雪百  
ふして全く血乃色無者ハ死以急  
了氣血以補脾胃と養あべし  
○木香散 灰陷黑陷嘔吐白陷表

虚といふ嘔吐甚し比ふ白豆蔻以  
加小濟世

黄芩 白朮 白茯苓 半夏  
厚朴 木香 訶子 前胡 各一  
陳皮 八分 人參 五分 丁香 五粒

右姜沃入水煎

○腹脹て渴する者○或ハ瀉して  
渴する者○或ハ足乃指冷て渴す  
る者○或ハ驚悸して渴する者○  
或ハ身温くもして渴する者○或  
ハ身熱し面赤白色ふして渴する  
者○或ハ寒戰して渴する者○  
或ハ氣急り交牙して渴する者

○或ハ飲水し轉渴止むる者已上  
乃九症即熱ふわは脾胃肌肉虚  
し津液衰ひ少きが故なるも木香散と  
用之し若愈らるふ更り丁香肉  
桂枝加へて多く煎服し丁香裏枝  
攻肉桂ハ表を發せ表裏俱に實し  
瘡痒場致らぬ喘て渴する死に上  
○正傳入門等り載たる陳氏が木  
香散ハ 木香 大腹皮 人參  
桂心 青皮 赤茯苓 前胡  
柯子 半夏 丁香 甘草 各三分  
右姜三片 棗一ツ入水煎  
○回陽酒 痘虚寒不屬し八九日

色光白水泡乃どく項陷之根白く

痒場して咬牙一寒戦をるの症

治毛 濟世

鹿茸 酥めて炙 大附子 黄芪 炒

當歸

右判之酒ふて煎じ用ひ兼らよ

痰嗽わしく半膽星以加ふ

○異功散 寒戦咬牙一痒場して泄

瀉をる以裏虚とい瀉甚しきあり

肉豆蔻以加ふ同上

大附子 人參 五分 白朮 白茯苓

陳皮 半夏 肉桂 厚朴

當歸 木香 一ム 丁香 五粒 肉豆蔻

右姜二片 棗ニツ水煎

正傳入門等り載たる陳氏が異功

散今と同じ但し料目異なるを正傳

あり各三分とあせわを

○按むる陳氏が木香散異功散ハ

乃素問從治の法又あせを熱因熱

用といふを益一痘瘡乃熱毒内

了拂爵して起發せると以得らる

少る丁香附子木香肉桂豆蔻等の

辛散劫爵の劑一二服以用て劫ら

一開き内は爵せらる者盡く藥氣を

因て外は發越をせしり陷伏灰白

色乃者皆翕然としく紅活凸綻し

て内<sup>うち</sup>遺邪<sup>いせ</sup>あり切<sup>き</sup>不<sup>ず</sup>劑<sup>ざい</sup>故<sup>ゆ</sup>過<sup>す</sup>てと  
勿<sup>な</sup>劫<sup>げつ</sup>して起<sup>た</sup>らざる者<sup>もの</sup>も亦<sup>また</sup>多く  
與<sup>あ</sup>ふ危<sup>あや</sup>しむべ<sup>し</sup>多<sup>おほ</sup>死<sup>し</sup>時<sup>とき</sup>其<sup>その</sup>毒<sup>どく</sup>轉<sup>てん</sup>して  
黑<sup>くろ</sup>爛<sup>らん</sup>故<sup>ゆ</sup>増<sup>ま</sup>咽<sup>おん</sup>閉<sup>へい</sup>聲<sup>せい</sup>沈<sup>ちん</sup>して死<sup>し</sup>に 正傳  
○漿<sup>じやう</sup>故<sup>ゆ</sup>行<sup>かう</sup>漿<sup>じやう</sup>足<sup>そく</sup>て疥<sup>せう</sup>を發<sup>はつ</sup>て黑<sup>くろ</sup>疥<sup>せう</sup>  
痘<sup>とう</sup>故<sup>ゆ</sup>認<sup>にん</sup>定<sup>てい</sup>する或<sup>ある</sup>ハ黑<sup>くろ</sup>して硬<sup>かた</sup>く或<sup>ある</sup>  
ハ紅<sup>こう</sup>絲<sup>し</sup>あり或<sup>ある</sup>ハ大<sup>だい</sup>紫<sup>し</sup>泡<sup>ほう</sup>を有<sup>あ</sup>り未<sup>いま</sup>  
毒<sup>どく</sup>故<sup>ゆ</sup>解<sup>かい</sup>せざる者<sup>もの</sup>仍<sup>なお</sup>神<sup>しん</sup>功<sup>こう</sup>散<sup>さん</sup> 方<sup>はう</sup>百<sup>ひやく</sup>十<sup>じゅう</sup>个<sup>こ</sup>  
雄<sup>ゆう</sup>黃<sup>わう</sup>黃<sup>わう</sup>連<sup>れん</sup>黃<sup>わう</sup>芩<sup>じん</sup>大<sup>だい</sup>黃<sup>わう</sup>故<sup>ゆ</sup>加<sup>か</sup>へて煎<sup>せん</sup>服<sup>ふく</sup>し  
却<sup>かえ</sup>て點<sup>てん</sup>法<sup>ぽう</sup>を用<sup>もち</sup>ゆ雄<sup>ゆう</sup>黃<sup>わう</sup>一<sup>いつ</sup>分<sup>ぶん</sup> 咽<sup>おん</sup>脂<sup>し</sup>故<sup>ゆ</sup>  
研<sup>けん</sup>て重<sup>おも</sup>て水<sup>すい</sup>に浸<sup>ひ</sup>し濃<sup>こ</sup>くして雄<sup>ゆう</sup>黃<sup>わう</sup>の  
末<sup>ま</sup>故<sup>ゆ</sup>調<sup>てう</sup>へ疥<sup>せう</sup>痘<sup>とう</sup>乃<sup>すなは</sup>ち上<sup>かみ</sup>不<sup>ず</sup>點<sup>てん</sup>せざる時<sup>とき</sup>  
了<sup>り</sup>即<sup>すなは</sup>ち紅<sup>こう</sup>活<sup>かつ</sup>せ亦<sup>また</sup>神<sup>しん</sup>法<sup>ぽう</sup>也<sup>なり</sup>蓋<sup>おほ</sup>し雄<sup>ゆう</sup>黃<sup>わう</sup>ハ

能<sup>のう</sup>毒<sup>どく</sup>と抜<sup>ひ</sup>咽<sup>おん</sup>脂<sup>し</sup>ハ能<sup>のう</sup>血<sup>けつ</sup>故<sup>ゆ</sup>活<sup>かつ</sup>する也<sup>なり</sup>ハ  
乃<sup>すなは</sup>ち 濟<sup>き</sup>世<sup>せい</sup>

○九月十日水<sup>すい</sup>故<sup>ゆ</sup>回<sup>かい</sup>すの時<sup>とき</sup>元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>薰<sup>くん</sup>  
蒸<sup>じやう</sup>し眞<sup>しん</sup>陽<sup>やう</sup>運<sup>うん</sup>化<sup>か</sup>し其<sup>その</sup>水<sup>すい</sup>自<sup>より</sup>然<sup>ぜん</sup>消<sup>しょう</sup>  
鑠<sup>しやく</sup>しおき循<sup>じゆん</sup>環<sup>わん</sup>乃<sup>すなは</sup>ち妙<sup>めう</sup>理<sup>り</sup>也<sup>なり</sup>そき未<sup>いま</sup>  
曾<sup>そう</sup>毒<sup>どく</sup>故<sup>ゆ</sup>解<sup>かい</sup>せざる也<sup>なり</sup>此<sup>こゝ</sup>時<sup>とき</sup>  
了<sup>り</sup>至<sup>いた</sup>て水<sup>すい</sup>化<sup>か</sup>せると能<sup>のう</sup>ん<sup>ん</sup>及<sup>およ</sup>び  
胃<sup>い</sup>不<sup>ず</sup>歸<sup>かへ</sup>して伏<sup>ふく</sup>せる所<sup>ところ</sup>乃<sup>すなは</sup>ち毒<sup>どく</sup>と相<sup>あ</sup>遇<sup>ぐ</sup>  
て腸<sup>ちやう</sup>胃<sup>い</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に溢<sup>あふ</sup>し胃<sup>い</sup>乃<sup>すなは</sup>ち氣<sup>き</sup>既<sup>すで</sup>  
お虛<sup>きよ</sup>し水<sup>すい</sup>大<sup>だい</sup>いある時<sup>とき</sup>ハ土<sup>つち</sup>崩<sup>ぶ</sup>れし  
り泄<sup>せつ</sup>瀉<sup>が</sup>せざる者<sup>もの</sup>多<sup>おほ</sup>く異<sup>い</sup>功<sup>こう</sup>散<sup>さん</sup>を  
以<sup>も</sup>て豆<sup>まめ</sup>蔻<sup>こう</sup>故<sup>ゆ</sup>加<sup>か</sup>へて少<sup>せう</sup>量<sup>りやう</sup>を治<sup>ち</sup>し愈<sup>よ</sup>  
服<sup>ふく</sup>せざるハ愈<sup>よ</sup>瀉<sup>が</sup>し火<sup>ひ</sup>心<sup>しん</sup>胞<sup>ほう</sup>不<sup>ず</sup>動<sup>どう</sup>也<sup>なり</sup>



此知少時小腸從少毒毒一々  
陽明伏せ一先脾胃成受宜  
一々定中湯を以て治べし立ど  
あつり止也同上

○定中湯 眞黄土

眞正黄色ふしく雜りあき者一  
大塊碗の内に入百沸湯を泡し  
即碗を以て蓋し少しく出  
用少若冷傾りて蓋中ふ入外  
熱湯を以て少くは湯一兩酒  
蓋ふ朱砂の末五分雄黄末一  
右二味和勻へ黄土湯を少くは  
糖衣加へ用少く二服して即止

○煩燥悶亂發湯を少く定中湯よ

龍腦五厘加へ半房子湯を和服せ

べし同上

○附子理中湯 寒戰咬牙等乃証

宜し同上

大附子三片人参二片白朮二片

乾姜炙炒二片

右水煎

○十一二日ふしく血盡毒解し氣

調ひ漿足少く生自然乃理也

若濕潤して斂らざる者内虚也

異功散方真元丁丁香加へ收斂

痲子同上

○回天甘露飲 若毒以解 盡之也  
或ハ未解毒を經バ厭當を盡シ至テ  
發熱蒸蒸たる者ハ少シ以用之

砂糖 盡シ半分

百沸湯ヲ調ヘ一大碗以温服之

ハ立時熱退リ痘壓へシ萬ハハ

發シテ萬ハハ中ニ直ニ回天乃

カアセ 同上

○回水乃時ニ臨テ候テ血ト生テ

る藥以服過或ハ渴小因テ水漿を

飲過シバ以テ厭當レクシ致レ

其身を見リ熱多ク諸痘腥澤ト

ルト候覺ル者ハ宜ク附子理

中湯以方寸匕ニテ服シテ少シを燥シ

水トシテ盡ラシムベシ 同上

○厭當ヘキ時リ當テ腹痛ク厭當レ

其痛シ著テ中腕ニアセ乃熱毒凝

滯シテ瘀血痛ムト成也手拈散以

用之 同上

手拈散 牛房子ニホ白芍

山梔子 大黃 各一ホ 紅花 八分

肉桂 五分

右水煎

○結厭當ニ日小生死以決セラ例

痘結厭當乃時リ當テ色轉蒼蠟

小シテ紫葡萄の色以成者ハ一

二日小決して口唇乃四邊を靨  
腹中とる兩腿に至り然して額  
の上と脚と一齊く結靨皮落て  
愈

○痘靨乃時當て遍身臭く爛  
きて餅のごとくふして近くを  
づら者ハ死ハ

○靨面とせら乃時其痘一時ハ黒  
きハ靨ハハわらん火極きて裏衣  
攻らよして凶也同上

○結痂

○痘瘡灌漿満足し乾靨結痂期  
に依て脱落せらハ固ハ吉也然と

ども落ぬくして落ぬ以て綿延  
日久きに至り或ハ落て齊くら

者此時尤明く辨して治せし  
且痘後血氣已り損ト虚火熾を

易し因循して治失ふをくん  
他變を生ずること致ハ又曰痘

後乃餘毒尚藥を用ゆるとあハ  
宜しく清涼法以て之し若虚寒

泄瀉の外ハ温補せざるべ保赤  
○痘瘡收て後痂厚く落ると遅く

肉以離きて粘づる者吉也○痂落  
て癢紅色を帯て凹凸ありん更

他証あり飲食二便常乃どく多

者吉也。○自痘乃痂以食者他症  
あせとつども死せむ 同上

○痘已小結痂て落らる者ハ餘熱  
害成也。大連翹飲方全地骨皮  
を加ふ 同上

○遍身已焦落て頭面落らる者  
大連翹飲方全白芷方全加ふ 同上

○痘痂半月小至り或一月肉小著  
て落せ或ハ痒と發せらる者ハ血表  
發太過方全因て肌肉密方全収飲  
せらる力無故也。人參固肌湯方全宜

人參固肌湯 同上  
人參 黃芪 甘草 當歸

蟬退 各等分  
右糯米炊入煎服也

○痒と發し痂と剥去て或ハ血出  
或ハ出せ仍て復灌漿瘡疥方全  
く多る者ハ血熱方全氣虛也  
八物湯方全紅花紫草方全牛房方全  
加へて治方全 同上

○痂乾とつども但半邊掀起方全半  
邊ハ粘て落らる能ハ方全者ハ  
辛熱ハ藥方全用方全過方全熱方全留方全肌  
表方全在也。升麻葛根湯方全防

風荊芥蟬退連翹方全加へて肌表の  
熱方全去方全 同上

熱方全去方全 同上

熱方全去方全 同上

熱方全去方全 同上

熱方全去方全 同上

○壓て後癩白き者ハ血不足也

治セバ四十日改過とシテも還て

死セバ也痘漿水淡き因て癩癩

白し若漿充實とスルハ此証カ

急テ保元湯方ハ夏冬四物湯と合

白木陳皮紅花老米以加ふ同上

○結痂して悞て風寒ヲ犯ラシ惡

寒發熱スル者ハ補中益氣湯ニ宜

回春

○補中益氣湯 當歸 黃芪

柴胡 升麻 葛根 各一ネ

人參 甘草 各五分 白朮 八分

右姜以入水煎

○結痂の後虚煩スル者加味保元

湯依用シテ同上

○加味保元湯 黃芪 二ネ 人參 一ネ

山梔子 知母 各一ネ半

麥門冬 二ネ半 甘草 五分

右水煎温服

結痂乃後餘熱スル者ハ牛房

子一ネ半 白附 一ネ 以加ふ

○還元附 餘毒痘後乃餘症

○痂落て血氣尚虚し力無者ハ

調理セバハ八物湯或ハ十全大補

湯也亦可也 同上

○八物湯 人參 白朮 茯苓

川芎 白芍藥 熟地黄

當歸 各一各 甘草 五分

右姜棗以入煎服

十全大補湯 八物湯加黃芪肉桂

各一各以加少也

○元一還り 痧落餘毒ありて 藏腑

聚りしと覺へ時ふ復熱たりし

腹内疼痛せば牛房子飲を用ひ 回春

○牛房子飲 牛房子 前胡

黃連 黃芩 連翹 白附子

玄參 赤芍 各一各 羌活

防風 甘草 各五分

右水煎温服

○五福化毒湯 痘疹の後餘毒以治

せらふ神効あり 方八十四丁同上

○痘瘡ハ毒氣出べしと出ると

以得ば脾經より流る時ハ傷四肢

發して手腕膝腫痛も或ハ頭項

胸脇赤く腫る消毒飲小方夏寧宜

一或ハ五香連翹湯にて少く以治

まへ未膿と成らざる者ハ小柴胡湯

小方夏寧 加減して用之 重き者

ハ或ハ面赤く便秘結し渴嗽し睡

て驚き尿赤く澁らば十六味流氣

飲小附子或ハ大黃以加之 聖惠

○五香連翹湯 乳香 木香

沈香 丁香 連翹 射干  
升麻 木通 麝香 獨活  
大黃 桑寄生 各等分

右水煎 正傳

○十六味流氣飲 川芎 當歸

芍藥 防風 人參 木香

黃芪 桂心 桔梗 白芷

檳榔 厚朴 烏藥 甘草

紫蘇 枳殼 各四分

右水煎 同上

○痘後の壅毒ハ何ぞ乃經う發せ  
るしく液問を初先て紅腫と起す  
時即黑豆某豆赤豆乃三豆成以

て嚴醋小浸し研なる漿液鵝の翎

をあて刷ハ効あを 同上

○毒氣大腸に入ると尻大便膿血

液下し或腸垢を下し或大便

秘結せらるる犀角地黄湯代 友百九丁

用之し○身熱し煩渴せらるる黄

連解毒湯小宜し○熱盛るる者大

小承氣湯又宜し○下利せらるる者大

黄連解毒湯黄連阿膠丸駐車丸小

宜し 同上

○黄連解毒湯 黄連 一 小 黄芩

黄柏 山梔子

右水煎 同上

小承氣湯 大黃七分 厚朴

枳實 三分半

右水煎 同上

黃連阿膠丸 白豆蔻 茯苓

訶子 各一兩 黃連 微炒 二兩

右末 阿膠 一兩 醋 少 煎

和丸 粟米 乃 大 湯 下

一歲の兒 火 十粒 米湯 下

て用 類證

駐車丸 阿膠 當歸 各十五兩

黃連 三十兩 乾姜 泡 十兩

右末 阿膠 以 和 餅 下

成 麻子 乃 大 湯 下 用 正 傳

吹雲散 痘後餘毒眼 小入 醫 治

生 或 紅 或 白 腫痛 治

濟世

黃丹 水飛 一 輕粉 三分

龍腦 一厘

右末 鵝管 吹入 乃 內

吹入 但 左 眼 患 右 眼

耳 吹入 右 眼 患 左 眼

耳 吹入 一 日 夜 三 度

兼 後 乃 藥 服 之

治 之 遲 愈 之

一方 黃丹 輕粉 各 一 末 吹

前法 吹 効 之 一方 雄



黄麝香少 以加尤 如方 也 同上

化毒散 痘後乃餘毒醫と生と 以治以 同上

當歸 川芎 赤芍 生地黄

防風 葛根 菊花 天花粉

蟬退等分 谷精草倍一用也

右水煎赤腫痛む之黃連出挽

子と加へ醫ふ木賊以加ふ

決明散 痘疹眼ふ入以治以

草決明 赤芍 天花粉

甘草各等分

右末として食後茶清を調へ

用也

撥雲散 治前も同ト 同上

羌活 防風 柴胡 炙甘草等分

右細末一水煎或薄荷汁茶

清或菊花苗乃煎湯を用也

亦と亦可也

退翳散 痘疹目入以治以 背腎

人參 牛房子等分

右末一每服一匙糯米飲を

用也

蟬菊散 班瘡眼入或ハ病後翳

障と生む以治以 類證

蟬退 白菊花等分

右每服二匙水煎蜜入煎也

乳食乃後了與之。屢驗しわを

一方 痘後乃翳眼治し 濟世

免糞

右四五丸を收來て水煎し用し

○痘後兩目開くも明は見しとを惡む

あはは羞明といふ。惟暗き處に向て

敢開也。涼肝明目散は用て治せし

○若暗き處に向ても敢開るは者

ハ。望月砂散は以て治せし 保赤

涼肝明目散 當歸 龍膽草 酒洗

蜜蒙花 柴胡 川芎 防風

黃連 酒小浸し

右各等分 積猪肝湯に煮煎服し

○望月砂散

蜜蒙花 酒洗 五ノ 蟬退 五ノ

望月砂 一兩

右共小細末し。積猪肝一兩を彫

て竹刀あて披き破り。藥一ノ成

肝内に入水にて煮熟し。汁を飲

肝は食うて効あり

○一方 痘後乃失音治し 濟世

天花粉 桔梗 白茯苓

柯子肉 甘草 石菖蒲

右末し水に調へ半匙碗乃内小

入外小竹七莖黃荊七條を以て

縛して一束とし火に點し煎じ

○ 卧時了臨て服せ下し

○ 麥門冬飲 痘毒發熱し湯と作咽

痛む以治し 壽世

麥門冬四分 黄芩三分 甘草五分

人參 玄參 各三分 金銀花五分

右水煎咽痛むに桔梗五分加ふ

○ 清金散 痘乃餘毒脾肺を有る者

ハ咳嗽以發し此湯不宣し同上

陳皮中半夏中貝母上天花粉

麥門冬上桔梗上山梔子炒

黄芩各等分甘草生下

右水煎

○ 射干湯 痘疹乃後身熱し大便硬

く口舌ろ瘡を生し咽喉腫痛む以

治し類證

牛房子一兩炒升麻 甘草

射干各三半分

右水煎

○ 犀角黄連湯 痘後乃牙疳以治し

黄連一不烏梅一箇木香二分

犀角一不水小磨也

右水煎藥乃好沸起る時臨て犀

角水以入用し一背腎

○ 走馬牙疳乃藥 牙疳臭く爛る

以治し同上

黄連一兩 白明砂一不 膽礬三分

龍腦五厘

右細末一牙疳乃上う搽之方  
み。人參白鹽梅燒て性成存ト  
を加

○痘疹愈て後忽り遍身青く或  
ハ黒く手足厥冷し口噤て涎喘  
かす。鋸乃如くある者お身中  
地風と名く益一瘡疹方不愈て  
榮衛尚弱し暴り時令乃寒暑風  
雨地氣入感し毒氣虛液襲ハ入  
あまを致ハ多を消風散ニハ蟬蛻  
ニハ右三服ハ分ち酒生姜薄荷の  
汁四五滴以湯入調へ服ハ二三服

ふして醒或ハ少一汗して解ハ或  
ハ再癩疹出しく愈 聖惠

○消風散

- 荊芥 羌活 甘草
- 人參 茯苓 防風 姜蚕
- 川芎 藿香 蟬蛻 各二兩
- 陳皮 厚朴 各半兩

右細末

○夾班附丹

○班ハ血乃餘。色點あをて頭粒無  
隨て出隨て没せら者也丹ハ片赤  
成。雲頭乃とくふして突皆血の  
太過ふして氣乃不及榮衛護り成  
失ハ血三焦り任せらと成致し

浮遊乃火皮膚の間を散漫せし  
 而已宜しを輕劑を以て其火邪  
 散し兼て活血解毒乃藥少て  
 あまを治ん玄參升麻湯石膏黃  
 芩荊芥芍藥川芎當歸加へて用  
 之し又或ハ結痂の後を發せし  
 者ハ餘熱肉分を煎熬し其班必爛  
 る黃連解毒湯方六百四十八  
 藥黃芩石膏加へ用之し甚き時  
 ハ大連翹飲方六百三十三用之  
 爛る處  
 小ハ生肌散を敷へし保赤  
 ○玄參升麻湯 玄參 升麻 甘草  
 右水煎

○生肌散 地骨皮 黃連 黃柏  
 五倍子 甘草 枯礬  
 右共り細末し之を油搽す  
 ○發班小ニわを陽毒乃發班ハ壯  
 熱渴燥し兩目火のこく脈洪し  
 かわる其色紅赤ある者ハ胃熱也  
 紫黑ある者ハ胃爛也一ハ則あま  
 下せしと早き故に熱虚る乗とて  
 胃小入一ハ則あま下せしと晚き  
 故に胃熱泄しを得ば皆内外熱  
 故に挾いて班を發せし也玄參升麻  
 湯白虎湯を 白虎湯ハ人參白虎湯の  
 人參を去也方六百三十三 服之  
 べし陰証乃發班ハ身小大熱あり

手足指甲共青、脈沈細、急其色微紅、あは無根、乃火胃、聚て獨肺、以熏、皮膚小傳へて、班を爲也、若妄、小凉劑、故用、以升麻、驚魚湯、と與へ、中液調、胃を温ま、其火自下、て班自退、同上

○升麻驚魚湯

升麻 川芎 川椒 驚魚 雄黄 甘草

右水煎

○夾疹

痘毒、臟へ出、疹毒、腑へ出、臟へ陰、屬、陰、血、凝、主、故、に、痘、ハ、形、あ、を、汁、あ、を、腑、ハ、陽、屬、陽、氣、を

主、故、小、疹、ハ、形、あ、を、汁、あ、此、皆、有、生、乃、淫、火、中、本、尋、常、に、並、ひ、出、る、者、少、非、惟、痘、出、乃、時、或、ハ、風、寒、腠、理、を、閉、塞、熱、氣、腑、毒、を、擊、動、ま、故、小、並、ひ、出、る、耳、此、亦、不、順、乃、証、也、但、臟、積、受、の、地、多、少、其、毒、を、受、と、最、深、と、以、腑、ハ、傳、送、乃、所、あ、故、其、毒、故、受、と、差、淺、と、以、是、以、て、疹、乃、發、ハ、輕、と、解、易、先、升、麻、葛、根、湯、以、方、全、テ、服、解、せ、ら、時、犀、角、地、黄、湯、を、百、九、丁、用、以、之、内、既、清、涼、あ、と、此、ハ、疹、隨、て、内

解して愈 同上

○錢氏曰。痘瘡ハ只出たし一般多  
者善凡痘已了形は見え其間碎  
密小して疹子のよくある者ふき  
疹は挾む也此火毒中小薰灼せら  
に由て乃故了疹はして外は挾出  
せしむ急は毒を解し疹子はして  
消散せし先痘單成しと得ハ可  
也。荊防解毒湯は用ゆる宜し若  
此は服して疹退らざる者凶乃兆  
也。夾斑と治同し 同上

○荊防解毒湯 防風 荊芥  
酒黄芩 酒黄柏 玄參

牛房子 升麻

右水煎

○麻疹

○痘ハ内實不宜ソ是ハ神劑は用  
之し。疹ハ内實は忌ハ只解散に  
宜し。惟初發乃時略相似耳既  
出らぬ後痘ハ氣を補ふて以て血  
滋生し。疹ハ宜しく陰を補ふて以  
て陽は制まへし何也蓋し疹熱  
甚しは時ハ陰分其熱煎を受て血  
多く虚耗せらゆは治せらふ清火  
滋陰液以て主とし少已其氣を動  
くまへらる若燥悍乃劑首尾深

内外科 易 根 湯 新 風 如

忌べし

○疹ハ發熱乃初欠多く傷寒不似  
 惟疹子ハ咳嗽噴嚏鼻清涕と  
 流し眼胞腫涙出面浮腫兩乃腮赤  
 惡心乾嘔吐異とせら耳但此候  
 を見らハ即是疹子也宜し々風寒  
 以避葷腥厚味を戒ら藥を以て  
 表散し皮膚以て通暢し膝理  
 開て疹毒出易くとせら宜し 同上  
 ○疹乃初欠起る呵欠發熱惡寒咳  
 嗽噴嚏流涕頭眩とせら者升麻葛  
 根湯小宜し 同上  
 ○升麻葛根湯方九十三

右生姜水煎し服し紫蘇薄荷を  
 加へ以て肌故解せ切ら大汗と  
 忌斑紅あらしら者亦宜し 同上  
 ○麻疹既ら出見ま一日ふし又  
 没ら者都ハ風寒の爲し沖き麻毒内  
 に攻若治せらま胃爛して死に消  
 毒飲方五豆厚 服せし熱退きて遂  
 不安し若麻見て三日退きて後風寒  
 以被らとせら亦消毒飲用ら  
 宜し 濟世  
 ○麻疹已ら出て復没し或ハ皆出  
 盡らと心慌哭啼止に十分乃危急  
 死須臾にわを或ハ下痢腹痛とせら



二仙湯と用いし毒也

二仙湯 黄芩 白芍 生薑 用之

右等分水煎温服ハ神乃也

○麻疹已り出て識語煩燥渴は

作者白虎解毒湯以用之 同上

自虎解毒ハ黄連解毒湯小方百葉本

石膏知母甘草と合し水煎

○麻疹已り出て大小便閉るは防

風通聖散以服之 同上

防風通聖散 防風 當歸 川芎

白芍 連翹 薄荷 麻黄 各四分

石膏 桔梗 黄芩 各八分

白朮 山梔子 荆芥 各三分

滑石 二升四分 大黃 芒硝 各四分

甘草 一升

右生姜水煎

○麻疹已り出て識語小便閉は

導赤散小宜し方六十八丁 同上

○麻疹已り出て泄瀉止らるは

苓散小宜し方八百七丁 若小便澀は

どくちち者或ハ小便通せらる者ハ

車前木通故加之 同上

○麻疹已り出て寒熱瘧に似は

柴苓湯以服之 同上

柴苓湯 柴胡 黄芩 半夏 減半

猪苓 澤瀉 白朮 白茯苓

甘草

右姜棗液入煎服之

○麻疹已出大便下血或小便

下血吐血衄血或八二便閉澀疹

疹稠密熱渴赤痛者犀角解毒

湯小宜一同上

○犀角解毒湯 犀角一兩無心代升麻

生地黃五分 牡丹皮一兩

赤芍藥一兩 黃連 黃芩 黃柏

山梔子

右水煎若吐血衄血炒山梔子

童便液加和服之

○發熱乃時遍身汗出者

毒汗從之散之玄府開之疹出

易鼻中血出者若毒血從之解之

俱小毒血止者若汗出者太多

血出者止之者此又火太過

津液妄行流之血妄行

致致之急當歸六黃湯

浮小麥加之以汗液止

茅花湯小參百草乃霜

加之以血以止遲

時汗出元氣虛血出

多精神散不洽之症

為和赤

當歸六黃湯 當歸 黃芩

黄芩 黄連 黄柏 生地黄  
熟地黄 各等分

右水煎

○茅花湯 茅花 當歸 牡丹皮

生地黄 甘草 各等分

右水煎

○麻疹前後潮熱わをて退らざら等  
乃症並下血虛血熱とい。四物湯以  
服まぐし 壽世

○四物湯 當歸 川芎 白芍

熟地黄 血虛火熱は用ら血熱火生を用

右水煎發湯火麥門冬犀角汁以  
加ふ○嗽火瓜蔓霜以加へ○痰あり

ハ貝母陳皮以加ふ

○麻疹正に出ら乃時飲食以進め  
ぞとつども但麻疹淡紅潤澤真正  
を得ハ善候為比蓋し熱毒未解セ  
て内小實熱と蘊めら自必しと食  
せば退きて後若食せぞハ四物湯を

神麴砂仁以加へ用ら六二貼小を

決して能食は若胃の氣虚せ者小

ハ少も地黄以下せし忌 同上

○麻疹既り出て已二三日は過て  
没せらこと能ら者ハ内小虚熱  
わを四物湯以用らぐし。失血乃症  
火犀角汁と加へて解まぐし 同上

○麻疹退きて後牙根爛き鼻血橫

行きもこしあふ並り失血乃在

以急に四物湯茵陳木通生犀角

乃類加へて小便を利せ一月上

○麻出乃時咽喉腫痛之飲食

せらし能はら者あ毒火拂辟

して上咽喉吹薰せ也甘桔湯に

方六分女參平房子連翹加へて用

ゆ小宜保赤

○疹出乃時咳嗽口乾心煩者

者ハあ毒心肺不在發盡は

る也瀉白散天花粉連翹玄參黃

連と加へ用ぬ或ハ黃連杏仁湯以用ゆ

小宜 同上

○瀉白散 桑白皮 蜜にて炙

地骨皮 甘草 各等分

淡竹葉 九片 燈心 牝根

右末し或ハ水煎りせるも亦可也

○黃連杏仁湯 黃連 陳皮

杏仁 麻黃 枳殼 葛根

右生姜水煎し服し瀉わらす厚

朴甘草加ふ

○疹出乃時自利止或ハ稀水

攻瀉せると頻なる最も惡候と

以但其疹を看し攻肝要と也若

遍身稠密太盛了或ハ紫色或ハ紅

色甚しき者ハ妨げど蓋一毒大腸ふ  
り色泄ハ非と此ハ餅一七解セハ惟  
平胃散ハ葛根連翹加へ以て解  
而巳疹一たび發一則ハ依て收り  
去ハ自然に瀉止若疹已り收りて  
瀉尤止む者ハ疹必未盡ハ再ハ平  
胃散に連翹黃連牛房子木通澤瀉  
加へ以て瀉分利セバ一同上  
平胃散 蒼朮 厚朴 陳皮  
甘草

右各等分姜棗煨入水煎

○疹出乃時曾瀉痢作未清解  
を経ハ疹退きての後至て變トク

休息痢と爲赤白以問ハハ裏急後  
重一晝夜度多く頻らる者ハ少  
餘毒大腸ふれを虚實を分て治セ  
べ一實を傷者ハ三黄丸以て瀉  
利一虚を傷者ハ香連丸以て瀉  
和一後ハ黄芩湯を以て血液養  
ハ氣を行ハて治セバ一同上

三黄丸 黄芩 蒸 黄連 炒

大黄 蒸

右各等分末ト糊にて丸ト梧  
桐子乃大いし一二十丸  
白湯以て用シ大小虚實以量て  
加減セバ一

香連丸 黃連一兩 吳茱萸五兩

右少水沃用て拌勻へ頓水内う  
滾ると半日取出して炒乾し  
茱萸を揀去て用ぬ。木香三兩  
加へ末し醋糊して丸し。米湯と以  
て用ゆ。大小依量て加減すべし

○黃芩湯 黃芩炒 黃連炒 當歸

川芎 人參 木香 服時臨て

青皮炒 枳殼 檳榔 甘草

右各等分水煎

○疹子没して後餘熱内う攻衣を  
楯林松摸り。譏語妄語神昏喪志の  
者ハ死ハ若熱輕しく餘毒未除

必先諸乃氣色成見て預め重  
戒防とつごも始終升麻葛根湯以  
以て主とく或ハ消毒飲方百中解  
毒湯方百中解 症う隨て選て用ゆ  
仍魚腥葱蒜乃物成忌べし 壽世

○水痘 俗ふりあへいも也

○水痘ハ正痘に似て仍身熱二三  
日小して出初先出らふ即赤小豆  
乃大ひさの如く皮薄して結痂  
中心圓暈更り少し出易く厭易  
濕被る時ハ結痂難し亦害  
を爲せ外症ハ兩眼水乃とく小麦  
湯不宜し入門

小兒療治調法記終  
 小麥湯 滑石 甘草 地骨皮  
 人參 麻黃 大黃 知母  
 羌活 葶藶 各二分  
 小麥七粒入水煎

小兒療治調法記終

正德五乙未年孟春吉旦

京五條橋通高倉西八入町

川勝五郎右衛門

書林

江戸日本橋南一町目

升屋五郎右衛門

追付婦人調法記板行

伊藤氏  
 處有



